兵庫県文化財調査報告　第308冊

加古川市

坂元遺跡 I

ーＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書ー

2006年12月

兵庫県教育委員会

兵庫県文化財調査報告　第308冊

加古川市

坂元（さかもと）遺跡 Ⅰ

－ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－

２００６年１２月

兵庫県教育委員会

航空写真

遺跡遠景（南上空から加古川平野、平荘湖方面を望む）

遺跡遠景（北上空から別府川下流、瀬戸内海方面を望む）

航空写真

遺跡遠景（東上空からＪＲ山陽本線沿いに加古川駅方面を望む）

遺跡全景（真上から）

遺物

古代の土器

例　言

1　本書は加古川市野口町坂元に所在する坂元遺跡の発掘調査報告書である。

2　この調査はＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴うもので、兵庫県東播磨県民局県土整備部加古川土木事務所の依頼を受けて、平成11年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が本発掘調査を実施した。

3　整理作業については兵庫県東播磨県民局県土整備部加古川土木事務所の依頼を受けて、平成17・18年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

4　本文の執筆は中川 渉が行った。ただし石器の作図・文章は上田健太郎による。編集は宮田麻子の補助を得て、中川が実施した。

5　調査・整理にあたっては、下記の方々および機関のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。
加古川市教育委員会、岡本一士・西川英樹（以上、加古川市教育委員会）、中谷悟史、前田修一
（敬称略、順不同）

凡　例

1　座標・水準高

図版に示す方位・座標は国土座標第Ｖ系に則っており、世界測地形への変換は行っていない。ただし世界測地系座標変換ソフト（TKY2JGD）を用いて、図版３に世界測地系座標との対比を示している。

水準高は東京湾平均海水準（Ｔ．Ｐ．）を基準とした海抜高度である。

2　使用地図

本書に使用した地図は下記の通りである。

第１図　国土地理院１／25,000地形図「加古川」平成14年11月１日発行
「高砂」平成17年９月１日発行

図版１　加古川市１／2,500地形図「粟津」「北野」平成７年９月修正

3　使用写真

本書に使用した航空写真は、富士測量㈱と委託契約を交わして作成したものである。

遺物写真の作成にあたっては、㈱アコードと委託契約を交わして、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において撮影した。

4　地区割り

調査区の西から10ｍごとに区分して１～７区と呼称し、遺構の記録・遺物の取り上げの際の便宜に用いた。

5　遺物番号

掲載した遺物の種類には土器・石器・金属器があり、報告№は土器が１～の通し番号、同様に石器がＳ１～、金属器がＭ１～とする。

6　土器の種別

土器の種別は実測図断面の色を、須恵器が黒ベタ、弥生土器・土師器・土製品が白抜きとすることで区別する。

本　文　目　次

第１章　遺跡の環境
　第１節　地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 1
第２章　調査の経過
　第１節　はじめに …… 3
　第２節　確認調査 …… 3
　第３節　本発掘調査 …… 5
　第４節　出土品整理・報告書作成作業 …… 6
第３章　調査の成果
　第１節　概要 …… 7
　第２節　飛鳥時代～奈良時代の遺構と遺物 …… 7
　第３節　弥生時代の遺構と遺物 …… 24
第４章　まとめ
　第１節　飛鳥時代～奈良時代 …… 29
　第２節　弥生時代中期～後期 …… 32
　第３節　結語 …… 33

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡（１：25,000）…… 2
第２図　確認調査と模式断面図（1/2,000、断面は1/40）…… 4
第３図　大型打製穂摘具の素材剥片と母岩の復元 …… 28

表　目　次

表１　掘立柱建物跡一覧表 …… 31
表２　掘立柱建物分類表 …… 31
表３　時期別の掘立柱建物跡 …… 31
表４　土器一覧表 …… 34－36

図　版　目　次

図版１　事業化以前の坂元遺跡周辺と微地形等高線図（1/5,000）
図版２　土地区画整理事業地内での本発掘調査箇所（1/3,000）
図版３　遺構全体図（1/300）
図版４　遺構分割図 １～３区（1/120）
図版５　遺構分割図 ４～６区（1/120）
図版６　遺構分割図 ７区（1/120、断面は1/40）
図版７　掘立柱建物SB01～02
図版８　掘立柱建物SB03～06
図版９　掘立柱建物SB07～08
図版10　掘立柱建物SB09～11
図版11　掘立柱建物SB12～13
図版12　掘立柱建物SB14～15
図版13　掘立柱建物SB16～17
図版14　掘立柱建物SB18～20
図版15　古代の土坑・溝・落ち込み
図版16　溝SD08
図版17　弥生時代の土坑・溝・落ち込み
図版18　土器(1)　1-28
図版19　土器(2)　29-53
図版20　土器(3)　54-64
図版21　土器(4)　65-80
図版22　土器(5)　81-89
図版23　土器(6)　90-109
図版24　土器(7)　110-131
図版25　土器(8)　132-139
図版26　土器(9)　140-150
図版27　石器(1)　S1-S2
図版28　石器(2)・金属器　S3-S5、M1-M2

写真図版目次

巻頭図版１　航空写真
遺跡遠景（南上空から加古川平野、平荘湖方面を望む）
遺跡遠景（北上空から別府川下流、瀬戸内海方面を望む）
巻頭図版２　航空写真
遺跡遠景（東上空からＪＲ山陽本線沿いに加古川駅方面を望む）
遺跡全景（真上から）
巻頭図版３　遺物
古代の土器
写真図版１　遺構(1)
１　遺跡全景（南東から）
２　掘立柱建物SB01～06（南東から）
写真図版２　遺構(2)
１　掘立柱建物SB07・08（西から）
２　掘立柱建物SB09～12、落ち込みSX02・03（西から）
３　掘立柱建物SB12（南西から）
写真図版３　遺構(3)
１　３・４区掘立柱建物群（南東から）
２　掘立柱建物SB13・14（南西から）
３　掘立柱建物SB13～17（南西から）
写真図版４　遺構(4)
１　３・４区掘立柱建物群（西から）
２　掘立柱建物SB16～18（南西から）
３　掘立柱建物SB18・19、落ち込みSX04（南西から）
写真図版５　遺構(5)
１　落ち込みSX04（南から）
２　遺跡全景（北西から）
写真図版６　遺構(6)

1　SB01　P1（南東から）
2　SB01　P2（南東から）
3　SB01　P3（南東から）
4　SB01　P4（南東から）
5　SB01　P5（南西から）
6　SB01　P6（北西から）
7　SB01　P7（北西から）
8　SB01　P8（北西から）

写真図版７　遺構(7)

1　SB01　P9（北西から）
2　SB01　P10（南西から）
3　SB05　P120、SB06　P42（東から）
4　SB08　P90、SB09　P106（南東から）
5　SB11　P203、SB14　P270（北西から）
6　SB13　P178（北東から）
7　SB17　P242（南東から）
8　SB18　P304（北西から）

写真図版８　遺構(8)

1　土坑SK01断面（北から）
2　溝SD01断面Ａ（北から）
3　落ち込みSX03断面Ｈ（南東から）
4　落ち込みSX03断面Ｇ（南西から）
5　落ち込みSX03　土器出土状況
6　落ち込みSX03断面Ｇ　土器出土状況（南西から）
7　落ち込みSX05（北西から）
8　落ち込みSX05断面Ｊ（南西から）

写真図版９　遺構(9)

1　溝SD08（南西から）
2　溝SD08北壁断面（南西から）
3　溝SD08南壁断面（北東から）
4　溝SD08北壁断面アップ（南西から）
5　調査区西端の段丘崖（南西から）

写真図版10　遺構（10）

1　土坑SK02上層（南西から）
2　土坑SK02下層（南東から）
3　土坑SK04（南東から）
4　土坑SK04土器アップ（北東から）
5　土坑SK04（南西から）
6　土坑SK03断面（北東から）
7　土坑SK05断面（北東から）
8　溝SD09K（東から）

写真図版11　土器(1)
写真図版12　土器(2)
写真図版13　土器(3)
写真図版14　土器(4)
写真図版15　土器(5)
写真図版16　土器(6)
写真図版17　土器(7)
写真図版18　土器(8)
写真図版19　土器(9)
写真図版20　土器(10)
写真図版21　土器(11)・金属器
写真図版22　石器

第１章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

加古川は河口部近くで大きなデルタを形成しており、その氾濫原の範囲は、左岸側は現在の別府川、右岸側は高砂市域の竜山の麓にまで及ぶ。別府川の河道より東側はいなみの台地に続く段丘面で、周期的に繰り返される海進・海退によって、海岸線と平行な段状地形を呈する日岡・野口段丘群が形成されている。野口段丘は第１～第４の４面に分類され、坂元遺跡は形成時期の最も新しい第４段丘の西端に位置する。

遺跡が立地する台地では、西端が別府川の段丘崖となって沖積平野を望み、東端の野口第１段丘の崖面下には新井用水路が通る。その間は平坦な地形で、別府川の支流である白ヶ池川が南西－北東方向の開析谷を刻んでいる。段丘上は水田地帯となっているが、中央をＪＲ山陽本線が横断し、遺跡の南側には国道２号、北側には加古川バイパスが平行し、東西交通の動脈となっている。今回の工事に絡んで計画されている東播磨南北道路が完成すれば、東播地域のジャンクションが誕生することになる。

第２節　歴史的環境

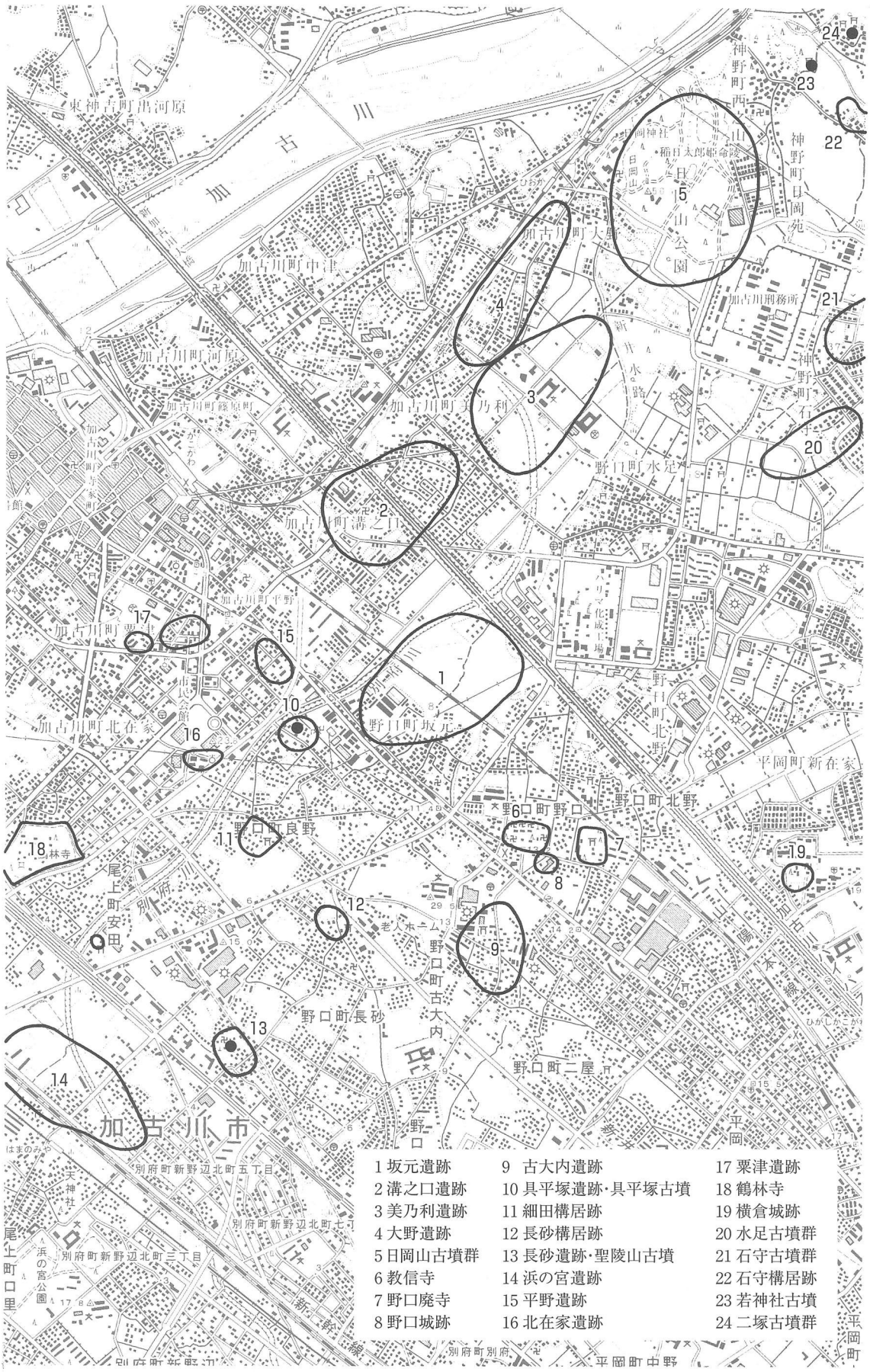
現国道２号の南側には古代山陽道、北側には近世西国街道が平行しており、常に東西の物流の幹線であり続けた地域である。古代山陽道沿いの１km東には「古大内遺跡(9)」があり、古くから播磨国府系の瓦が採集されている。周辺には「駅ヶ池」と呼ばれる池もあり、『延喜式』に記載された「賀古駅家」跡に比定されている。そこから山陽道をはさんだ北側には「野口廃寺(7)」があり、８～９世紀の瓦多数と瓦積基壇などが見つかっている。

別府川以西の沖積地では微高地上に多くの遺跡が点在する。「北在家遺跡(16)」では弥生時代後期の住居跡、平安時代の建物跡などが調査されている。「溝之口遺跡(2)」は弥生・古墳・奈良・平安時代にわたる大集落である。弥生時代では中期の居住域・墓域・水田域が調査されており、東播磨を代表する遺跡の１つである。奈良・平安時代には整然と配置された建物跡や墨書土器・石銙などが出土しており、官衙的な性格を帯びている。「美乃利遺跡(3)」は弥生・奈良・平安～鎌倉時代にわたる複合遺跡で、特に弥生時代前期に遡る小区画水田が広い範囲で調査されている。「大野遺跡(4)」は弥生・飛鳥～奈良・平安・鎌倉～室町の各時代にわたるが、特に鎌倉～室町時代には溝で方形に区画された屋敷地群が調査され、加古川の水運を利用した集落の１形態と考えられる。

以上のように加古川左岸では、段丘から沖積地の自然堤防上に弥生時代～中世にわたる遺跡が濃密に分布しており、下流域の中心部であるといえる。

参考文献

加古川市 1989『加古川市史』第１巻
加古川市 1996『加古川市史』第４巻　史料編Ⅰ
兵庫県教育委員会 1997『美乃利遺跡』兵庫県文化財調査報告第 165 冊
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2002『平成 13 年度年報』



第１図　周辺の遺跡（１：25,000）

第２章　調査の経過

第１節　はじめに

兵庫県東播磨県民局県土整備部加古川土木事務所は、ＪＲ加古川駅周辺の市街地再開発および南北交通の混雑解消を図るため、ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業を進めている。兵庫県教育委員会は計画の進捗に伴い、平成８年度以来事業地内における埋蔵文化財の調査にあたってきた。

事業地のうち別府川左岸の段丘上にあたる加古川市野口町坂元地内は、市内では数少ない圃場整備が未実施の水田地帯であった。同地では東西に横断するＪＲ山陽本線の高架事業と併せて、坂元・野口土地区画整理事業が具体化している。また国道２号と北播磨地域を新たに結ぶ、東播磨南北道路の起点ともなっている。

土地区画整理事業の立案に伴い、平成11年２月に加古川市教育委員会が埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、広い範囲で奈良時代を中心とする遺物の散布が認められ、当該地に遺跡が存在する可能性が高いものと判断された。

その調査結果を受け兵庫県教育委員会は、加古川土木事務所鉄道高架・東播磨南北道路対策室と協議を行い、まずＪＲ山陽本線等連続立体交差事業の範囲について、確認調査を実施することとした。

第２節　確認調査

遺跡調査番号　990161

調査担当職員　調査第２班　主査　甲斐昭光、臨時技術職員　川村慎也・田中秀明

調 査 期 間　平成11年６月29日～７月１日

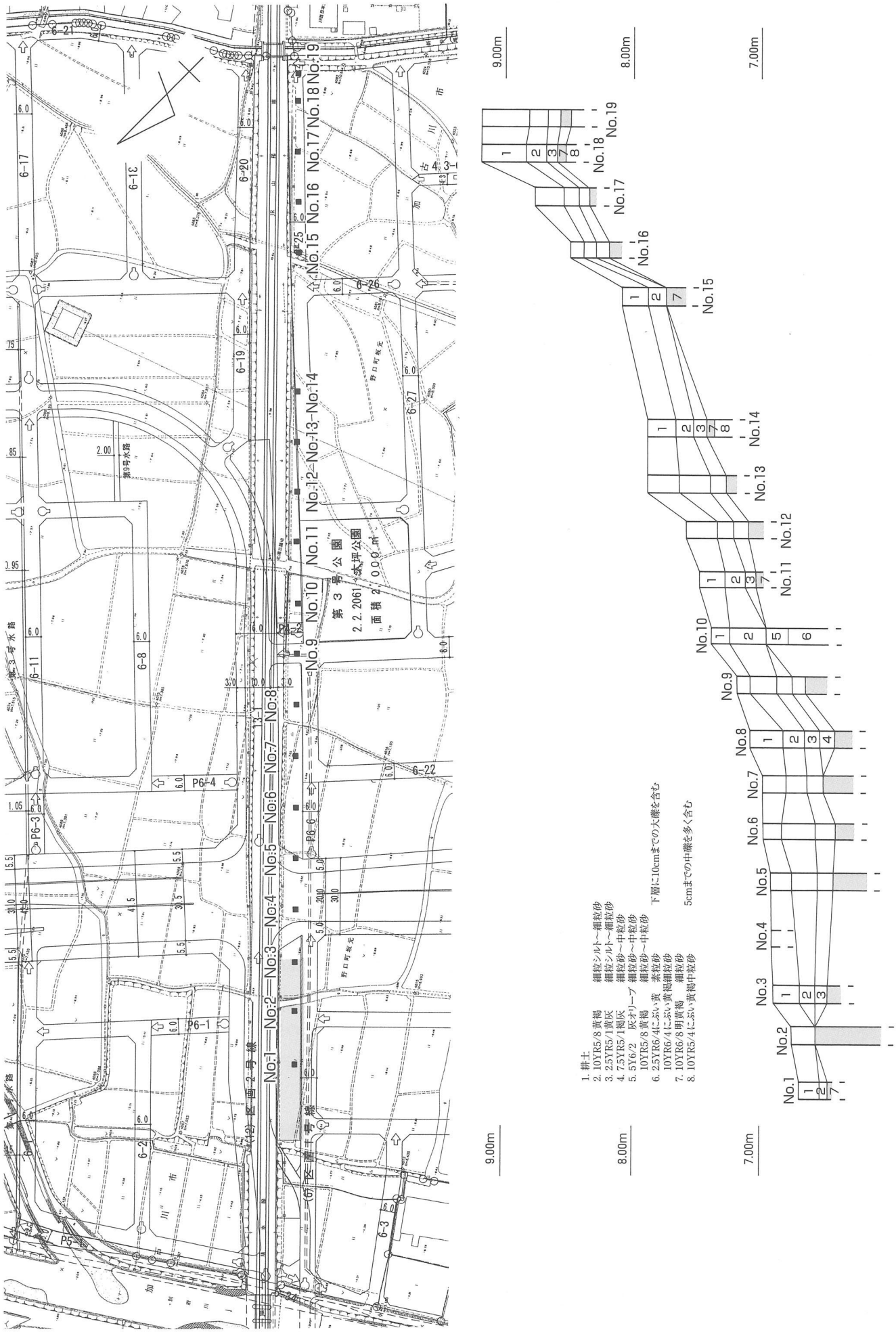
調 査 面 積　74㎡

加古川土木事務所からの依頼（平成11年５月17日付け　加土第439号）に基づいて、平成11年６月29日～７月１日に実施した。調査の対象とした範囲は、別府川左岸を西端とし、（一）野口尾上線と平行する新井川を東端とする、約480ｍの区間である。ただし別府川左岸に沿った段丘崖下の低地部分の約50ｍは、旧河道域と判断して対象から除外した。

高架事業は元の軌道敷から南側へずれる形で施工されるため、南側の拡幅部分を対象に確認調査を実施した。調査は19箇所の調査区（No.１～19グリッド）を設定して行った。調査区の大きさはNo.15グリッドを１×２ｍとした以外は、２×２ｍである。

調査の際はちょうど水田の湛水時期にあたり、浸水に悩まされる悪条件であった。そのため№４グリッドでは土層の観察が不可能であった。それ以外のグリッドでは調査の結果、対象範囲の西端にあたる№１～３グリッドにおいて、遺物包含層および遺構面を検出した。№１・２グリッドは耕土・床土直下が遺構面で、溝・柱穴を検出し、埋土から奈良時代の須恵器・土師器が出土した。№３グリッドでは遺構は認められなかったが、第３層（包含層）から奈良時代の須恵器が出土した。

№５～９グリッドでは少量の遺物は出土するものの、遺構面を形成する第７層が粘質シルトからやや粗い細粒砂層に変化して軟弱化するため、居住域からは外れるものと判断した。№10グリッドでは包



第２図　確認調査と模式断面図（1/2,000、断面は 1/40）

含層・遺構面とも認められなかった。№11～19グリッドでは№5～9グリッドと同様の堆積状況を示し、平安時代～中世の遺物が少量出土するものの、明確な遺構は検出できなかった。

以上のように№1～3グリッドで遺構・遺物を認めたため、確認調査対象範囲の西端から約70ｍの範囲について本発掘調査が必要と判断した（平成11年8月9日付け　教埋文第475号）。

第3節　本発掘調査

遺跡調査番号　990286

調査担当職員　調査第3班　調査専門員　西口和彦、主査　中川　渉

調 査 期 間　平成12年1月17日～3月17日

調 査 面 積　575㎡

加古川土木事務所からの依頼（平成11年9月2日付け　加土第1639号）に基づいて、平成12年1月17日～3月17日の期間で実施した。調査の対象範囲はＪＲ山陽本線の軌道境界の南側に沿っており、別府川に面した段丘崖の上端（37Ｋ850ｍ付近）から東へ約70ｍの区間である。ただし途中で横断している農道・水路部分約4ｍは控除しており、逆に調査区の東端は遺構の延長を認めたため2ｍ拡張した。さらに拡張範囲より東側は確認調査のグリッドを設けていない地点であったため、遺構の広がりを調べるため、埋め戻し後にトレンチ調査を行った。

なお調査対象地はＪＲ山陽本線に隣接しているため、加古川土木事務所鉄道高架・東播磨南北道路対策室およびＪＲ西日本加古川保線区との間で、調査の際の安全対策についての協議を行った。その結果、「今回の掘削は深度が浅く、使用機械も小規模であるため、ＪＲとの近接協議は不要である」「軌道と調査区の間に防護柵を設置し、軌道敷への進入を防ぐ」「調査中は保安員を配置する」「雨水対策として常時排水を行う」「境界線から1～2ｍの控えを取って、深い部分では充分な安全勾配をとる」といった対策を講じた上で作業を行った。

調査区内の地区分けは、西端から10ｍごとに区切って1～7区とし、遺物の取り上げの際の目安として用いた。ただし6区は農道・水路の控除部分にあたり、それより西側は7区にまとめたため、6区として取り上げた遺物は無い。

調査結果は写真・図面等で記録保存し（平成12年3月31日付け　教埋文第1177号）、出土遺物とともに兵庫県教育委員会が保管している。遺構を記録するにあたって、平面図は国土座標を基準に実測し、断面図等の水準高は東京湾平均海水準（T.P.）を用いている。調査の成果は新聞発表の後、2月26日に現地説明会を開催して一般に公開した。

第４節　出土品整理・報告書作成作業

出土品の整理作業は平成 17 ～ 18 年度の２箇年度に分けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

平成 17 年度

土器・石器の水洗い・ネーミング・接合補強・実測・拓本・復元・写真撮影、金属器の保存処理・実測・写真撮影、写真整理、図面補正、トレースを行った。

調査担当職員　　主査　中川 渉

整理担当職員　　主査　菱田淳子　　主査　森内秀造（工程管理担当）

技術職員　岡本一秀（保存処理担当）

非常勤嘱託員　　宮田麻子　尾鷲都美子　西村美緒　吉田優子　西口由紀　島村順子　蔵 幾子

宮野正子　河上智晴　大仁克子　早川有紀

栗山美奈　大前篤子　藤井光代　高橋朋子（保存処理担当）

日々雇用職員　　荻野麻衣　清水幸子

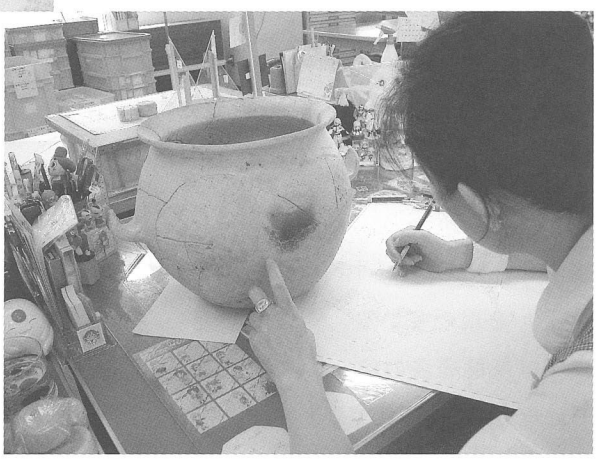
平成 18 年度

レイアウト、報告書印刷を行った。

調査担当職員　　主査　中川 渉

整理担当職員　　主査　菱田淳子　　主査　岸本一宏（工程管理担当）

非常勤嘱託員　　宮田麻子　西村美緒



第３章　調査の成果

第１節　概要

坂元遺跡では約360箇所の柱穴の他、土坑・溝・不定形な落ち込みなどが見つかり、飛鳥時代～奈良時代と弥生時代の集落遺跡であることが判明した。遺跡は別府川左岸の「野口第４段丘」と呼ばれる段丘上に位置し、浅いところでは表土・床土の直下で遺構を検出することができる。

飛鳥時代～奈良時代の遺構には方形掘り方の柱穴が多数含まれ、20棟の掘立柱建物（SX01～20）を復原することができた。調査時および「平成11年度　年報」（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　2000年発行）では16棟の建物を報告しているが、整理作業に当たって検討しなおした結果、この報告書をもって訂正する。遺構にはその他、柵列（SA01）・土坑（SK01・02）・不定形な落ち込み（SX01～06）・溝（SD01～05・07・08・11～14）などがある。遺構の時期については、後述する第４章第１節において、遺物の検討から坂元遺跡の「古代Ⅰ期」「古代Ⅱ期」を設定している。

弥生時代の遺構には、後期前半に開削された溝（SD08）と、中期中頃の土坑（SK02～05）・溝（SD06・09・10）がある。

なお飛鳥時代～奈良時代の遺構については、「第４章第１節」で出土土器の年代をもとに設定した「坂元古代Ⅰ期・Ⅱ期」の時期区分を本文中に示して、前後関係を表している。

第２節　飛鳥時代～奈良時代の遺構と遺物

１　掘立柱建物 SB01

遺構（図版７、写真図版１・６・７）

７区に位置する。全体を検出しており、梁間２間×桁行３間の建物である。規模は梁間方向が3.8 m、桁行方向が5.5 mで、床面積は20.90 ㎡。柱間はほぼ均等で、梁間が1.8～2.0 m、桁行が1.7～1.9 m。棟の方位はＮ40°Ｅで、北東－南西方向に向く。柱穴は全て一辺60～70 ㎝の方形掘り方で、掘り方の向きも揃っている。

建物間の切り合い関係は、P10がSB02のP38を切っている。他に溝SD01・04の埋土を切っている。

遺物（図版18－１～３、写真図版11）

柱穴からは掲載した遺物の他、須恵器杯、土師器杯・甕・カマド、瓦質の平瓦などの細片、および焼土塊が出土している。

１は須恵器杯Ｂ蓋である。口縁部の破片で、頂部を欠失する。口縁端部は直立気味で、やや外反する。口径14.3 ㎝。

２は須恵器杯Ｂで、ほぼ全形が復元できる。体部は外反気味に開き、端部が内屈する。底部の外縁に、小ぶりの輪高台が付く。口径14.3 ㎝、器高3.9 ㎝、底径10.1 ㎝。

３は須恵器杯Ａである。体部は直線的に開く。口径13.3 ㎝、器高3.4 ㎝、底径9.2 ㎝。

時期

須恵器蓋・杯は「飛鳥Ⅳ～Ⅴ期」の特徴を示している。１～３はいずれも柱穴の掘り方から出土して

おり、築造年代は「坂元古代Ⅱ期」に下る。

2　掘立柱建物 SB02

遺構（図版７、写真図版１）

７区に位置する。西辺と南辺の一部を検出しており、梁間２間×桁行２間以上の建物である。規模は梁間方向が 4.7 m、検出範囲内の床面積は 22.09 ㎡。柱間は梁間が 2.3 ～ 2.4 m、桁行が不均等で 1.9 ～ 2.8 m。棟の方位はＮ 90°　Ｅで、ほぼ東西方向に向く。柱穴は隅が一辺 40 ～ 50 ㎝の方形掘り方で、その間が直径は 30 ～ 35 ㎝の円形掘り方である。

建物間の切り合い関係は、P38 が SB01 の P10 に切られている。

遺物・時期

遺物は出土しておらず、時期も不明である。

3　掘立柱建物 SB03

遺構（図版８、写真図版１）

７区に位置する。南辺と東辺の一部を検出しており、梁間２間×桁行１間以上の建物である。規模は梁間方向が 4.0 m、検出範囲内の床面積は 8.00 ㎡。柱間は梁間が 1.9 ～ 2.1 m、桁行が 2.0 m。棟の方位はＮ 2°　Ｗで、ほぼ南北方向に向く。柱穴は一辺 50 ～ 80 ㎝の方形掘り方だが、掘り方の向きは不揃いである。

建物間の切り合い関係は無いが、溝 SD03 に切られている。

遺物

柱穴からは須恵器杯、土師器甕の細片が出土したが、図化できるものは無かった。

時期

年代の特徴を示す遺物は無い。

4　掘立柱建物 SB04

遺構（図版８、写真図版１）

７区に位置する。南辺と東辺の一部を検出しており、梁間・桁行とも１間以上の建物である。規模は梁間・桁行とも不明で、検出範囲内の床面積は 5.00 ㎡。柱間は梁間が 2.5 m、桁行が 2.0 m。棟の方位はＮ 4°　Ｅで、ほぼ南北方向に向く。柱穴は一辺 50 ～ 70 ㎝の方形掘り方だが、掘り方の向きは不揃いである。

建物間の切り合い関係は無いが、溝 SD03 に切られている。

遺物

柱穴からは須恵器杯、土師器甕・高杯の破片が出土したが、図化できるものは無かった。

時期

細片で判然としないが、７世紀代の特徴が認められる。

5　掘立柱建物 SB05

遺構（図版８、写真図版１・７）

７区に位置する。北辺と東辺の一部を検出しており、梁間１間以上×桁行２間以上の建物である。規

模は梁間・桁行とも不明で、検出範囲内の床面積は 14.56 ㎡。柱間は梁間が 2.8 m、桁行が 2.5 ～ 2.7 m。棟の方位はＮ 2°　Ｗで、ほぼ南北方向に向く。柱穴は一辺 60 ～ 70 ㎝の方形掘り方で、他の柱穴との重複が著しい。

建物間の切り合い関係は、P65 が SB06 の P65b を、P42 が SB06 の P120 を、P46 が SB06 の P46b を切っている。また P65 は P63･P64 に切られている。他に溝 SD04 の埋土を切り、SD03 には切られている。

SB05・06 付近は他にも方形の柱穴が密集しており、方向性にも規格があるが、復原は困難であった。ただし柱間の大きい、大規模な建物が想定できる。

遺物（図版 18 － 4 ・ 5、写真図版 11）

柱穴からは掲載した遺物の他、須恵器高杯、土師器甕などの細片、および弥生土器片が出土している。

４は須恵器杯Ｇ蓋の口縁部の小片である。口縁端部は丸く収め、内面に突起状のかえりが付く。口径 13.4 ㎝。

５は土師器土錘である。棒状の器体の両端に孔を穿つ双孔土錘の半折した破片である。現存長 4.65 ㎝、直径 1.3 × 1.65 ㎝。

時期

須恵器蓋は「飛鳥Ⅲ期」の特徴に近く、「坂元古代Ⅰ期（新）」に属する。

6　掘立柱建物 SB06

遺構（図版８、写真図版１）

７区に位置する。北辺と東辺の一部を検出しており、梁間１間以上×桁行２間以上の建物である。規模は梁間・桁行とも不明で、検出範囲内の床面積は 12.18 ㎡。柱間は梁間が 2.9 m、桁行が 1.8 ～ 2.4 m。棟の方位はＮ 2°　Ｗで、ほぼ南北方向に向く。柱穴は一辺 50 ～ 60 ㎝の方形掘り方で、他の柱穴との重複が著しい。

建物間の切り合い関係は、P65b が SB05 の P65 に、P120 が SB05 の P42 に、P46b が SB05 の P46 に切られている。また P65b は P63・P64 にも切られている。他に溝 SD04 の埋土を切り、SD03 には切られている。

遺物

柱穴からは須恵器杯・甕、土師器杯・椀・高杯・甕・カマドなどの破片が出土している。

時期

細片で判然としないが、７世紀代の特徴が認められる。

7　掘立柱建物 SB07

遺構（図版９、写真図版２）

５・６区に位置する。北辺と東辺･西辺の一部を検出しており、梁間２間×桁行２間以上の建物である。規模は梁間方向が 5.5 m、検出範囲内の床面積は 20.35 ㎡。柱間は梁間が 2.7 ～ 2.8 m、桁行が 1.8 ～ 1.9 m。棟の方位はＮ 8°　Ｗで、ほぼ南北方向に向く。柱穴は直径 25 ～ 40 ㎝の円形掘り方である。

建物間の切り合い関係は無いが、P79 が SA01 の P78 に切られている。

遺物・時期

遺物は出土しておらず、時期も不明である。

8　掘立柱建物 SB08

遺構（図版９、写真図版２・７）

５区に位置する。全体を検出しており、梁間２間×桁行３間の建物である。規模は梁間方向が 3.2 m、桁行方向が 5.1 mで、床面積は 16.32 ㎡。柱間はほぼ均等で、梁間が 1.5 ～ 1.7 m、桁行が 1.6 ～ 1.7 m。棟の方位はＮ 58°　Ｅで、北東－南西方向に向く。柱穴は四隅が一辺 50 ～ 70 ㎝の方形掘り方で、規模が大きく掘り込みも深い。その間の柱穴は一辺 20 ～ 40 ㎝の方形掘り方で、規模が小さく掘り込みも浅い。東辺の１箇所は亡失してしまっている。掘り方の向きは整然と揃っている。

建物間の切り合い関係は無い。

遺物・時期

柱穴から土師器片が出土しているが、時期は不明である。

9　掘立柱建物 SB09

遺構（図版 10、写真図版２）

４・５区に位置する。南辺と東辺・西辺の一部を検出しており、梁間２間×桁行３間の建物である。規模は梁間方向が 3.6 m、桁行方向が 5.4 mで、床面積は 19.44 ㎡。柱間は梁間が 1.8 m、桁行が 1.7 ～ 1.9 m。棟の方位はＮ 45°　Ｗで、北西－南東方向に向く。柱穴は一辺 30 ～ 50 ㎝の方形掘り方で、掘り方の向きも揃っている。

建物間の切り合い関係は、P109 が SB10 の P117 に切られている。

遺物

柱穴からは須恵器杯・甕、土師器甕・把手の細片が出土したが、図化できるものは無かった。

時期

年代の特徴を示す遺物は無い。

10　掘立柱建物 SB10

遺構（図版 10、写真図版２）

４・５区に位置する。南辺と東辺・西辺の一部を検出しており、梁間１間以上×桁行３間の建物である。規模は桁行方向が 4.8 mで、検出範囲内の床面積は 7.2 ㎡。柱間は梁間が 1.5 m、桁行が不均等で 1.3 ～ 1.9 m。棟の方位はＮ 35°　Ｗで、北西－南東方向に向く。柱穴には一辺 35 ～ 40 ㎝の方形掘り方と、直径 30 ㎝の円形掘り方がある。

建物間の切り合い関係は、P117 が SB09 の P109 を切っている。

遺物

柱穴からは土師器甕の細片が出土したが、図化できるものは無かった。

時期

年代の特徴を示す遺物は無い。

11　掘立柱建物 SB11

遺構（図版 10、写真図版２・７）

４区に位置する。建物の南半部を検出しており、梁間１間以上×桁行３間の総柱建物である。規模は

桁行方向が3.5 mで、検出範囲内の床面積は4.55 ㎡。柱間は梁間が1.3 ～ 1.5 m、桁行が1.1 ～ 1.3 mで間隔が狭い。棟の方位はN 60° Wで、北西－南東方向に向く。柱穴は外側が一辺45 ～ 80 ㎝の方形掘り方で、内側が径25 ～ 30 ㎝の円形掘り方である。

建物間の切り合い関係は、P203がSB14のP270に切られている。またP203はP194を切っている。他に土坑SK05を切っている。

遺物

柱穴からは土師器杯・甕の細片が出土したが、図化できるものは無かった。

時期

年代の特徴を示す遺物は無い。

12　掘立柱建物SB12

遺構（図版11、写真図版２）

４区に位置する。全体を検出しており、梁間２間×桁行２間の建物である。棟方向は特定できないが、隣接するSB13と同様と考える。規模は梁間方向が3.6 m、桁行方向が3.3 mで、床面積は11.88 ㎡。柱間は梁間が1.4 ～ 2.2 m、桁行が1.5 ～ 1.8 m。棟の方位はN 37° Wで、北西－南東方向に向く。柱穴は一辺40 ～ 70 ㎝の方形掘り方である。

建物間の切り合い関係は無い。P201・252・256は落ち込みSX02・03の底面で検出されたが、前後関係は確認できていない。

遺物（図版18－６・７）

柱穴からは掲載した遺物の他、須恵器杯・椀・甕、土師器皿・壺・甕・カマド・イイダコ壺などの破片が出土している。

６は土師器小杯である。皿状の器形で、底部を欠失する。口径11.4 ㎝。

７は土師器片口鉢である。片口部分の小片から図化したため、口径・傾きは不正確だが、口径約17 ㎝に復元した。

時期

時期を示す遺物は少ないが、７世紀代の特徴が認められる。

13　掘立柱建物SB13

遺構（図版11、写真図版３）

３・４区に位置する。全体を検出しており、梁間２間×桁行３間の建物である。規模は梁間方向が3.5 m、桁行方向が5.7 mで、床面積は19.95 ㎡。柱間は梁間が1.7 ～ 1.8 m、桁行が1.7 ～ 2.2 m。棟の方位はN 40° Wで、北西－南東方向に向く。柱穴は四隅が一回り大きく一辺50 ～ 70 ㎝の方形掘り方で、その間の柱穴は径30 ～ 55 ㎝の方形もしくは不整形の掘り方である。

建物間の切り合い関係は無いが、P178はP259を、P220はP221を、P224はP223を、P236はP227を切っており、P236はP233に切られている。また他に落ち込みSX03の埋土を切っている。

遺物（図版18－８～11）

柱穴からは掲載した遺物の他、須恵器杯・壺・甕、土師器甕・把手などの破片が出土している。

８は須恵器小杯である。内屈する口縁部の小片で、器壁が薄く、蓋の可能性もあるが、杯として図化

した。口径 9.1 ㎝。

9 は須恵器長頸壺の口頸部である。頸部は直線的に開き、外面に凹線を 1 条めぐらす。口径 8.4 ㎝。

10 は土師器椀である。大ぶりな器形で、口縁端部が外反する。口径 16.6 ㎝。

11 は土師器甕で、体部の下半部は欠失する。口縁部は水平近くにまで屈曲して開く。体部外面は縦方向のハケメで仕上げる。口径 25.3 ㎝。

時期

時期を示す遺物は少ないが、7 世紀代の特徴が認められる。

14　掘立柱建物 SB14

遺構（図版 12、写真図版 3）

3・4 区に位置する。全体を検出しており、梁間 2 間×桁行 3 間の建物である。規模は梁間方向が 3.5 m、桁行方向が 6.0 m で、床面積は 21.00 ㎡。柱間は梁間が 1.6 ～ 1.8 m、桁行が 1.7 ～ 2.3 m。棟の方位はN 40°　E で、北東－南西方向に向く。柱穴は一辺 35 ～ 70 ㎝の方形もしくは不整形の掘り方で、東辺の 1 箇所は亡失している。

建物間の切り合い関係は、P270 が SB11 の P203 を切っている。また P270 は P271 に、P259 は P233 に切られている。また他に落ち込み SX03 の埋土を切っている。

遺物

柱穴からは須恵器杯、土師器椀・甕・カマドの細片が出土したが、図化できるものは無かった。

時期

年代の特徴を示す遺物は無い。

15　掘立柱建物 SB15

遺構（図版 12、写真図版 3）

3 区に位置する。全体を検出しており、梁間 2 間×桁行 2 間の建物である。棟方向は特定できないが、隣接する SB13 と同様と考える。規模は梁間方向が 3.1 m、桁行方向が 3.6 m で、床面積は 11.16 ㎡。柱間は梁間が 1.5 ～ 1.6 m、桁行が 1.7 ～ 1.8 m。棟の方位はN 40°　W で、北西－南東方向に向く。柱穴は一辺 25 ～ 45 ㎝の円形もしくは不整形の掘り方である。

建物間の切り合い関係は、P262 が SB17 の P242 を切っている。また P228 は P227 に、P222 は P221 に、P283 は P284 に切られている。また他に落ち込み SX04・溝 SD10 の埋土を切っている。

遺物

柱穴からは須恵器杯、土師器甕の細片が出土したが、図化できるものは無かった。

時期

年代の特徴を示す遺物は無い。

16　掘立柱建物 SB16

遺構（図版 13、写真図版 3・4）

3 区に位置する。南辺を検出しており、梁間 1 間以上×桁行 3 間の建物である。規模は桁行方向が 4.5 m で、柱間は 1.4 ～ 1.6 m。棟の方位はN 55°　W で、北西－南東方向に向く。柱穴は一辺 40 ～ 60 ㎝

の方形掘り方である。

建物間の切り合い関係は無いが、P294 は P295 に切られている。また他に落ち込み SX04・溝 SD12 の埋土を切っている。

遺物

柱穴からは須恵器杯H、土師器の細片が出土したが、図化できるものは無かった。

時期

須恵器杯Hは7世紀代中葉の特徴を示し、「飛鳥Ⅱ期」に属す遺物である。ただしこの建物は後述する SB17 との親縁性が高く、時期的には「坂元古代Ⅱ期」に下る可能性が高い。

17　掘立柱建物 SB17

遺構（図版 13、写真図版３・４）

３区に位置する。全体を検出しており、梁間２間×桁行３間の総柱建物である。規模は梁間方向が 3.6 m、桁行方向が 3.6 mで、床面積は 12.96 ㎡。柱間は梁間が 1.6 ～ 2.0 m、桁行が 1.1 ～ 1.4 mで間隔が狭い。棟の方位はN 33°　Eで、北東－南西方向に向く。柱穴は外側が一辺 40 ～ 80 ㎝の方形掘り方で、内側が一辺 40 × 60 ㎝の方形掘り方と直径 30 ㎝の円形掘り方である。

建物間の切り合い関係は、P242 が SB15 の P262 に切られている。また P243 も P284 に切られている。他に落ち込み SX04 と溝 SD09・10・12 の埋土を切っている。

遺物（図版 18 － 12）

柱穴からは掲載した遺物の他、須恵器甕、土師器甕・把手・カマドなどの破片が出土している。

12 は須恵器杯 A である。体部は直線的に開く。底部を欠失する。口径 13.8 ㎝。

時期

「飛鳥Ⅳ～Ⅴ期」の特徴を示し、「坂元古代Ⅱ期」に属す。

18　掘立柱建物 SB18

遺構（図版 14、写真図版４）

２・３区に位置する。南辺を検出しており、梁間２間×桁行１間以上の建物である。規模は梁間方向が 4.1 mで、柱間は 2.0 ～ 2.1 m。棟の方位はN 33°　Eで、北東－南西方向に向く。柱穴は一辺 60 ～ 70 ㎝の方形掘り方で、掘り方の向きも揃っている。

建物間の切り合い関係は無いが、落ち込み SX04 の埋土を切っている。

遺物・時期

遺物は出土しておらず、時期も不明である。

19　掘立柱建物 SB19

遺構（図版 14、写真図版４）

２・３区に位置する。北辺を検出しており、梁間２間×桁行１間以上の建物である。規模は梁間方向が 4.2 mで、柱間は 2.1 m。棟の方位はN 35°　Eで、北東－南西方向に向く。柱穴は一辺 40 ～ 55 ㎝の方形掘り方である。

建物間の切り合い関係は無いが、落ち込み SX04 の埋土を切っている。

遺物（図版 18 － 13）

柱穴からは掲載した遺物の他、土師器甕の破片が出土している。

13 は須恵器杯Ｇである。体部は丸みをもって立ち上がり、外面には凹線状のナデを１条施す。底部を欠失していて、底部の調整は不明である。口径 13.0 ㎝。

時期

「飛鳥Ⅱ～Ⅲ期」の特徴を示し、「坂元古代Ⅰ期」に属す。

20　掘立柱建物 SB20

遺構（図版 14）

１・２区に位置する。南辺と東辺・西辺の一部を検出しており、梁間２間×桁行１間以上の建物である。規模は梁間方向が 3.6 ｍで、検出範囲内の床面積は 4.86 ㎡。柱間は梁間が 1.7 ～ 1.9 ｍ、桁行が 1.3 ～ 1.4 ｍ。棟の方位はＮ 35°　Ｅで、北東－南西方向に向く。柱穴は一辺 35 ～ 50 ㎝の方形掘り方で、掘り方の向きも揃っている。

建物間の切り合い関係は無いが、落ち込み SX05 の埋土を切っている。

遺物

柱穴からは須恵器甕、土師器壺・甕の破片が出土したが、図化できるものは無かった。

時期

年代の特徴を示す遺物は無い。

21　柵列 SA01

遺構（図版５）

５区の東端で、調査区を直角方向に横断している。８本の柱穴の並びが認められ、延長 7.1 ｍ分を検出した。柱間は不均等で 0.6 ～ 1.3 ｍのばらつきがあるが、１ｍ前後が多い。柵列の方位はＮ 34°　Ｅで、やや離れてはいるが、掘立柱建物 SB16 ～ 20 と同方向を向く。柱穴は直径 20 ～ 40 ㎝の円形掘り方である。

切り合い関係は、P78 が SB07 の P79 を切っている。

遺物・時期

遺物は出土しておらず、時期も不明である。

22　その他の柱穴

遺構

調査区全体で約 360 箇所の柱穴を検出しており、それらのほとんどは飛鳥時代～奈良時代のものと考えられる。柱の並びが復原できなかったものの中にも方形掘り方をもつ柱穴が数多くあり、検出・復原し得なかった建物の存在が窺える。

遺物（図版 18 － 14 ～ 19、28 －Ｍ１、写真図版 11・21、Ｍ３は写真のみ）

14 は１区の P341 から出土した。須恵器杯Ｇ蓋で、つまみを欠失する。口縁端部は丸く収め、内面に突起状のかえりが付く。口径 9.7 ㎝、かえり部径 7.4 ㎝。

15 は７区の P40 から出土した。須恵器小杯で、体部は直線的に開き、口縁部は外反気味に直立する。口径 10.6 ㎝。

16は4区のP138から出土した。須恵器杯Bで、体部は外反気味に開き、高台は外傾する。口径17.1㎝、器高4.8㎝、底径12.9㎝。

17は1区のP335から出土した。土師器甕の口頸部の破片で、口縁部はくの字に屈曲し、内面をハケメで仕上げる。口径20.0㎝。

18は2区のP1001から出土した。土師器カマドの口縁部の破片で、器壁は被熱のため赤化しており、鍔部も欠失する。器形はほぼ直立気味で、内外面をハケメで粗く仕上げる。口径28.9㎝。

19は1区のP341から出土した。浅鉢状の器形を呈する土師器鍋で、口縁部は緩やかに開き、端部を上につまみ上げる。体部の内外面はハケメで仕上げる。口径39.7㎝。

M1は7区のP36から出土した。直径4.1㎝の鉄製円盤で、厚みは錆によって膨らんでいると思われるが、現状で0.2㎝である。X線写真で観察しても孔などはなく、用途は不明である。

M3は7区のP16の柱痕内から出土した。8.1 × 5.9 × 2.8㎝程度の大きさの椀形鉄滓である。

23　土坑SK01

遺構（図版15、写真図版8）

7区の東隅に位置する。平面は不整方形で、底面を水平に掘り込む。規模は長径1.9 m×短径1.5 m、深さ17㎝である。

埋土の上から柱穴が掘り込まれているものの、それ以外の遺構との切り合い関係は無い。

遺物（図版18 − 20）

埋土からは掲載した遺物の他、須恵器杯蓋、土師器甕などの破片が出土している。

20は須恵器杯Bで、ほぼ全形が復元できる。体部は外傾気味に開き、底部の外縁に小ぶりの輪高台が付く。口径14.2㎝、器高4.25㎝、底径10.1㎝。

時期

「飛鳥Ⅳ～Ⅴ期」の特徴を示し、「坂元古代Ⅱ期」に属す。

24　土坑SK02

遺構（図版15、写真図版10）

7区の西隅に位置する。平面は長方形で、両側辺は斜めに掘り込み、外側が1段深くなる。中央は水平な底面であるが、東短辺側はスロープ状にすり付いている。西端は下層の弥生土坑と側溝の影響で判然としないが、調査区外に延びているものとみられる。規模は検出範囲内の長辺2.2 m×短辺1.0 m、深さ19㎝である。形態からみて木棺墓の可能性があるが、棺の痕跡等は捉えられず、確証は無い。

他の遺構との関係は、溝SD03の埋土を切っている。

遺物・時期

遺物は出土しておらず、時期も不明である。なおSK02直上の包含層で鉄斧（M2）が出土したが、確実に遺構に伴うものとは言えない。

25　落ち込みSX02

遺構（図版5・15、写真図版2）

4～5区に位置する。溝状の不整形な落ち込みで、規模は幅0.4～1.2 m、延長約5 m、深さ約10㎝

である。

他の遺構との関係は、掘立柱建物 SB12 に切られている。

遺物

埋土からは須恵器甕の体部片多数、土師器甕１個体分などが出土したものの接合せず、図化不能であった。

時期

「飛鳥Ⅱ～Ⅲ期」の特徴を示し、「坂元古代Ⅰ期」に属す。

26　落ち込み SX03

遺構（図版５・15、写真図版２・８）

３区北壁から４区南壁にかけて不整に蛇行する溝状の不整形な落ち込みで、本来は SX02 ともつながっていた可能性もある。規模は幅 0.7 ～ 2.5 m、延長約 13 m、深さ 10 ～ 20 cmである。

他の遺構との関係は、掘立柱建物 SB11 ～ 14 に切られ、溝 SD09 を切っている。

遺物（図版 19 ～ 21 － 29 ～ 67 、写真図版 11 ～ 15）

埋土からは須恵器・土師器が大量に出土しており、ほとんど全ての器種にわたっている。また接合によって全形を復元できるもののものの割合も高く、一括投棄されたものと考えられる。

29 ～ 34・37 は須恵器杯Ｇである。29 ～ 31 は底部を回転ヘラキリで切り離した後、不調整か１方向のナデを施すのみである。平坦な底部から体部が直線的に開き、口縁部は外反気味に短く立ち上がる。口径 12.2 ～ 12.6 cm、器高 3.75 ～ 4.2 cm、底径 6.6 ～ 6.8 cm。

32・37 は体部外面に稜をもって口縁部が立ち上がる。底部外面は回転ヘラケズリ、それ以外は回転ナデで丁寧に調整しており、蓋になる可能性がある。特に 37 は口縁部のつくりも蓋に通じるが、ここでは杯Ｇとしておく。32 は小型の器形で、口径 11.65 cm、器高 3.75 cm、底径 5.65 cm。37 は口径 12.2 cm、器高 4.5 cm、底径 8.8 cm。なお 32 は SX05 出土の破片とも接合しており、両遺構への廃棄行為が同時期に行われたことを物語る。

33・34 は口径に比して器高が深く、椀状の器形を呈する杯Ｇである。底部外面は回転ヘラキリで切り離す。口径 11.3 ～ 11.9 cm、器高 4.5 ～ 4.6 cm、底径 7.2 ～ 7.5 cm。

35・36 は須恵器椀である。外面に浅い凹線状の段をもち、口縁部が外反する。底部外面は回転ヘラキリのあと、板ナデで調整する。35 は口径 13.2 cm、器高 5.1 cm、底径 6.65 cm。36 は口径 14.1 cm、器高 4.3 cm、底径 9.65 cm。

38・39 は須恵器杯Ｈである。立ち上がり部の長さは１cm弱で、短く内傾し、受け部の突出も小さい。底部は回転ヘラキリで切り離した後、不調整かナデを施すのみである。口径 10.4 ～ 10.7 cm、器高 4.2 ～ 4.35 cm、底径 5.7 ～ 6.3 cm。

40 は須恵器高杯である。杯Ｇにラッパ状の脚部を付けた器形で、透かし孔は無い。口径 13.7 cm、器高 7.9 cm、底径 9.45 cm。

41 は須恵器椀である。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁端部を匙面状につまみ出す。体部外面には２条の凹線をめぐらす。底部は欠失する。口径 16.1 cm。

42 は須恵器瓿の体部で、口頸部を欠失する。扁球形の体部に注孔を穿ち、中位にカキメ、上半部には沈線間にキザミメを充填する文様を２単位施す。腹径 10.4 cm。

43は須恵器壺の口頸部である。頸部が短く外反し、端部を肥厚させる。口唇部上端の一部にはキザミメを不規則に施すが、全周はしない。口径15.4㎝。

44は須恵器甕の口縁部から肩部にかけての破片である。頸部は緩やかに外反し、口縁部を断面方形に肥厚させる。外面は平行タタキ、内面は同心円タタキで成形し、平行タタキは頸部外面にも及ぶ。肩部外面にはタタキの上からカキメを施す。口径22.6㎝。

45～48は土師器椀である。45・46は口縁部内面を匙面状に仕上げ、見込みに暗文状のヘラミガキを施す。45は口径16.1㎝、器高6.8㎝、46は口径16.0㎝、器高5.5㎝。47は口縁部をナデで仕上げる。口径15.2㎝。48は小型の椀で口縁部を丸く収める。口径11.9㎝、器高4.1㎝。

49は土師器小杯で、平坦な底部から体部が直線的に立ち上がる。口径9.75㎝、器高3.45㎝、底径6.0㎝。

50は土師器片口鉢である。ボウル状の体部に、片口が付く。口径32.0㎝。

51・52は土師器鍋である。鉄鍋形の体部から、口縁部が水平近くにまで開く。外面はハケメで調整し、内面はハケメかナデで仕上げる。51は上半部の破片で、52は全形が復元できる。口径36.4～37.8㎝、器高14.75㎝。

53～55は土師器長胴甕である。寸胴形の体部から、口縁部がくの字形に開く。体部外面は縦方向のハケメ、内面は縦方向のヘラケズリで仕上げる。体部内面上半には、粘土紐の継ぎ目が残る。53・54は全形が復元できる。53はやや小型で、口径21.0㎝、胴部径23.3㎝、器高30.5㎝。54は口径21.1㎝、胴部径24.4㎝、器高37.0㎝。55は歪みのある体部のみで、口縁部を欠失する。胴部径23.7㎝、残存高30.5㎝。

56～58は土師器把手付鍋である。平底から球形の体部が立ち上がり、口縁部がくの字形に開く。胴部には牛角形の把手が1対付く。体部外面はハケメ、内面はヘラケズリで仕上げるが、器壁は概して分厚い。体部内面上半には、粘土紐の継ぎ目が残る。56・57は全形が復元できる。56は一回り小さく、体部外面に黒斑が認められる。口径24.5㎝、器高23.4㎝、底径14.2㎝。57は底部が直接接合しなかったので、図上で復元した。口径26.4㎝、器高25.8㎝、底径18.2㎝。58は上半部のみの破片である。口径23.5㎝。

59・60は小型の土師器甕である。いずれも上半部の破片で、底部を欠失する。59は体部外面をハケメ、内面をヘラケズリで調整する。口径13.8㎝。60は内外面をハケメで調整し、粘土紐の継ぎ目が残る。口径13.3㎝。

61～63は釣鐘形の土師器イイダコ壺である。61・62は全形が復元できるが、63は吊手部など欠損が多い。口径4.8～6.9㎝、器高11.4～12.2㎝。

64は双孔土錘の完形品で、全長7.65㎝、径1.8～2.1㎝である。

65・67は土師器カマドである。65は口縁部～鍔部にかけての破片で、図の下面は焚き口上面にあたる。口径27.8㎝、口縁から焚き口までの器高7.2㎝。67は焚き口右裾部の破片で、庇部の底面は平坦に作る。

66は土師器円筒形土器である。裾部から体部にかけての破片で、ドーム状の器形に復元できる。外面はハケメで粗く仕上げ、上部に1条のタガをめぐらす。なお残存部に焚き口はみられないが、カマドの可能性もある。底径47.0㎝。

時期

「飛鳥Ⅱ～Ⅲ期」の特徴を示し、「坂元古代Ⅰ期」に属す。

27　落ち込み SX04

遺構（図版４、写真図版４）

２～３区に位置し、南端は調査区外に延びる。不整形な落ち込みで、北西側の落ちははっきりしているが、南東側は不明瞭で、溝 SD09 辺りで輪郭を追えなくなる。規模は東西約 11 m、南北約 6.5 m、深さは最深部で 17 ㎝である。

他の遺構との関係は、掘立柱建物 SB15～18・溝 SD14 に切られている。なお底面で SB19 を検出したが、掘り込み面が確認できていない。

遺物

埋土からは土師器椀・甕・甑などの破片が出土したが、図化できるものは無かった。

時期

「飛鳥Ⅱ～Ⅲ期」の特徴を示し、「坂元古代Ⅰ期」に属す。

28　落ち込み SX05

遺構（図版４・15、写真図版８）

１～２区に位置し、北端は調査区外に延びる。不整形な落ち込みで、規模は東西約 4.5 m、南北約 7 m、深さ約 20 ㎝である。

他の遺構との関係は、底面で SB20 を検出したが、掘り込み面が確認できていない。

遺物（図版 21 ～ 22 － 68 ～ 83、写真図版 15・16）

埋土からは SX03 と同様の状況で、須恵器・土師器が大量に出土しており、やはり一括投棄されたものと考えられる。

68 ～ 70 は須恵器杯Ｇである。68・69 は底部を回転ヘラキリで切り離した後、不調整である。口縁部は 68 が短く外反し、69 は真っ直ぐ立ち上がる。口径 12.2 ～ 12.9 ㎝、器高 4.4 ～ 4.6 ㎝、底径 6.25 ～ 6.4 ㎝。

70 は小型の器形である。底部は回転ヘラキリで切り離した後、不調整である。口径 10.9 ㎝、器高 3.6 ㎝。

71 は須恵器杯Ｈである。立ち上がり部・受け部は矮小化しており、長さは６～７㎜程度である。底部は回転ヘラキリで切り離した後、不調整である。口径 11.1 ㎝、器高 3.7 ㎝、底径 7.0 ㎝。

72 は須恵器高杯である。杯部は上外方へ直線的に開き、透かし孔をもたないラッパ状の脚部が取り付く。口径 13.7 ㎝、器高 7.0 ㎝、底径 8.75 ㎝。

73 は須恵器脚付椀である。体部が垂直に立ち上がる大振りの器形で、外面に２条の凹線を施す。自然釉が広い範囲に付着している。脚部は欠失する。口径 13.2 ㎝。

74 は須恵器壺か鉢など大型の器体に付く脚部の破片である。裾部は端部を断面方形に肥厚させる。台形の透かし孔が３箇所遺存しており、４～５単位に復元できる。図では５単位で表現した。底径 18.6 ㎝。

75 は須恵器瓶の体部で、口頸部を欠失する。扁球形の体部に注孔を穿ち、肩部に１条の沈線を施す。腹径 9.75 ㎝。

76 は須恵器平瓶の体部で、口縁部を欠失する。体部と頸部は直接接合しなかったが、図上復元した。体部には全面にカキメを施す。腹径 16.8 ㎝。

77 は須恵器甕の口縁部である。頸部は大きく開き、内弯気味の口縁端部を段状に肥厚させる。口縁部の下端には２条の沈線を施し、上部には端面をとる。頸部外面はカキメで調整する。口径 28.2 ㎝。

78 は粗製の土師器椀である。全体に歪な成形で、外面にはハケメが残る。口径 16.9 ㎝、器高 6.6 ㎝。

79は釣鐘形の土師器イイダコ壺である。全体に厚手の作りである。口径7.1㎝、器高12.4㎝。

80・83は土師器円筒形土器と考えられる。80は口縁部近くの破片で、土管状の器体に1条のタガをめぐらす。円筒埴輪にも似た形状だが、内外面はナデで仕上げる。口径10.3㎝ 。83は裾部にあたり、小片のため径・傾きとも不確実だが、底径30.5㎝のスカート状の器形に復元した。外面は縦方向、内面は横方向のハケメで仕上げる。これらの全体の形状は不明だが、類例によると煙突状の形態で、カマドと組み合わせて用いられたものと考えられる。

81は土師器甕である。球形の体部に口縁部がくの字に屈曲して開く。口縁端部には面をとり、沈線が入る。体部外面はハケメ、内面の下半部はヘラケズリ、口頸部内面はハケメで調整する。口径19.9㎝、器高29.0㎝、腹径32.3㎝。

82は土師器甑である。バケツ形の器体の上半部が遺存し、把手も片方が残存する。体部外面は縦方向のハケメで仕上げ、内面は横方向のハケメの後、縦方向のヘラケズリで調整する。口径22.6㎝。

時期

「飛鳥Ⅱ～Ⅲ期」の特徴を示し、「坂元古代Ⅰ期」に属す。

29　溝 SD01

遺構（図版6・15、写真図版1・8）

7区の南側を弧状に横切っており、トレンチ部分も含めて延長約12ｍ分を検出した。調査区東端で南側への分岐があり、調査区内でも北側へ突出する部分（断面A）が認められた。断面は箱堀状に掘り込まれ、幅0.7～1.5ｍ、深さ23～33㎝である。

他の遺構との関係は、掘立柱建物SB01に切られている。

遺物（図版18－23～28、写真図版11）

埋土からは掲載した遺物の他、須恵器杯H、土師器椀・把手などの他、弥生土器片が出土している。

23は須恵器杯Ｂで、口縁部を欠失する。底部の内側寄りに外傾する輪高台が付き、体部は屈曲して立ち上がる。底径8.0㎝。

24は須恵器杯Ｇである。焼成が不良で赤褐色を呈する。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は直立する。底部外面は回転ヘラキリの後、不調整である。口径11.7㎝、器高4.35㎝。

25は須恵器高杯である。椀状の杯部に、低いラッパ状の脚部が付く。透かし孔は無い。口径10.85㎝、器高8.0㎝、底径9.4㎝。

26は須恵器鉢もしくは盤の口縁部である。直線的に外傾し、外面に3条の沈線を施す。小片のため、口径は不明だが、かなり大きな器形となる。

27は須恵器無頸壺である。中～下半部を欠失するが、球形の体部をもつものとみられ、外面に平行タタキ、内面に同心円タタキが残る。口縁部は体部上端をわすかにつまみ上げて形作る。口縁直下には1孔があり、2方向もしくは4方向に穿たれたものであろう。口径8.7㎝。

28は土師器甕の口頸部の破片である。口縁部はくの字に屈曲し、内外面をハケメで仕上げる。口径11.4㎝。

時期

「飛鳥Ⅲ期」の特徴を示し、「坂元古代Ⅰ期（新）」に属す。

30　溝 SD03

遺構（図版６・15、写真図版１）

７区の北西側を斜めに横切っており、延長約 6.5 m分を検出した。形状は直線的で、N 49°　Eの方向に延びる。断面は浅い皿状を呈し、幅 0.75 ～ 1.45 m、深さ 8 ～ 10 ㎝である。

他の遺構との関係は、掘立柱建物 SB03 ～ 06 を切っており、土坑 SK02 には切られている。

遺物（図版 18 － 21・22、写真図版 11）

埋土からは掲載した遺物の他、須恵器杯Ａ・蓋・壺・甕、土師器甕・カマドなどの他、弥生土器片が出土している。

21 は須恵器杯Ｂで、口縁部を欠失する。底部の外縁に太めの輪高台が付く。底径 11.8 ㎝。

22 は平瓦の隅部の破片である。凸面に格子タタキを施す。凹面側は表面が磨滅してしまっている。

時期

「飛鳥Ⅳ～Ⅴ期」の特徴を示し、「坂元古代Ⅱ期」に属す。

31　溝 SD07

遺構（図版５・15）

６区に位置し、延長約 4.5 m分を検出した。形状は直線的で、N 49°　Eの方向に延びる。断面は浅い皿状を呈し、幅 0.3 ～ 0.6 m、深さ 10 ㎝である。

柱穴以外の遺構との切り合い関係は無い。

遺物

埋土からは須恵器坏Ｂ、土師器片などが出土したが、図化できるものは無かった。

時期

「飛鳥Ⅳ～Ⅴ期」の特徴を示し、「坂元古代Ⅱ期」に属す。

32　溝 SD10 ～ 13

遺構（図版４、写真図版４）

３区に位置し、４本の溝が掘立柱建物 SB17 の真下で格子状に組み合っている。SD10 は SB17 の棟軸に、SD12 は西側の桁行に沿っており、その上から柱穴が掘り込まれている。また SD11 は北側の梁間、SD13 は北から２本目の柱列に沿っており、SD12 から直角に分岐する。本来は落ち込み SX04 の上面から掘り込まれたものであるが、調査では底面で検出している。溝の断面はＵ字状を呈し、検出面での幅 0.2 ～ 0.3 m、深さ７～ 12 ㎝である。

切り合い関係は上述のように、SX04 を切って、SB17 に切られている。SD12 はさらに北へ延びて、SB16 にも切られている。なお SB16 の P309 の掘り方が溝状を呈するのも、同様に SD10 が北へ延びていた可能性を示している。これらの溝は柱列の配置と関係があるとみられるが、割付線にしては掘り込みが深いので、判断は保留する。ただし SB16 と SB17 が同時期に併存する蓋然性は高いものと考えられる。

遺物

埋土から土師器片などが出土したが、図化できるものは無かった。

時期

年代の特徴を示す遺物は無い。

33　溝 SD14

遺構（図版４、写真図版４）

２区に位置し、延長約 7.5 m分を検出した。形状は直線的で、N 48°　Eの方向に延びる。断面はU字状を呈し、幅 0.3 m、深さ 8 cmである。

遺構との切り合い関係は、落ち込み SX04 を切っている。

遺物

埋土からは須恵器甕、土師器片などが出土したが、図化できるものは無かった。

時期

年代の特徴を示す遺物は無い。

34　溝 SD08

遺構（図版 16、写真図版９）

１区の西端を調査区と直交方向に横断しており、延長８m分を検出した。形状は細かくうねりながらも検出した範囲内では概ね直線で、N 25°　Eの方向に延びる。調査区の西外側には、比高差約 1.5 mの段丘崖があるが、その段丘崖上端の斜面に沿って開削されている。段丘面を深く濠状に掘り込んでいるが、底面は丸みを帯びており、鋭いV字形の断面にはならない。幅は上端で 3.8 ～ 4.0 m、深さは斜面上部の東側からなら 2.2 m、対面の西側では 1.4 mである。

埋土の上層（北壁７層）・中層（南壁 12・13 層、北壁８～ 10 層）と下層（南壁 14 層、北壁 11 層）からは古代の土器が出土している。中層には特に土器が多量に投棄されており、短期間に集中的に廃棄されたものと考えられる。また下層は黄白色シルトブロックがパッチ状に堆積しており、意図的に埋め立てられた状況が明らかである。つまり古代以降には、この溝は既に機能を失っていたものと理解できる。

埋土の最下層は黒色シルト層（南壁 15 ～ 20 層、北壁 12 ～ 17 層）でその中でも特に有機質の成分が多く黒色が強い層と、若干砂混じりで褐色がかった層が互層をなしている。最下層からは主に弥生土器の細片が出土しており、この時期は滞水することが多い環境であったようである。

最下層と溝底の間にはもう１層の堆積（南壁 21・22 層、北壁 18 ～ 20 層）が認められる。細粒砂と小礫で硬く締まった堆積をしていて有機物や遺物は含まれず、早い段階に埋まった後、擬似的な溝底となっていたとみられる。なお写真・断面図の検討により、北壁側ではこの層が掘りきれてないことが判明した。

他の遺構との切り合い関係は無い。

遺物（図版 23 ～ 24 － 90 ～ 119、写真図版 17 ～ 19、151 は写真のみ）

上層（90 ～ 93）

埋土からは掲載した遺物の他、須恵器椀・甕・壺・甕、土師器甕・カマド・イイダコ壺などが出土している。

90 は須恵器杯Ｂ蓋である。焼け歪みが著しく、本来の形状に近いと考えられる部分で復元した。頂部は平らで、扁平なつまみが付き、口縁端部を丸く肥厚させる。口径 17.3 cm、器高 2.8 cm。

91・92 は須恵器杯Ｂで、いずれも全形が復元できる。91 は体部が外反気味に開き、端部を比較的シ

ャープに作る。底部の外縁に、小ぶりの輪高台が付く。口径 14.6 ㎝、器高 4.4 ㎝、底径 11.0 ㎝。92 は一回り大きく、口縁の器壁も厚めで、端部を丸く収める。口径 16.7 ㎝、器高 4.5 ㎝、底径 12.5 ㎝。

93 は須恵器長頸壺で、口縁部と高台の一部を欠く。肩部の張った体部から、口頸部が外反しながら細長く立ち上がる。２条１組の沈線を、頸部に２単位、肩部に１単位施す。体部下半は粗いカキメで仕上げる。底部には外へ踏ん張る形の高台が付き、付け根には円孔を４方向に穿つ。口径 11.5 ㎝、器高 26.3 ㎝、底径 13.0 ㎝。

中層（94 ～ 111）

埋土からは須恵器・土師器が大量に出土しており、掲載した遺物以外には、土師器鍋・甑などがある。

94 は須恵器杯Ｇ蓋で、つまみを欠失する。口縁端部は丸く収め、内面に突起状のかえりが付く。外面は頂部周辺のみヘラケズリで調整する。口径 9.6 ㎝、かえり部径 7.2 ㎝。

95・96 は須恵器杯Ｇである。底部を回転ヘラキリで切り離した後、不調整である。96 は平坦な底部から体部が直線的に開き、口縁部が僅かに稜をもって立ち上がる。97 は体部が丸みをもって立ち上がり、口縁端部を丸く収める。口径 11.7 ㎝、器高 3.95 ～ 4.05 ㎝、底径 7.2 ～ 7.65 ㎝。

97・98 は須恵器椀である。97 は外面に稜をもって、口縁部が直立する。底部外面はヘラケズリで丁寧に調整し、自然釉もかぶるところから、何らかの器形の蓋の可能性もあるが、椀として図化した。口径 10.55 ㎝、器高 5.5 ㎝。98 は外面に１条の沈線をもつ。底部外面は回転ヘラキリの後、不調整である。35 は口径 12.2 ㎝、器高 5.3 ㎝。

99 は須恵器鉢である。浅めの体部から、口縁部が大きく内弯する。口縁端部は強いナデで、匙面状に仕上げる。口径 19.7 ㎝。

100 は須恵器脚付椀とみられるが、口縁部と脚部を欠失する。椀部は深めの器形で、外面に２条の凹線を施す。脚部の付け根はきゃしゃで、底面側に自然釉がかぶっているところから、何らかの器形の蓋になる可能性もある。腹径 14.4 ㎝。

101 は須恵器甕で、扁球形の体部から頸部が細く立ち上がるが、口頸部を欠失する。胴部に注孔を穿ち、肩部に１条の沈線を施す。腹径 7.9 ㎝。

102 は須恵器すり鉢の底部縁の破片である。底面は素面である。底径 8.4 ㎝。

103 は須恵器壺の口縁～肩部にかけての破片である。開き気味に直立する口頸部は、端部を丸く収め、外面に２条１組の沈線を２単位施す。体部外面には格子タタキ、内面には同心円タタキが残る。肩の付け根には、５画の刻線からなるヘラ記号がある。他に頸部外面にも２本１組のような浅い描線が数条認められるが、いずれも具象的な意味をなさない。口径 11.0 ㎝。

104・105 は須恵器甕である。104 は口縁部から肩部にかけての破片である。頸部は内弯気味に開き、口縁部を断面方形に肥厚させる。口縁直下と頸部の付け根に凹線を施す。外面は平行タタキ、内面は同心円タタキで成形し、平行タタキは頸部外面にも及ぶ。口径 22.8 ㎝。105 は口頸部の破片で、同一個体が包含層からも出土している。頸部は直線的に大きく開き、口縁端部を肥厚させて外側に面をとる。頸部外面には縦方向の沈線を密に施し、２条１組の凹線で、上下２段に分ける。口縁部外面にもキザミメを密に施す。口径 40.0 ㎝。

106 は土師器高杯の脚部である。脚柱部から裾部がラッパ状に開く。底径 9.9 ㎝。

107・108 は土師器甕で、いずれも口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部はくの字に屈曲し、端部に面をとる。体部内外面ともハケメで調整する。107 は口径 24.0 ㎝、108 は口径 34.2 ㎝。

109は土師器羽釜の口縁部の破片である。バケツ形の体部の口縁直下に、太く短い鍔部を貼り付け、口縁部内側は肉厚となる。体部外面はハケメで調整し、鍔部の上下を強いナデで仕上げる。口径30.8㎝。

110・111は土師器カマドである。110は口縁部～焚き口の右半部が残る破片で、焚き口の外側を庇部が蔽っている。器壁は全体に熱を受けて赤変しており、特に口縁部外縁は、鍋釜をかけていた影響のためか、帯状に変色している。歪みのため、口径は復元できなかった。器高29.3㎝。111は焚き口右裾部の破片で、庇部の突出は短い。底面は平坦に作る。

下層（112～117・152）

埋土からは掲載した遺物の他、須恵器壺・甕、土師器甕・鍋・甑などが出土している。図化はできなかったが、カマドの破片の中には、生駒西麓産とみられるチョコレート色で角閃石を含む胎土の製品が認められる。

112・113は須恵器杯Gである。112は体部中位から立ち上がった口縁部を外反させる。底部は回転ヘラキリで切り離した後、不調整である。口径12.15㎝、器高3.9㎝、底径6.9㎝。113は口縁部がほぼ直立する。底部外面はヘラケズリの後ナデで丁寧に調整しており、蓋の可能性もある。口径11.4㎝、器高3.8㎝。

114は須恵器椀である。外面に1条の凹線を施し、口縁部が直線的に開く。底部外面は不整方向のヘラケズリで丁寧に調整する。口径12.6㎝、器高5.1㎝。

115は土師器甕で、口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部はくの字に屈曲し、端部に面をとる。口径17.2㎝。

116は土師器高杯で、ラッパ状に開く脚部の破片である。

117は紡錘車で、縦半分を欠損する。円錐台形の土製品で、中央に軸孔をもつ。上面径2.7㎝、下面4.3㎝、器高3.5㎝。

なお掲載した土器以外に下層からは、チョコレート色で角閃石を含む胎土の一群の破片が出土している（151、写真のみ）。それらは磨滅した断片の集合のため図化不能であったが、緩い円弧の分厚い破片で、大型の器形になるとみられる。足部を示す棒状の破片や胎土から、生駒西麓産のカマドである可能性が高い。

最下層黒色シルト（118・119）

最下層として取り上げた遺物には、弥生土器の他に須恵器が含まれている。しかしその須恵器も中層や別の遺構の土器と接合しているため、層位的には混入品とみられる。弥生土器については次節で述べる。

118は須恵器椀である。筒状の器体の外面に2条の凹線を施し、底面は回転ヘラケズリで調整する。底部は欠失するが、脚部をもつ可能性がある。口径10.6㎝。中層の破片と接合する。

119は須恵器壺の上半部の破片が断片的に残り、図上で復元した。頸部は直線的に開き、口縁部が受け口状に立ち上がる。口縁端部は内向きに面を取り、外面下部に2条の沈線をめぐらす。丸く張った肩部には3条の沈線を2単位、胴部にはカキメを施す。口径11.2㎝。SX05から出土した破片と接合する。

時期

上層からは「飛鳥Ⅳ～Ⅴ期」の土器が出土しており、「坂元古代Ⅱ期」に属す。中層・下層の土器は大きく時期を前後するものではなく、「坂元古代Ⅰ期」の範疇で捉えられる。

溝は開削された弥生時代から長期間開口していたが、7世紀中葉に埋め立てや土器の投棄が始まり、

８世紀前葉には完全に埋め戻されたものと考えられる。

35　包含層

包含層からは須恵器・土師器・土製品・瓦などが出土しており、６点を図化した。他に金属器には鉄斧と不明鉄製品がある。７区東側では銅製品の破片が出土したが、腐食が進んでいて、図化不能であった。

土器（図版 22 － 84 ～ 89、写真図版 11・16）

84 は須恵器甕で、口縁部を欠失する。扁球形の体部から頸部が開き気味に立ち上がる。胴部には注孔を穿つが、文様はもたない。腹径 9.8 ㎝。

85 は土師器鍋である。浅鉢状の器形で、口縁部は緩やかに開き、端部に面をとる。体部外面と口縁部内面はハケメで仕上げる。供伴した把手は直接には接合しなかったため、図上復元した。ただしこの器形の鍋に把手が付く例はあまり無い。口径 39.4 ㎝。

86・87 は双孔土錘である。86 はほぼ完形で、全長 6.4 ㎝、径 1.6 ～ 2.05 ㎝。87 は一端を欠損する。現存長 5.15 ㎝、径 1.5 ～ 2.0 ㎝。

88 は土師質の平瓦片で、側縁が残る。凸面には斜格子タタキが残り、凹面側はイタナデで布目を消す。89 は須恵質の平瓦片で、隅が１箇所残る。凸面には斜格子タタキ、凹面には布目が残る。

金属器（図版 28 －Ｍ２、写真図版 21）

Ｍ２は７区の土坑 SK02 の直上で検出したが、遺構との関係は不明である。無肩の有袋鉄斧で、ほぼ完形で残り、全長 8.2 ㎝、最大幅 3.85 ㎝、厚み 2.2 ㎝である。ソケットの折返し部は閉じておらず、Ｕ字形に開放している。

第３節　弥生時代の遺構と遺物

１　溝 SD08

遺構（図版 16、写真図版９）

弥生時代に開削された後、飛鳥～奈良時代に埋め立てられている。形状・堆積状況などは前節で述べているので、割愛する。

遺物（図版 24 － 120 ～ 131、写真図版 19）

最下層黒色シルト（120 ～ 131）

掲載した土器以外に、生駒西麓産とみられるチョコレート色で角閃石を含む胎土の壺の破片がある。

120 は広口壺で、口縁部から肩部にかけての部分が残存する。頸部は真っ直ぐ立ち上がり、口縁部が緩やかに開く。口縁端部は断面三角形に肥厚し、外側に面をとる。口頸部外面は無文である。頸部内面は板状工具で調整する。口径 18.2 ㎝。

121 ～ 124 は長頸壺の口縁部で、筒状の頸部から口縁部が開く。121 は頸部がやや開き気味に立ち上がり、口縁部を外側へつまみ出す。口径 13.6 ㎝。122・123 は口縁部が緩やかに開き、外側に面をとる。頸部外面はヘラミガキもしくはハケメで調整する。122 は口径 17.3 ㎝、123 は口径 14.0 ㎝。124 は直立する頸部から口縁部がわずかに開き、外側に面をとる。口径 14.6 ㎝。頸部内面にはヘラミガキが残るが、その他は不明である。

125 はくの字に屈曲する甕の口頸部の破片である。内面はヘラケズリで調整する。口径 14.3 ㎝。

126 ～ 128 は壺の底部片である。126・127 は円盤状に突出した接地面の少ない底部で、底部側面には仕上げの工具痕が残る。底径 5.9 ～ 6.9 ㎝。128 は平底で、体部外面はヘラミガキで調整する。底径 10.0 ㎝。

129 は甕の底部片である。小ぶりの平底で、内外面ともハケメで調整する。底径 6.95 ㎝。

130･131 は高杯の脚部片である。130 は鉢状の器体に付くと思われる小ぶりの脚部で、ハの字形に開く。底径 8.0 ㎝。131 はラッパ状に開く脚柱部で、裾部を欠失する。杯部との接合部は円盤充填する。透かし孔が 1 箇所残るが、単位は不明である。外面はヘラミガキで調整する。

時期

最下層から出土した弥生土器は後期前半の特徴を示す。ただし溝底までの間には別に再々下層とでもすべき堆積（南壁 21・22 層、北壁 18 ～ 20 層）があり、開削時期はさらに遡ることになる。

2　土坑 SK02 下層

遺構（図版 17 、写真図版 10）

7 区の西隅に位置し、SK02 の底面で検出した。西端は調査区外に延びる。平面は不整方形で、底面を皿状に掘り込む。規模は一辺 0.9 m、検出面からの深さ 15 ㎝である。

上半部を SK02 に切られている。

遺物（図版 26 － 144 ～ 147 、写真図版 20・21）

出土した弥生土器のうち 5 点を図化した。

144 は無文の広口壺で、底部を欠失する。腰の張った小型の体部から、頸部が筒状に開き、口縁部は水平にまで外反する。体部の最大径付近にキザミメを列点状に施し、体部上半をハケメ、中位を横方向のヘラミガキ、下位を縦方向のヘラミガキで調整する。口径 13.2 ㎝。

145 は短頸の広口壺の口頸部のみの破片だが、かなり大型になる器種である。口縁端部は肥厚させて外面にキザミメを綾杉状に施し、頸部には密な指頭圧痕文突帯を貼り付ける。口径 27.2 ㎝。

146 は直口壺の口頸部の破片で、口縁部には注口部を設け、直立する頸部外面には断面三角形の突帯を 3 本貼り付ける。口径 15.0 ㎝。

147 は口頸部がくの字に外反する小型の甕の上半部で、胴部最大径は口径を上回る。口径 18.5 ㎝。

時期

弥生時代中期（Ⅲ様式）に属する。

3　土坑 SK03

遺構（図版 17 、写真図版 10）

5 区南側の側溝内で見つかったため一部拡張したが、南端は調査区外に延びる。北端も側溝で失われており、幅 25 ～ 50 ㎝の範囲で検出できただけで、平面の形状は不明である。断面は皿状に掘り込み、幅約 1 m、深さ 25 ㎝である。

他の遺構との切り合い関係は無い。

遺物（図版 28 － S 3 、写真図版 22）

出土遺物には壺の破片とサヌカイト製の打製穂摘具（S3）がある。

S3 は背部、刃部ともにゆるやかな弧を描く。現状では主要剥離面もしくは同方向の剥離に切られる先行した剥離面は認められず、素材が連続的な横剥ぎによって得られたものであるかどうかは判然とし

ない。両面とも上部にやや大きな剥離を施した上で、周縁全体を丁寧に剥離して整形する。特に腹面側では均一な間隔で剥離して、意図的に鋸歯状の刃部を作り出す。腹面左端の割れは製作時のものと考えられ、欠損後もなお加工が及ぶ。刃部と背部ないし側辺のなす角度が左右両端で異なり、両者が機能的に使い分けされていた蓋然性が高い。すなわちとがった端部には、右利きであれば背面側に親指を置いて稲穂を摘み取ったことが想定され、実際に背面右端から刃部にかけて磨耗が認められる所以であろう。また、背部の鈍角端部側には一部分であるが研磨が施され端面が設けられており、当初凹凸があった部分について掌への接触を配慮し処置がなされたのであろう。長さ 109.9 ㎜、幅 54.5 ㎜、厚さ 11.2 ㎜。

時期

弥生時代中期（Ⅲ様式）に属する。

4　土坑 SK04

遺構（図版 17、写真図版 10）

５区中央に位置する。溝状の細長い土坑で、断面をボウル状に掘り込む。規模は長さ 2.2 m、幅 0.6 m、検出面からの深さ 20 ㎝である。

坑内には北東端の一部を除いて、土器が集積されており、一括に廃棄された状況であった。土器は原位置を動いていないため、完形に復元できる割合が高い。また土坑の北西縁に沿って、砥石が１点出土した。

他の遺構との関係は、掘立柱建物 SB08 に切られている。

遺物（図版 25 ～ 26 － 132 ～ 143、27 － S1、28 － S4、写真図版 20・22）

多量の弥生土器が出土しており、壺・甕・蓋を 12 点図化した。その他の器種には高杯がある。石器には砥石とサヌカイト製の打製穂摘具がある。

132 ～ 143 は弥生時代中期の土器である。

132 ～ 134 はほぼ完形に復元できる無文の広口壺で、132・133 は大型、134 は小型である。頸部が筒状に開き、口縁部は垂下気味になるまで外反する。体部は最大径を中位にもつ。132 は頸部～肩部外面をハケメ、体部中位を横方向のヘラミガキ、下位を縦方向のヘラミガキで調整し、肩部にキザミメを施す。口径 14.3 ㎝、器高 34.5 ㎝、底径 7.6 ㎝。133 は頸部～肩部外面にハケメ、体部中位に縦方向のヘラミガキが残る。口径 18.3 ㎝、器高 35.95 ㎝、底径 9.1 ㎝。134 は体部中位を横方向のヘラミガキ、下位を縦方向のヘラミガキで調整し、胴部最大径付近にキザミメを施す。口径 14.5 ㎝、器高 24.1 ㎝、底径 6.7 ㎝。

135 は短頸の広口壺で、体部は大型になる。口縁端部は肥厚させて外面にキザミメを綾杉状に施し、頸部には指頭圧痕文突帯を貼り付ける。口径 19.35 ㎝。

136 ～ 139 は壺の底部である。136 は丸みのある細身の器形で、直口壺のような器種とみられる。底径 7.6 ㎝。137 は平底から直線的に立ち上がる器形で、外面はヘラミガキで調整する。あるいはバケツ形の鉢のような器種になるかもしれない。底径 10.6 ㎝。138・139 は大型の壺の底部で、138 は倒卵形、139 は腰の張った器形の体部となる。底径は 138 が 9.05 ㎝、139 が 10.4 ㎝。

140・141 は口頸部がくの字に外反する甕である。140 は小型で体部の張りが弱く、胴部最大径は口径を下回る。外面はハケメで調整する。口径 19.0 ㎝。141 は大型で、胴部最大径は口径を上回る。口径 38.0 ㎝。

142 は甕の底部片だが、調整等は磨滅のため不明である。底径 6.9 ㎝。

143 は甕の蓋である。頂部は突出するように作り、側面には指頭圧痕が残る。口縁部は器壁が薄く、

スカート状に広がる。口径 18.4 ㎝、器高 8.9 ㎝、底径 4.45 ㎝。

S1 は砂岩を用いた砥石である。縦 14.1 ㎝、横 9.2 ㎝、厚（最大）3.05 ㎝の扁平な直方体を呈するが、砥面の状況から下部片隅のほか、図上部方向にも欠損していると考えられる。両平坦面および片側面の３面を砥面とするが、特に両平坦面では顕著な凹面を形成する。両平坦面では長軸方向での重点的な使用が認められるが、そのうち図正面側は使用以前から存在した凹凸の名残りが残存しているのであろうか、凹面の範囲内に窪みが２箇所認められる。

S4 はサヌカイト製の打製穂摘具で、全体の約４割を欠損する。薄い素材剥片の鋭いエッジを刃部にそのまま利用し、刃部の平面形態は直線的である。腹面側の背部一帯には二次的な剥離が認められ、さらに背部の中央部側では微細な潰しを意図した二次加工が観察される。残存する端部には自然面を留め、ここを打点に背面側に剥離を行う。現存長 58.5 ㎜、幅 53.5 ㎜、厚さ 8.5 ㎜。

時期

弥生時代中期（Ⅲ様式）に属する。

5　土坑 SK05

遺構（図版 17 、写真図版 10）

４区北側に位置し、北端は調査区外に延びる。平面楕円形とみられるが、南端を柱穴に切られているため、長軸方向の規模は不明である。底面の南東側を１段深く掘り込んでおり、幅 1.05 m、検出面からの深さ 25 ㎝である。

他の遺構との関係は、掘立柱建物 SB11 に切られている。

遺物（図版 26 － 148）

出土遺物には図化した高杯の他、壺・甕・鉢の破片がある。

148 は木器写しの高杯の杯部～脚部の破片とみられる。外面はヘラミガキで調整する。

時期

弥生時代中期（Ⅲ様式）に属する。

6　溝 SD09

遺構（図版４、写真図版３）

３区の対角線を結ぶように東西に延び、延長約 8.5 m分を検出した。西端は調査区外に続くが、東端は SX03 に近づいたところで不明瞭となる。底面は浅い弧状を呈し、幅 0.3 ～ 0.9 m、深さ 20 ㎝である。

他の遺構との関係は、掘立柱建物 SB17 に切られている。

遺物（図版 26 － 149 ～ 150）

出土遺物には図化した蓋・甕の他、壺の破片がある。

149 は頂部付近のみの破片だが、甕の蓋とみられる。突出する頂部の側面には指頭圧痕が残る。底径 5.3 ㎝。

150 は口頸部が、くの字に外反する小型の甕で、胴部最大径は口径を下回る。口径 16.1 ㎝。

時期

弥生時代中期（Ⅲ様式）に属する。

7　包含層

包含層から出土したサヌカイト製の石器２点を図化した。

大型打製穂摘具（図版 27 － S2、写真図版 22）

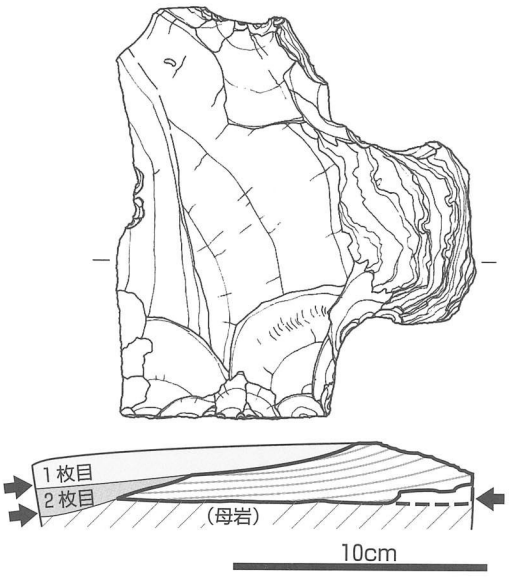
直径 20 ㎝近いサヌカイト母岩から、刃部側からの打撃による剥片が２回採取されたのちに採られた大型の剥片を利用したと考えられる（第３図）。刃縁部にはさほど顕著な剥離は認められず、素材剥片の鋭いエッジをそのまま残す。刃部を除く周縁は、両面からやや大きめの剥離を行って側縁の厚みを減じさせるとともに、抉り部の特に腹面左側を入念に整形する。特に側縁の直線的な一端では平滑な自然面を留め、ここを打点に両面に剥離させる。つまみ部の頂部から腹面にかけては自然面をとどめ、盛り上がった形状を呈している。なお、つまみ頂部の自然面は平坦な面状を呈し、ここを打面に腹面側に剥離させ厚みを減じさせている。刃部側の長さ 163 ㎜、刃部から握部までの幅 142.5 ㎜、厚さ 24.5 ㎜。

楔形石器（図版 28 － Ｓ５、写真図版 22）

サヌカイトの平坦な薄い板状の剥片が用いられ、上下一対の剥離が認められる。両側縁の潰れ具合の違いから、対象物の硬軟が推察される。すなわち、図上側の潰れの認められる側縁に打撃が加えられ、図下側の鋭い側縁が刃部となり被加工物に接していたものと考えられる。背部側の一端に自然面が認められる。左右両端に剪断面が認められ、山本誠氏が佃遺跡報文中で行った分類（山本 1998）の B2P 型に相当する。現存長 33.5 ㎜、幅 25.5 ㎜、厚さ 6.5 ㎜。

参考文献

山本誠 1998「第５章 縄文下層南区の遺構・遺物　第４節 石器」『佃遺跡　第１分冊（本文編）』兵庫県文化財調査報告第 176 冊　兵庫県教育委員会



第３図　大型打製穂摘具の素材剥片と母岩の復元

第４章　まとめ

第１節　飛鳥時代～奈良時代

１　出土土器について

調査区の西半部には窪地状もしくは小川状の落ち込み SX02 ～ 05 があり、柱穴はその埋土の上から掘り込まれている。これは居住域を整備するにあたって、窪地に廃品を投棄して整地した結果とみられる。特に SX03・05 からは供膳具・煮炊具・貯蔵具や漁具など生活用品全般が、高い完形率で出土しており、非常に一括性が高く、建物群の初源時期を探る上で大きな手掛かりとなる。

また調査区西端の溝 SD08 では古代の土器が上～下層から出土しており、時期差を層位的に捉えることができる。

以上２つの土器群を検討することで、遺物からみた年代観を明らかにしたい。

落ち込み SX03・05 の土器

須恵器杯Ｈ・杯Ｇ（蓋）・（脚付）椀・高杯・瓶・平瓶・壺・甕、土師器椀・小杯・片口鉢・鍋・把手付鍋・甕・長胴甕・甑・カマド・円筒形土器、イイダコ壺・土錘などからなり、相互に接合関係もある。

須恵器杯Ｇが主体で、杯Ｈは少ない。杯Ｇと杯Ｈの蓋は見分けがつかないため全て杯身として図化したが、切離し後の調整が丁寧な 32・37・70 については蓋の可能性がある。ただし 37 が蓋だとすると、古墳時代の混入品と考えられる。29･68 は口縁端部を外反させる癖が共通する。杯Ｇ蓋は非常に少なく、杯身単体での使用が一般的だったようである。なお杯Ａ・Ｂは認められない。

土師器椀は口径 15 ～ 16 ㎝と 11 ㎝前後の大小がある。煮炊具は浅鉢形の鍋・球形の体部をもつ把手付鍋・長胴甕・球形の体部をもつ大型甕・小型甕・甑があり、それらを移動式カマド・円筒形土器といった炊事道具と組み合わせて用いる。

溝 SD08 の土器

古代の土器は上層・中層・下層に分かれるが、下層の遺物は少量で中層の様相とも区別できないことから、両者を一括に扱う。

中層・下層は須恵器杯Ｇ（蓋）・（脚付）椀・鉢・すり鉢・瓶・壺・甕、土師器高杯・甕・羽釜・カマドなどからなる。須恵器杯Ｇが主体で､杯Ｈはほとんど認められない。ただし 114 は蓋の可能性がある。杯Ｇ蓋（95）は口径が小さく、対応する杯身が出土していない。

上層は須恵器杯Ｂ（蓋）・長頸壺などがあり、杯Ｇはみられない。

年代について

古代の土器の中では、須恵器杯Ｈを含む SX03・05 の土器群が最も古い段階である。SD08 中層・下層の土器群についても、杯Ｈを欠くものの、杯Ｇの形態を比較すると、SX03・05 との時期差は認められない。これらの土器群の様相を畿内の土器編年に比定すると、「飛鳥Ⅱ期」に該当する。ただし調査した範囲内では、杯Ｇが小径化していく変化と杯Ｂが出現する過程がうまく捉えられず、地方的な要素を加味して、「飛鳥Ⅱ～Ⅲ期」（７世紀第２～３四半期）くらいの時期幅の中で考えておく。

一方、須恵器杯Ｂを含む SD08 上層は、出土した土器群の中では最も新しい段階である。杯Ａ・Ｂが出土した掘立柱建物 SB01・土坑 SK01 についても同時期と考えられる。これらの土器群の様相を畿内

の土器編年に比定すると、「飛鳥Ⅳ～Ⅴ期」（７世紀第４四半期～８世紀第１四半期）に該当する。

出土した土器からでは、上記の２段階程度にしか時期区分はできない。両者を仮に「坂元古代Ⅰ期」「坂元古代Ⅱ期」としておく。なお遺構の切り合いなどから、その間の前後関係が明らかなものについては、新古などをつけて表記する。

円筒形土器について

出土した遺物の中に、「円筒形土器」と呼ばれる特異な形態の器種（66・80・83）がある。土師質で、裾部はスカート状もしくはドーム状に広がり、上部は細く狭まっている。外面にはタガをめぐらすため、細片だけを見れば埴輪やカマドと区別が困難である。神戸市西区上脇遺跡では飛鳥時代の土器群などの中に７点の類例が知られ、カマドと組み合わせて用いる「煙突」としての機能が想定されている（岸本一宏 2002「第５章第２節　出土遺物について」『上脇遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第 232 冊　兵庫県教育委員会）。

２　掘立柱建物について

掘立柱建物は柱列の並びから、SB01 ～ 20 の 20 棟を復原した。それ以外に復原に至らなかった方形掘り方の柱穴がいくつも残っており、本来の棟数には足りていないのであろう。また土地区画整理事業などに伴う調査では、さらに数多くの建物跡が見つかっているが、ここでは本調査の成果に絞って検討する。

形態の分類

柱列が外側のみで内側に柱をもたない建物（**Ａ型**）と、総柱建物（**Ｂ型**）がある。Ａ型の建物はまた柱穴の形・並びなどによって、次の４つに分類できる。方形掘り方の柱穴が並ぶもの（**Ａａ型**）、四隅の方形掘り方の柱穴が大きく、中間が相対的に小さいもの（**Ａｂ型**）、大型の方形掘り方の柱穴が正方位に並び、柱間が極端に大きいもの（**Ａｃ型**）、小型の方形掘り方･円形掘り方の柱穴が混じるもの（**Ａｄ型**）。

総柱建物のＢ型については、外側の柱穴が大きな方形もしくは不整形で、内側は相対的に小さい。全体の柱間がＡ型に比べて著しく狭いという特徴を指摘できる。

柱列の間数は２×２間と２×３間の２種類で、全形が判っている建物ではＡ型に２×２間と２×３間、Ｂ型に２×３間がある。

方位の分類

建物の南北軸の向きは、大きく次の４つに分類できる。南北の正方位に近いもの（**Ｎ０群**）、北から 30 ～ 35°東へ振るもの（**Ｅ１群**）、北から 40 ～ 45°東へ振るもの（**Ｅ２群**）、北から 50 ～ 58°東へ振るもの（**Ｅ３群**）。

建物群の時期

正方位に近いＮ０群の建物にはＡｃ型の SB03 ～ 06、Ａｄ型の SB02・07 があり、調査区の東側に集中する。SB03 ～ 06 は遺物量こそ少ないものの７世紀代の土器が出土しており、「坂元古代Ⅱ期」の遺構にも切られているため、「坂元古代Ⅰ期」に属するとみられる。SB03 ～ 06 はＡｃ型で柱穴・柱間とも大きく、同位置で建て替えを行っているところから、集落の中の主要な建物と考えられる。Ａｄ型の SB02・07 は時期不明だが、Ａｃ型に従属するものとも考えられる。

Ｅ１群の建物にはＡａ型の SB16・18 ～ 20、Ｂ型の SB11・17 があり、調査区の西側に集中する。総柱のＢ型の建物はここに含まれる。落ち込み SX02 ～ 05 を切る建物群の中では、切り合い関係から、

表１　掘立柱建物跡一覧表

地区	遺構名	間数		規模			柱間		棟方向		型式	時期	切り合（古＜新）	旧遺構名
		梁間(m)	桁行(m)	梁間(m)	桁行(m)	床面積(㎡)	梁間(m)	桁行(m)						
7区	SB01	2	3	3.8	5.5	20.90	1.8～2.0	1.7～1.9	N40° E	E2	Aa	Ⅱ	02 ‹01	ＳＢ01
7区	SB02	2	2＋α	4.7	(4.7)	(22.09)	2.3～2.4	1.9～2.8	N90° W	N0	Ad	Ⅰ？	02 ‹01	－
7区	SB03	2	1＋α	4.0	(2.0)	(8.00)	1.9～2.1	2.0	N2° W	N0	Ac	Ⅰ新		ＳＢ04
7区	SB04	1＋α	1＋α	(2.5)	(2.0)	(5.00)	2.5	2.0	N4° E	N0	Ac	Ⅰ古		ＳＢ05
7区	SB05	1＋α	2＋α	(2.8)	(5.2)	(14.56)	2.8	2.5～2.7	N2° W	N0	Ac	Ⅰ新	06 ‹05	ＳＢ02
7区	SB06	1＋α	2＋α	(2.9)	(4.2)	(12.18)	2.9	1.8～2.4	N2° W	N0	Ac	Ⅰ古	06 ‹05	ＳＢ03
5･6区	SB07	2	2＋α	5.5	(3.7)	(20.35)	2.7～2.8	1.8～1.9	N8° W	N0	Ad	Ⅰ？		－
5区	SB08	2	3	3.2	5.1	16.32	1.5～1.7	1.6～1.7	N58° E	E3	Ab			ＳＢ06
4･5区	SB09	2	3	3.6	5.4	19.44	1.8	1.7～1.9	N45° W	E2	Aa		09 ‹10	ＳＢ07
4･5区	SB10	1＋α	3	(1.5)	4.8	(7.2)	1.5	1.3～1.9	N35° W	E3	Ad		09 ‹10	－
4区	SB11	1＋α	3	(1.3)	3.5	(4.55)	1.3～1.5	1.1～1.3	N60° W	E1	B		11 ‹14	ＳＢ08
4区	SB12	2	2	3.6	3.3	11.88	1.4～2.2	1.5～1.8	N37° W	E3	Aa	Ⅰ		ＳＢ09
3･4区	SB13	2	3	3.5	5.7	19.95	1.7～1.8	1.7～2.2	N40° W	E3	Ab	Ⅰ		ＳＢ10
3･4区	SB14	2	3	3.5	6.0	21.00	1.6～1.8	1.7～2.3	N40° E	E2	Aa		11 ‹14	ＳＢ11
3区	SB15	2	2	3.1	3.6	11.16	1.5～1.6	1.7～1.8	N40° W	E3	Ad	Ⅱ？	17 ‹15	－
3区	SB16	1＋α	3	－	4.5	－	－	1.4～1.6	N55° W	E1	Aa	Ⅱ		－
3区	SB17	2	3	3.6	3.6	12.96	1.6～2.0	1.1～1.4	N33° E	E1	B	Ⅱ	17 ‹15	ＳＢ13
2･3区	SB18	2	1＋α	4.1	－	－	2.0～2.1	－	N33° E	E1	Aa	Ⅰ		ＳＢ14
2･3区	SB19	2	1＋α	4.2	－	－	2.1	－	N35° E	E1	Aa	Ⅰ		ＳＢ15
1区	SB20	2	1＋α	3.6	－	(4.86)	1.7～1.9	1.3～1.4	N35° E	E1	Aa	Ⅰ		ＳＢ16

表２　掘立柱建物分類表

Ａ型	柱列が外側のみで内側に柱をもたない建物	
	Ａａ型	方形掘り方の柱穴が並ぶもの
	Ａｂ型	四隅の方形掘り方の柱穴が大きく、中間が相対的に小さいもの
	Ａｃ型	大型の方形掘り方の柱穴が正方位に並び、柱間が極端に大きいもの
	Ａｄ型	小型の方形掘り方・円形掘り方の柱穴が混じるもの
Ｂ型	総柱建物	

表３　時期別の掘立柱建物跡

南北軸の方位	Ｎ0群 N0° 付近	Ｅ１群 N30-35° E	Ｅ２群 N40-45° E	Ｅ３群 N50-58° E
古代Ⅰ期	ＳＢ02～07	ＳＢ18～20		ＳＢ12・13
古代Ⅱ期		ＳＢ16・17	ＳＢ01	ＳＢ15

最も古い一群となるが、一部の建物は重複しており、前後関係が存在する。SB17からは「飛鳥Ⅳ・Ⅴ期」、SB19からは「飛鳥Ⅱ・Ⅲ期」の土器が出土しており、溝SD10～13との関係で親縁性の高いSB16・17が「坂元古代Ⅱ期」、残りのSB18～20が「坂元古代Ⅰ期」と判断する。SB11は時期不明だが、E2群のSB14より古い。

E2群の建物にはAa型のSB01・09・14があり、調査区の中央から東に散在する。SB01は須恵器杯A・Bが明確に伴っており、「坂元古代Ⅱ期」が明らかである。SB09・14に時期を示す遺物はないが、SB09はE3群のSB10より古く、SB14はE1群のSB11より新しい。

E3群の建物にはAa型のSB12、Ab型のSB08・13、Ad型のSB10・15があり、調査区の中央付近に集中する。SB12・13は時期を確実に抑えられる遺物は少ないが、「坂元古代Ⅰ期」に属するものとみられる。SB08・10・15に時期を示す遺物はないが、SB15はSB17より新しいため、「坂元古代Ⅱ期」としておく。またSB10はSB09より新しく、SB08はSB07・09と重複していて時期差をもつ。

建物群の変遷

「坂元古代Ⅰ期」に属すると判断できた建物は、調査区の東側にSB02～07（N0群）、中央にSB12・13（E3群）、西側にSB18～20（E1群）があり、軸線を共有する建物群ごとにある程度まとまりをもって分布している。

上記の建物群のうち調査区中央～西側では、落ち込みSX02～05の埋土を切って建築されている。これらの落ち込みは自然の窪地や小川で、居住域の移転や拡大を契機に一気に埋め立てられたものと考えられ、そこから出土した土器は建物群成立の開始時期を示すものと考えられる。

またN0群SB05・06の南側延長線上に位置する土地区画整理事業調査の28区では、同じ方位の柱列・建物が続いており、南北方位を意識した建物が繰り返し建てられていることが確認できる。

ただし異なる3つの軸線の建物群同士が、「坂元古代Ⅰ期」の時期幅の中でどのような関係になるかは不明である。

「坂元古代Ⅱ期」に属すると判断できた建物は、調査区の東側にSB01（E2群）、西側にSB16・17（E1群）・SB15（E3群）がある。

以上の検討の結果では、建物の軸線がそのまま時期差を反映しているとは限らないことが判明した。それよりも集落の中の立地によって、軸線を共有する建物群が存続する状況を示唆している。しかし柱穴の時期を明確に示す遺物は乏しく、判断した遺構の時期も根拠が薄いものがある。今後、周辺の調査成果が整理された段階で、再検討されることを望む。

参考文献

古代の土器研究会編 1992『都城の土器集成』古代の土器1
古代の土器研究会編 1996『煮炊具（近畿編）』古代の土器4

第2節　弥生時代中期～後期

1　後期の遺構と遺物

弥生時代後期の遺構は溝SD08のみで、別府川に面した段丘崖上端の斜面に沿って開削されている。幅4m、深さ2mを超える大規模なものだが、調査区内に同時期の他の遺構は認められず、環濠のよう

な性格は考えがたい。南延長にあたる土地区画整理事業の調査区では、溝は次第に崖面から離れて段丘の奥へ入ってゆく。北延長側のつながりは不明なものの、別府川の支流である白ヶ池川の開析谷に遮られる。弥生時代後期から、溝が埋め立てられた飛鳥時代までの間は開放状態を保っており、長く利用されていた。そうした状況からみて、SD08 は白ヶ池川の谷から引き込んだ水を段丘上に持ち上げる水路であったのではないかという可能性を指摘しておく。

土器は最下層黒色シルトから出土している。広口壺・長頸壺の口縁端部は拡張・加飾が目立たず、後期初頭よりは後出的である。一方で甕は少ないものの、タタキを全面に残す破片は認められない。高杯には中期的な脚部が残るところなどからみて、後期前半の範疇で捉えられる。

2　中期の遺構と遺物

弥生時代中期の遺構には土坑 SK02 下層・03 ～ 05、溝 SD09 がある。土坑は楕円形・溝状のものが散在し、埋積状況も土器が密集するものと数点のみのものなど、まちまちである。溝も含めて、調査区内だけでは遺構の相互関係は判然としない。土地区画整理事業の南側の調査区では、竪穴住居が見つかっているところから、集落全体の中では、縁辺部に近いものと考えられる。

出土土器を神戸市西区玉津田中遺跡の弥生時代Ⅲ・Ⅳ期の土器編年に照らしてみると、広口壺（132 ～ 134･144）は玉津田中遺跡の広口壺Ｊにあたる。同様に広口壺（135･145）は広口壺Ｌに、直口壺（146）は直口壺Ｃに相当する。土器群全体に加飾の多い器種を欠き、甕の破損状況が激しいという特徴を指摘でき、日用品を廃棄した状況が看て取れる。それは同時に土器の時期を捉えにくい点につながるが、口縁部の加飾が少ない、胴部最大径が概ね中位より上にある、甕の口縁端部の拡張が進んでいないといった特徴から、玉津田中遺跡のⅢ－２期（中期中頃）が最も近いと考えられる。

参考文献

兵庫県教育委員会 1996『玉津田中遺跡（第６分冊）総括編』兵庫県文化財調査報告第 135-6 冊

第３節　結語

平成 11 年度に行った坂元遺跡で最初の本発掘調査では、飛鳥時代～奈良時代と弥生時代中期～後期の集落跡の存在が明らかとなった。その後、平成 15 ～ 18 年度にかけて行われた土地区画整理事業および東播磨南北道路に伴う本発掘調査により、さらに広い範囲に弥生時代～中世の集落跡が広がっていたことが判明した。特に古墳時代後期の埴輪窯跡は、県下初の調査例である。

飛鳥時代～奈良時代の建物群の総数は 80 棟以上にのぼり、遺跡の内容と地理的条件からみて、「山陽道賀古駅家」に関連する遺跡であることが確実視されてきている。また出土土器は煮炊具の良好なセットを含んでおり、東播磨地域の当該時期の基準資料の１つとなるであろう。

弥生時代中期～後期の居住域の中心部は、その後の調査で南側に広がっていることが判明した。また白ヶ池川を挟んだ北側には、中期の墓域が存在することも判っている。後期の溝 SD08 の機能については、他地区とのつながりの中で、今後検討されるべきである。

坂元遺跡の全体像については、土地区画整理事業・東播磨南北道路に伴う調査成果の整理が進んだ段階に、大きな果実となって供されるものと期待できる。

表４　土器一覧表

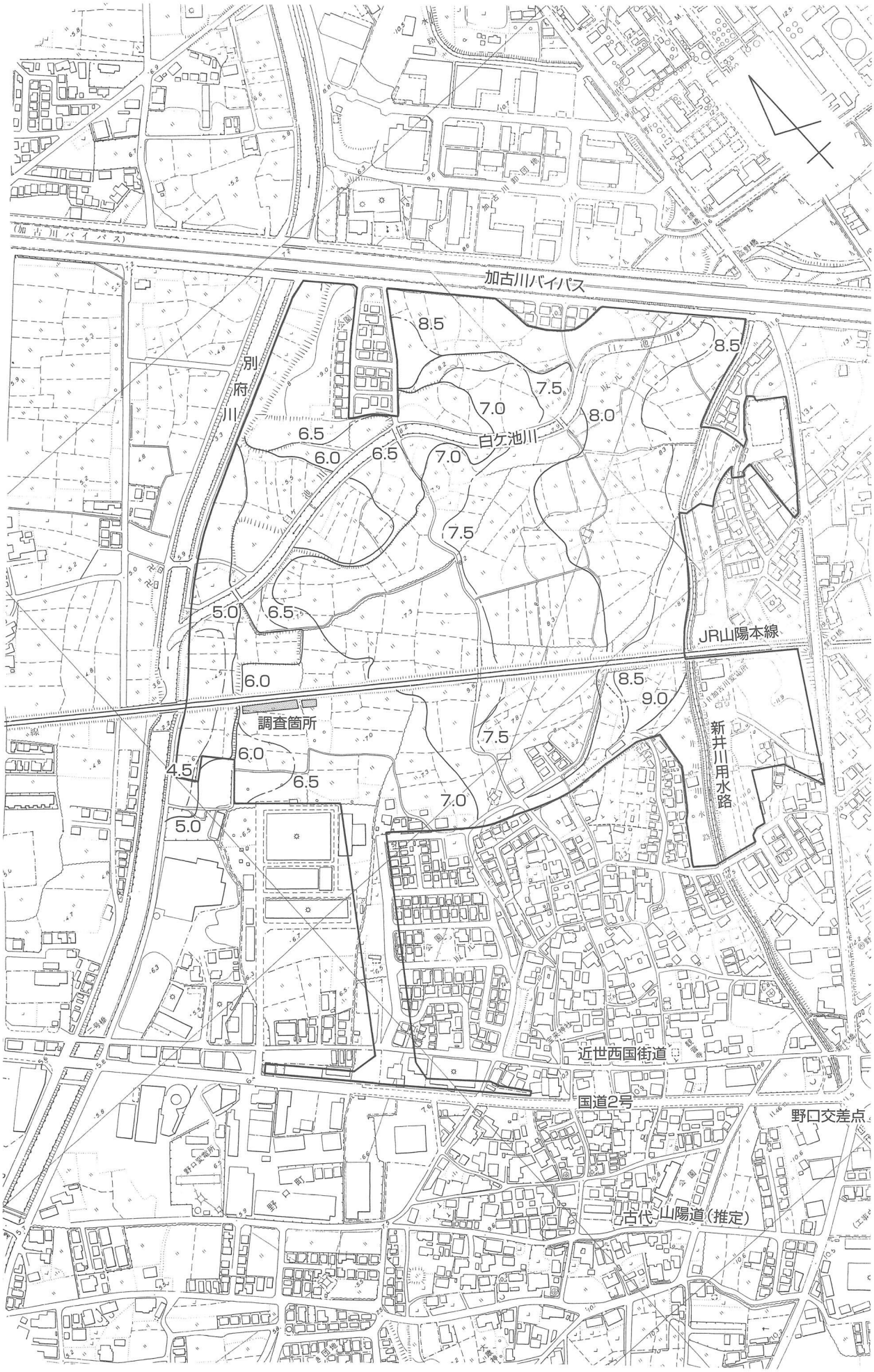
報告No	種　別	器　種	口　径	器　高	底　径	地　区	遺構1	遺構2	土　層	備　　考
1	須恵器	杯Ｂ蓋	(14.3)	(1.2)		7区	P9	SB01		断ち割り
2	須恵器	杯Ｂ	(14.3)	3.9	(10.1)	7区	P9	SB01		断ち割り
3	須恵器	杯Ａ	(13.3)	(3.4)	(9.2)	7区	P5	SB01		断ち割り
4	須恵器	杯Ｇ蓋	(13.4)	(1.4)		7区	P46	SB05		
5	土製品	土錘	長(4.65)	幅1.65	厚1.3～1.4	7区	P65	SB05		断ち割り
6	土師器	小杯	(11.4)	(2.5)		4区	P252	SB12		
7	土師器	片口鉢	(17.1)	(4.2)		4区	P201	SB12		断ち割り
8	須恵器	小杯	(9.1)	(2.1)		3～4区	P236	SB13		
9	須恵器	長頸壺	(8.4)	(5.5)		4区	P178	SB13		断ち割り
10	土師器	椀	(16.6)	(3.4)		4区	P189	SB13		
11	土師器	甕	(25.3)	(10.75)		3～4区	P236	SB13		
12	須恵器	杯Ａ	(13.8)	(3.35)		3区	P242	SB17		
13	須恵器	杯Ｇ	(13.0)	(3.25)		3区	P313	SB19		
14	須恵器	杯Ｇ蓋	(9.7)	(1.75)		1区	P341			断ち割り
15	須恵器	小杯	(10.6)	(2.7)		7区	P40			
16	須恵器	杯Ｂ	(17.1)	4.8	(12.9)	4区	P138			
17	土師器	甕	(20.0)	(4.3)		1区	P335			掘り方
18	土師器	カマド	(28.9)	(7.35)		2区	P1001			断ち割り
19	土師器	鍋	(39.7)	(10.3)		1区	P341			断ち割り
20	須恵器	杯Ｂ	(14.2)	(4.25)	(10.1)	7区拡	SK01			アゼ東半部
21	須恵器	杯Ｂ		(3.05)	(11.8)	7区	SD03			アゼより南側
22	瓦	平瓦	長(8.5)	幅(6.8)	厚1.5～1.7	7区	SD03			アゼより南側
23	須恵器	杯Ｂ		(2.65)	(8.0)	7区	SD01			Ａ区
24	須恵器	杯Ｇ	(11.7)	4.35	6.25	7区	SD01			Ｂ区
25	須恵器	高杯	(10.85)	8.0	9.4	7区	SD01			Ｃ区 (P5周りのあぜ)
26	須恵器	鉢		(6.65)		7区	SD01			Ｂ区
27	須恵器	無頸壺	(8.7)	(6.1)		7区	SD01			Ｂ区
28	土師器	甕	(11.4)	(6.4)		7区	SD01			Ｃ区 (P5周りのあぜ)
29	須恵器	杯Ｇ	(12.2)	(4.2)	6.8	4区	SX03			B
30	須恵器	杯Ｇ	(12.6)	3.75	(6.6)	4区	SX03			A
31	須恵器	杯Ｇ	12.5	3.9	6.6	4区	SX03			A
32	須恵器	杯Ｇ	(11.65)	3.75	(5.65)	4区	SX03			B
33	須恵器	杯Ｇ	(11.9)	4.5	7.2	4区	SX03			A
34	須恵器	杯Ｇ	(11.3)	4.6	7.5	4区	SX03			C
35	須恵器	椀	13.2	5.1	6.65	4区	SX03			A
36	須恵器	椀	14.1	4.3	9.65	4区	SX03			A
37	須恵器	杯Ｇ	(12.2)	4.5	(8.8)	4区	SX03			A
38	須恵器	杯Ｈ	(10.4)	(4.2)	(6.3)	4区	SX03			C
39	須恵器	杯Ｈ	(10.7)	4.35	5.7	4区	SX03			B
40	須恵器	高杯	(13.7)	7.9	9.45	4区	SX03			B
41	須恵器	椀	(16.1)	(6.8)		4区	SX03			A
42	須恵器	甕	(7.5)	10.4		4区	SX03			A
43	須恵器	壺	(15.4)	(3.7)		4区	SX03			B
44	須恵器	甕	(22.6)	(8.9)		4区	SX03			Ａ－Ｂ間アゼはずし時
45	土師器	椀	(16.1)	6.8		4区	SX03			B
46	土師器	椀	(16.0)	(5.5)		4区	SX03			C
47	土師器	椀	(15.2)	(5.35)		4区	SX03			C
48	土師器	椀	(11.9)	(4.1)		4区	SX03			B
49	土師器	小杯	(9.75)	3.45	6.0	4区	SX03			C
50	土師器	片口鉢	(32.0)	(8.9)		4区	SX03			B
51	土師器	鍋	(37.8)	(6.3)		3区	SX03			ＣｏｒＤ
52	土師器	鍋	(36.4)	14.75		4区	SX03			B
53	土師器	甕	21.0	30.5		4区	SX03			土器Ａ
54	土師器	甕	21.1	(37.0)		4区	SX03			Ａ－Ｂ間アゼはずし時
55	土師器	甕		(30.5)		4区	SX03			B
56	土師器	把手付鍋	24.5	23.4	14.2	4区	SX03			B
57	土師器	把手付鍋	26.4	25.8	(18.2)	4区	SX03			B
58	土師器	把手付鍋	(23.5)	(15.0)		4区	SX03			B

報告No	種　別	器　種	口　径	器　高	底　径	地　区	遺構1	遺構2	土　層	備　　考
59	土師器	甕	(13.8)	(10.2)		4区	SX03			A
60	土師器	甕	(13.3)	(9.35)		4区	SX03			B
61	土師器	イイダコ壺	(5.3)	11.4	4.4	4区	SX03			A
62	土師器	イイダコ壺	(4.8)	12.2		4区	SX03			B
63	土師器	イイダコ壺	6.9	(10.8)		4区	SX03			C
64	土製品	土錘	長7.65	幅2.1	厚1.8	4区	SX03			B
65	土師器	カマド	(27.8)	(7.2)		4区	SX03			A
66	土師器	円筒形土器		(33.1)	(47.0)	4区	SX03			C
67	土師器	カマド	長(16.5)	幅(10.05)	高(5.1)	4区	SX03			B
68	須恵器	杯G	(12.2)	4.6	6.4	1～2区	SX05			北半部
69	須恵器	杯G	(12.9)	4.4	6.25	1～2区	SX05			北半部
70	須恵器	杯G	(10.9)	3.6	6.95	1～2区	SX05			北半部
71	須恵器	杯H	11.1	3.7	7.0	1～2区	SX05			北半部
72	須恵器	高杯	(13.7)	(7.0)	(8.7)	1～2区	SX05			アゼはずし時
73	須恵器	脚付椀	(13.2)	(7.9)		1～2区	SX05			北半部
74	須恵器	脚部		(6.9)	(18.6)	1～2区	SX05			
75	須恵器	甕		(7.5)		1～2区	SX05			南半部
76	須恵器	平瓶		(12.55)	(8.45)	1～2区	SX05			北半部
77	須恵器	甕	(28.2)	(6.2)		1～2区	SX05			北半部
78	土師器	椀	16.9	6.6		1～2区	SX05			北半部
79	土師器	イイダコ壺	(7.1)	12.4		1～2区	SX05			北半部
80	土師器	円筒形土器	(10.3)	(16.45)		1～2区	SX05			北半部
81	土師器	甕	19.9	29.0		1～2区	SX05			北半部
82	土師器	甑	(22.6)	(15.7)		1～2区	SX05			南半部
83	土師器	円筒形土器		(9.2)	(30.5)	1～2区	SX05			北半部
84	須恵器	甕		(10.0)		3区				北側溝 (No.2＋7m)
85	土師器	鍋	(39.4)	(9.0)		3区				西側．側溝内
86	土製品	土錘	長6.4	幅1.9～2.0	厚1.6～2.05	西地区			黄褐色土	機械掘削
87	土製品	土錘	長(5.15)	幅1.8～2.0	厚1.5～1.55	7区				精査時
88	瓦 (土師質)	平瓦	長(9.1)	幅(7.3)	厚2.0	7区			黄褐色シルト･灰色シルト(包含層)	中央部北半部 (西側)
89	瓦 (須恵質)	平瓦	長(13.5)	幅(6.6)	厚1.7	1区			包含層 (灰色シルト)	
90	須恵器	杯B蓋	(17.75)	1.95		1区	SD08		上層	
91	須恵器	杯B	(15.0)	4.4	(11.0)	1区	SD08		上層	
92	須恵器	杯B	(16.7)	4.5	(12.5)	1区	SD08		上層	
93	須恵器	長頸壺	(11.5)	26.3	8.0	1区	SD08		上層	
94	須恵器	杯G蓋	(10.1)	(2.0)		1区	SD08		中層	南半部
95	須恵器	杯G	(11.7)	3.95	7.2	1区	SD08		中層（暗褐色シルト）	
96	須恵器	杯G	11.7	4.05	7.65	1区	SD08		中層	南半部
97	須恵器	椀	(10.55)	5.5	8.7	1区	SD08		中層（暗褐色シルト）	北半部
98	須恵器	椀	(12.2)	5.3	(6.3)	1区	SD08		中層（暗褐色シルト）	北半部
99	須恵器	鉢	(19.7)	(8.1)		1区	SD08		中層	南半部
100	須恵器	脚付椀		(7.15)		1区	SD08		中層（暗褐色シルト）	
101	須恵器	甕		(7.9)		1区	SD08		中層	南半部
102	須恵器	すり鉢		(4.15)	(8.4)	1区	SD08		中層	南半部
103	須恵器	壺	(11.0)	(8.2)		1区	SD08		中層	南半部
104	須恵器	甕	(22.8)	(11.1)		1区	SD08		中層（暗褐色シルト）	北半部
105	須恵器	甕	(40.0)	(7.9)		1区	SD08		中層（暗褐色シルト）	
106	土師器	高杯		(6.45)	(9.9)	1区	SD08		中層	南半部
107	土師器	甕	(24.0)	(9.4)		1区	SD08		中層（暗褐色シルト）	
108	土師器	甕	(34.2)	(7.5)		1区	SD08		中層（暗褐色シルト）	

報告No	種　別	器　種	口　径	器　高	底　径	地　区	遺構1	遺構2	土　層	備　　考
109	土師器	羽釜	(30.8)	(9.1)		1区	SD08		中層	南半部
110	土師器	カマド		29.3	最大幅(18.2)	1区	SD08		中層（暗褐色シルト）	北半部
111	土師器	カマド	長(12.85)	幅5.4	高(4.2)	1区	SD08		上層	
112	須恵器	杯G	12.15	3.9	6.9	1区	SD08		下層（青灰シルト）	北半部
113	須恵器	杯G	(11.4)	(3.8)		1区	SD08		下層（青灰シルト）	
114	須恵器	椀	(12.6)	5.1	9.65	1区	SD08		下層（青灰シルト）	
115	土師器	甕	(17.2)	(5.05)		1区	SD08		下層（青灰シルト）	
116	土師器	高杯		(8.8)		1区	SD08		下層（青灰シルト）	
117	土製品	紡錘車	径2.7～4.3	高3.5		1区	SD08		下層（青灰シルト）	
118	須恵器	椀	(10.6)	(9.2)		1区	SD08		最下層（黒色シルト）	
119	須恵器	壺	(11.2)	(10.5)		1区	SD08		最下層（黒色シルト）	
120	弥生土器	広口壺	(18.2)	(10.8)		1区	SD08		最下層（黒色シルト）	
121	弥生土器	壺	(13.6)	(8.8)		1区	SD08		最下層（黒色シルト）	
122	弥生土器	壺	(17.3)	(6.7)		1区	SD08		最下層①	土器溜まり
123	弥生土器	壺	(14.0)	(4.45)		1区	SD08		最下層①	土器溜まり
124	弥生土器	長頸壺	(14.6)	(11.0)		1区	SD08		最下層①	土器溜まり
125	弥生土器	甕	(14.3)	(3.6)		1区	SD08			溝底
126	弥生土器	壺底部		(4.5)	5.9	1区	SD08		最下層（黒色シルト）	
127	弥生土器	壺底部		(4.0)	6.9	1区	SD08		最下層（黒色シルト）	
128	弥生土器	壺底部		(5.7)	(10.0)	1区	SD08		最下層（黒色シルト）	
129	弥生土器	甕底部		(1.7)	6.95	1区	SD08			溝底
130	弥生土器	高杯		(5.9)	(8.0)	1区	SD08		最下層（黒色シルト）	
131	弥生土器	高杯		(11.8)		1区	SD08		最下層①	土器溜まり
132	弥生土器	広口壺	14.3	(34.5)	(7.6)	5区	SK04			A
133	弥生土器	広口壺	18.3	35.95	9.1	5区	SK04			H
134	弥生土器	広口壺	14.5	24.1	(6.7)	5区	SK04			B
135	弥生土器	壺	19.35	(14.15)		5区	SK04			E
136	弥生土器	壺底部		(13.0)	7.6	5区	SK04			E
137	弥生土器	壺底部		(10.6)	10.35	5区	SK04			B
138	弥生土器	壺底部		(21.0)	9.05	5区	SK04			G
139	弥生土器	壺底部		(11.1)	(9.8)	5区	SK04			E
140	弥生土器	甕	(19.0)	(9.3)		5区	SK04			E
141	弥生土器	甕	(38.0)	(7.25)		5区	SK04			J
142	弥生土器	甕底部		(8.3)	(6.9)	5区	SK04			J
143	弥生土器	甕蓋	(18.4)	8.9	4.45	5区	SK04			北半部
144	弥生土器	広口壺	13.2	(21.7)		7区	SK02			西半部. 弥生土坑
145	弥生土器	壺	(27.2)	(7.5)		7区	SK02			西半部. 弥生土坑
146	弥生土器	直口壺	(15.0)	(9.45)		7区	SK02			西半部. 弥生土坑
147	弥生土器	甕	(18.5)	(9.5)		7区	SK02			西半部. 弥生土坑
148	弥生土器	高杯		(10.1)		4区	SK05			
149	弥生土器	甕蓋		(6.8)	5.3	3区	SD09			南半部
150	弥生土器	甕	(16.1)	(6.25)		3区	SD09			アゼ北側

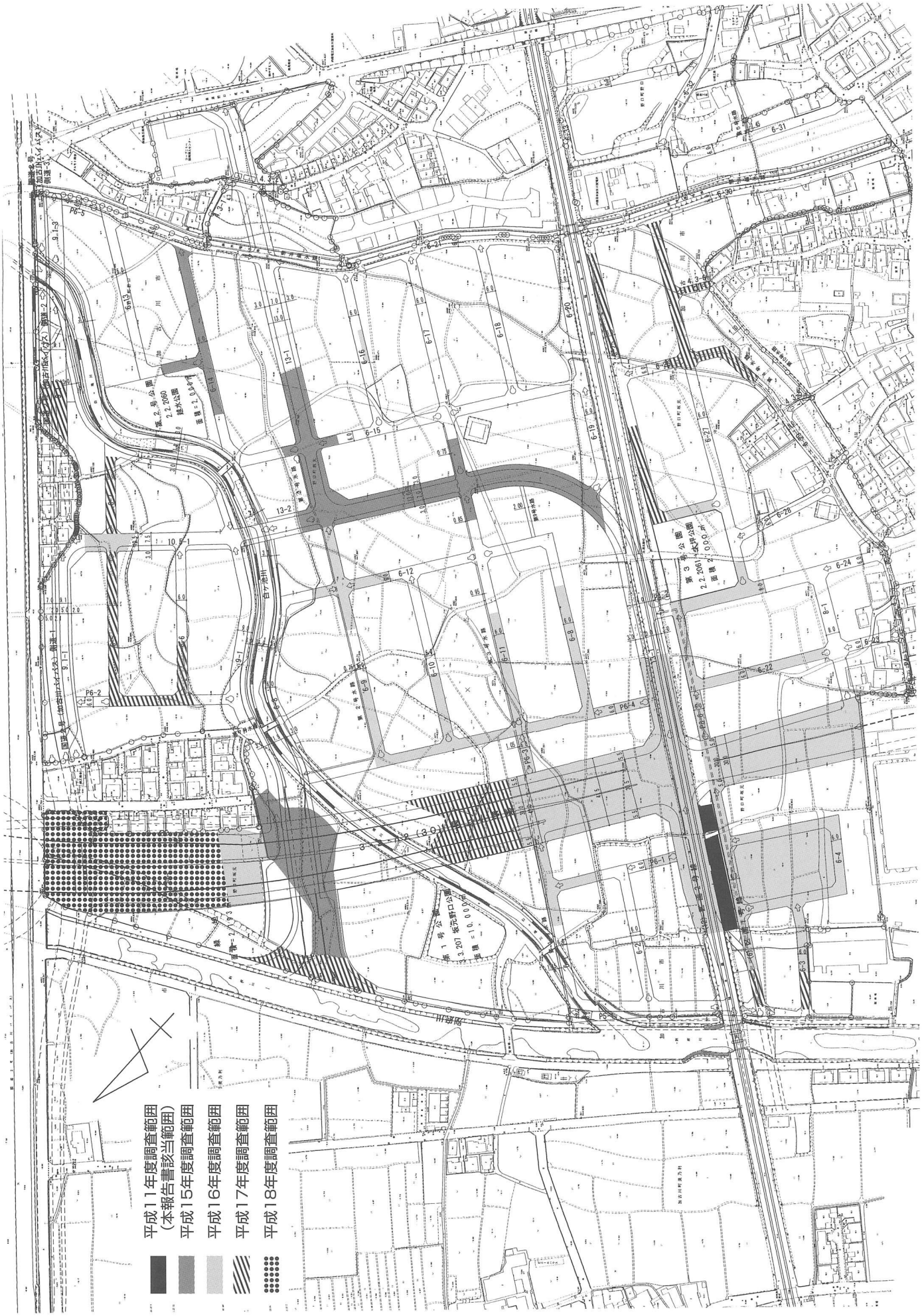
図　版

事業化以前の坂元遺跡周辺と微地形等高線図 (1/5,000)

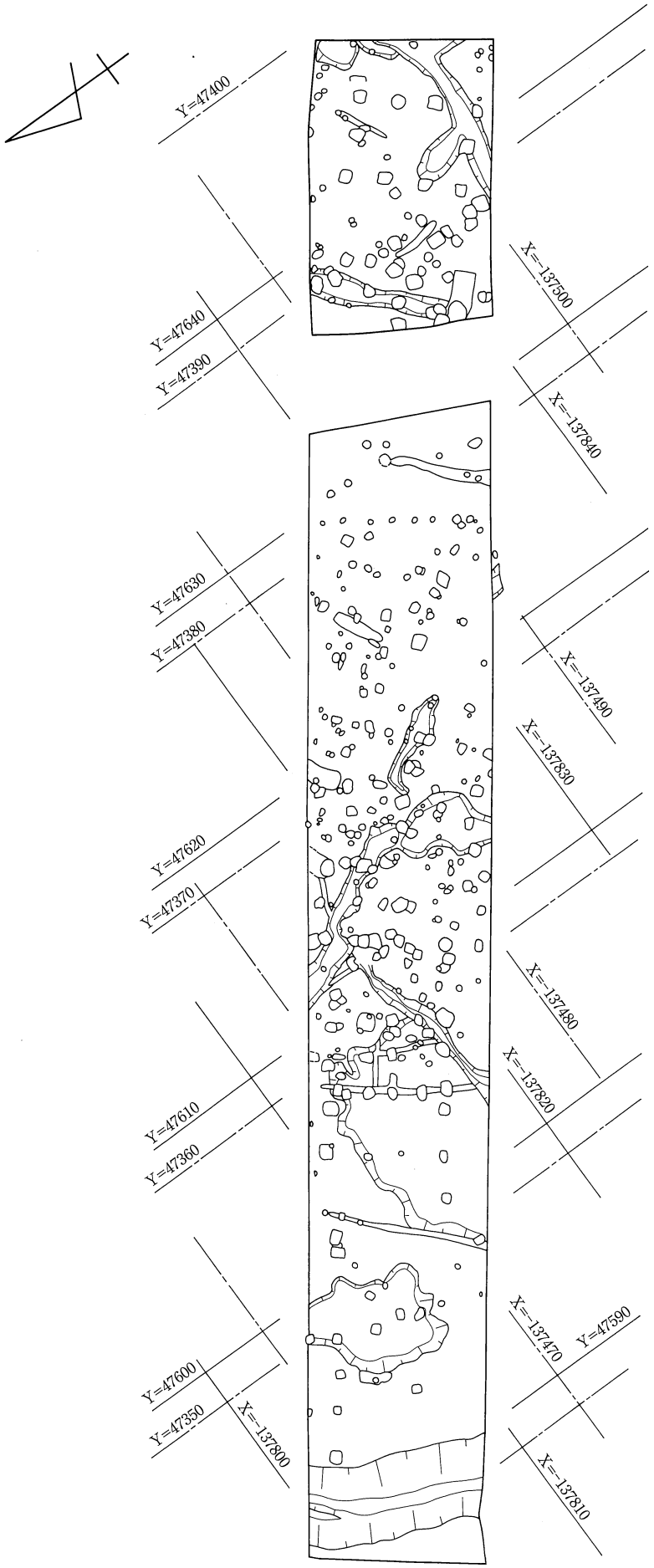


図版２

土地区画整理事業地内での本発掘調査箇所（1/3,000）



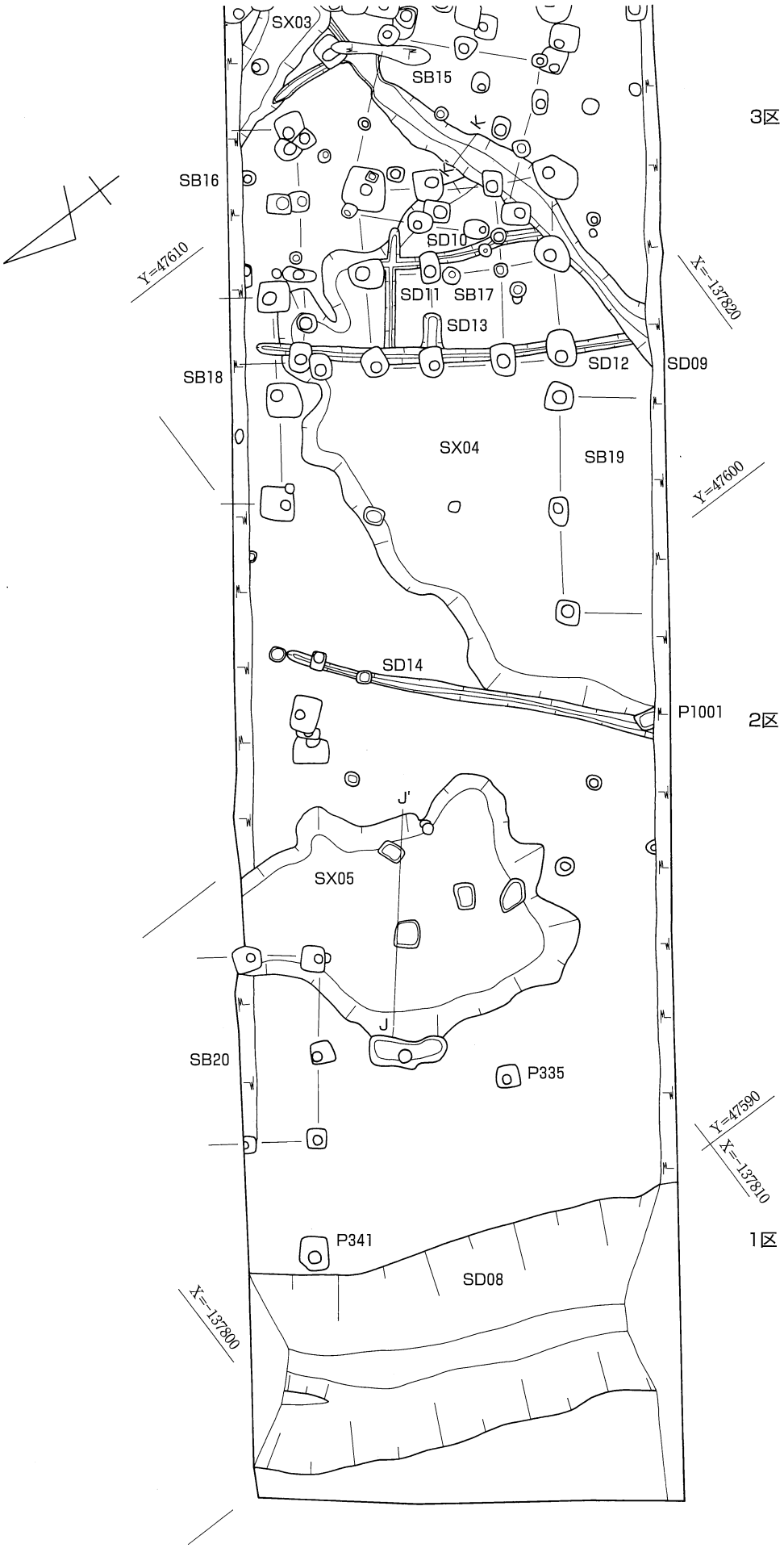
遺構全体図（1/300）



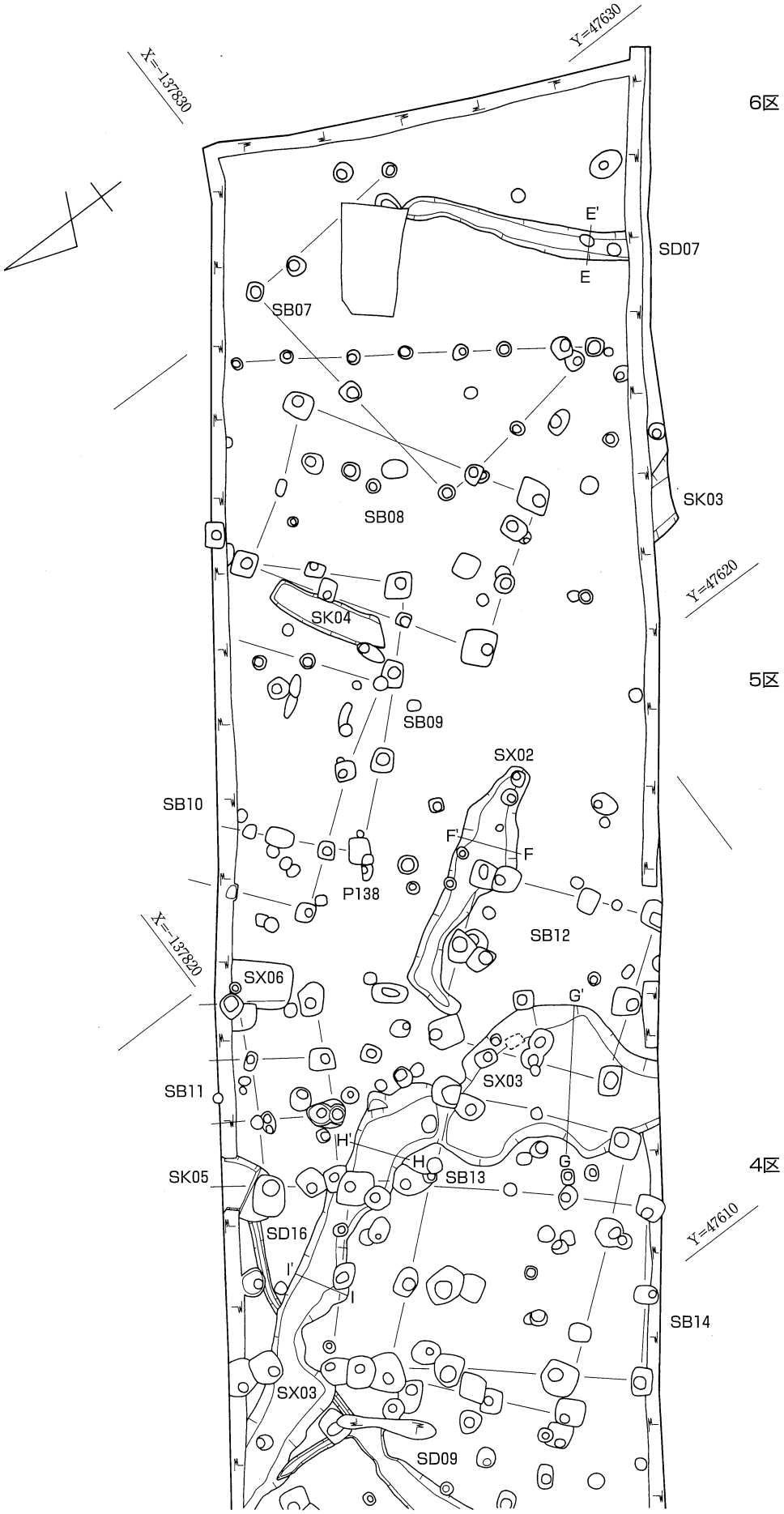
実線:日本測地系
（調査時の座標）
1点鎖線:世界測地系

図版４

遺構分割図 １～３区 (1/120)

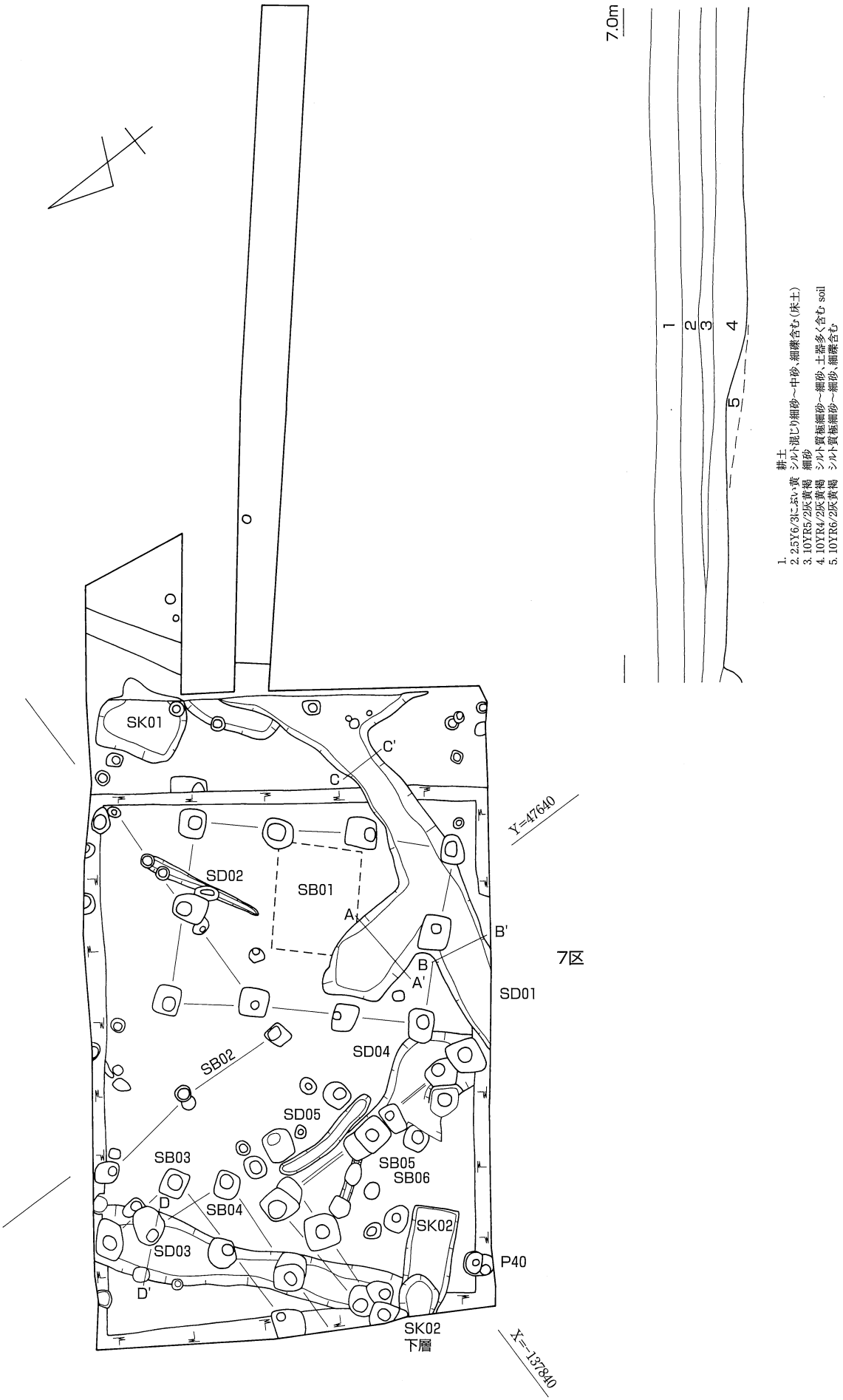


遺構分割図 ４～６区 (1/120)

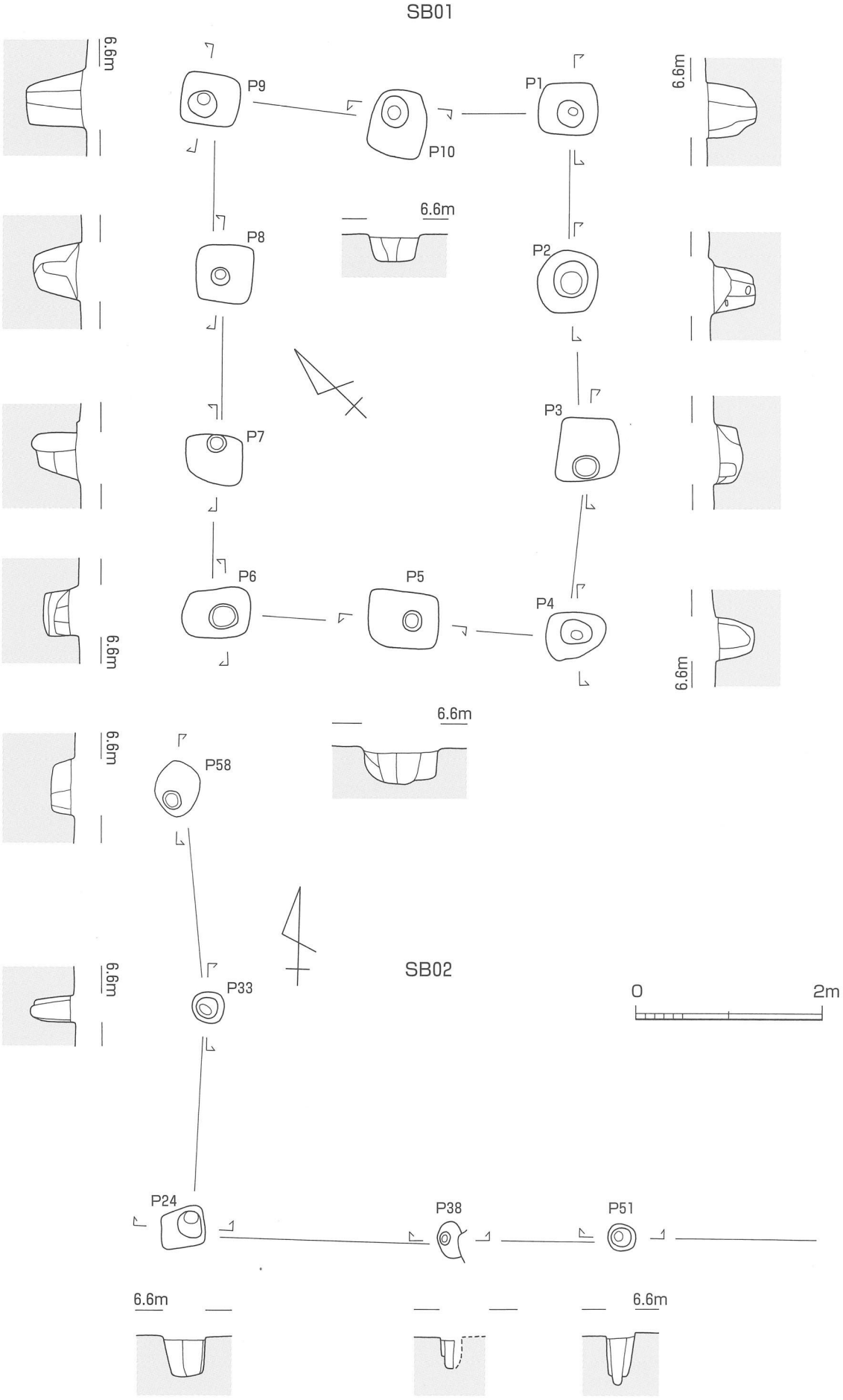


図版６

遺構分割図 ７区（1/120、断面は 1/40）

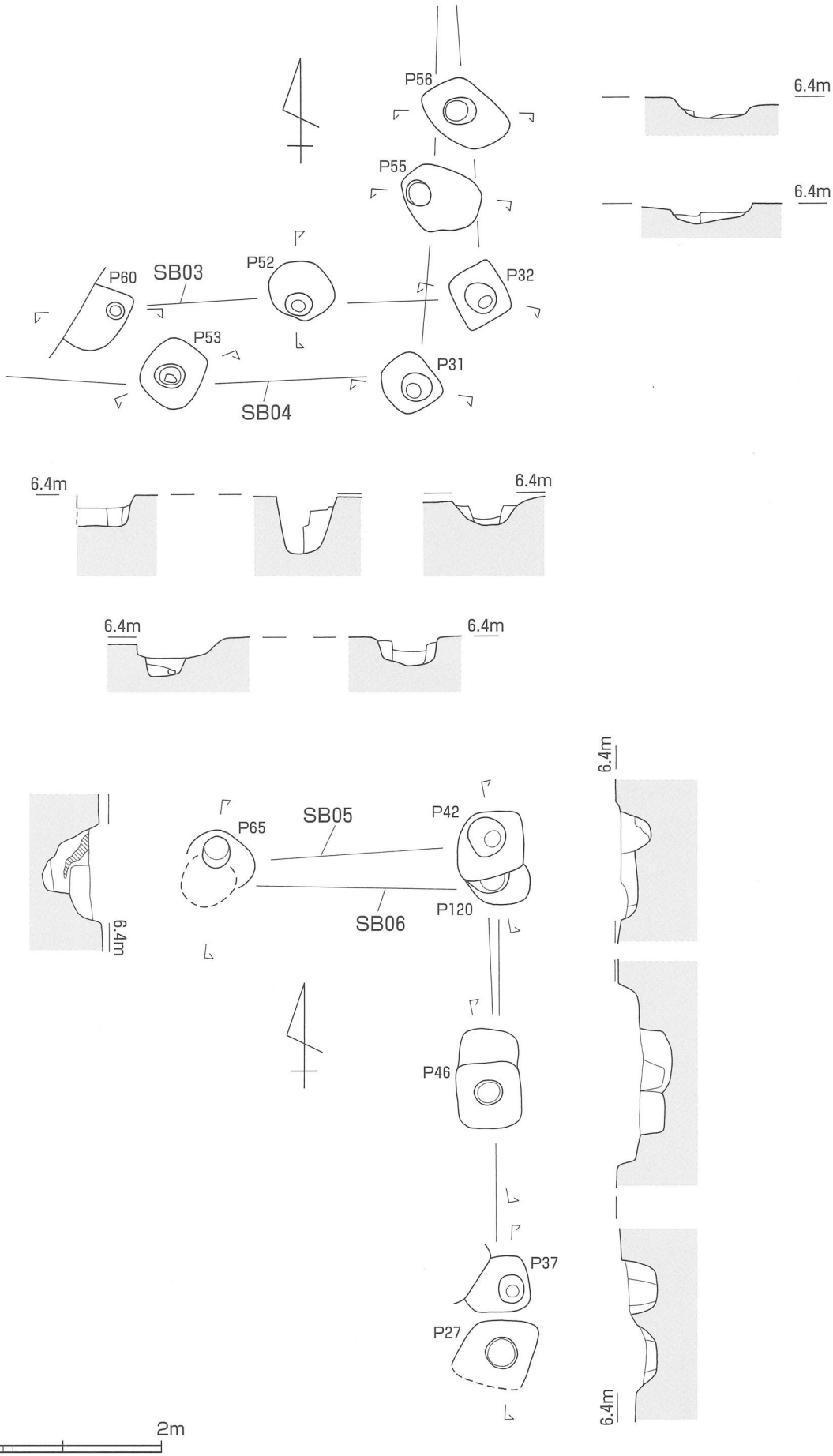


掘立柱建物 SB01 ～ 02

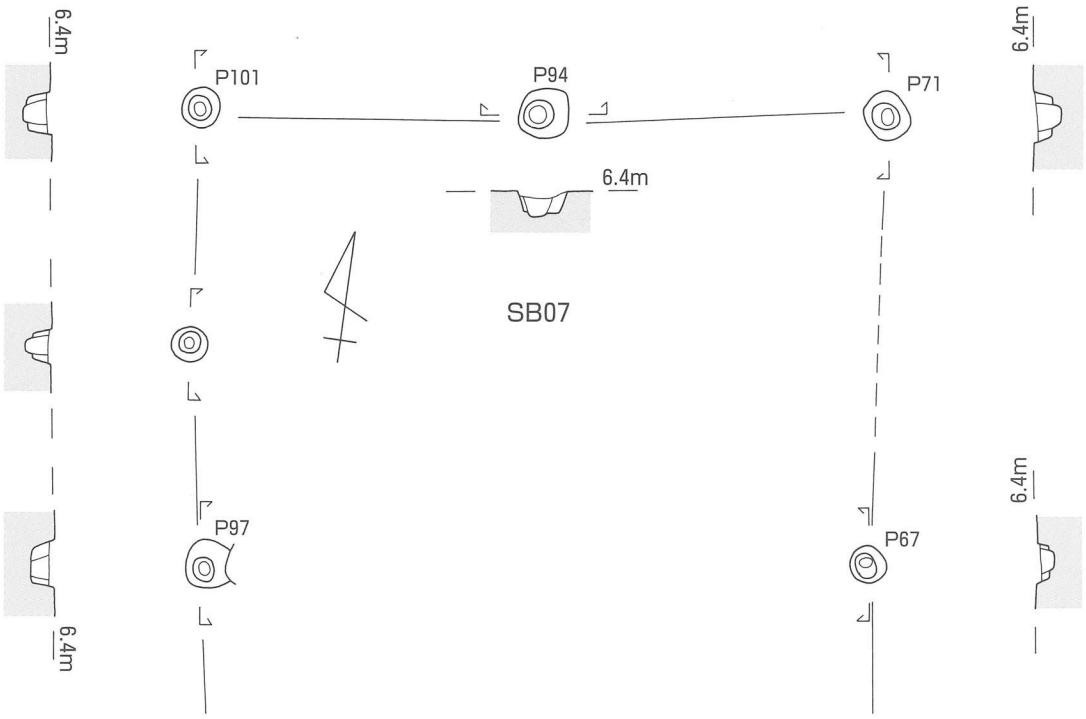


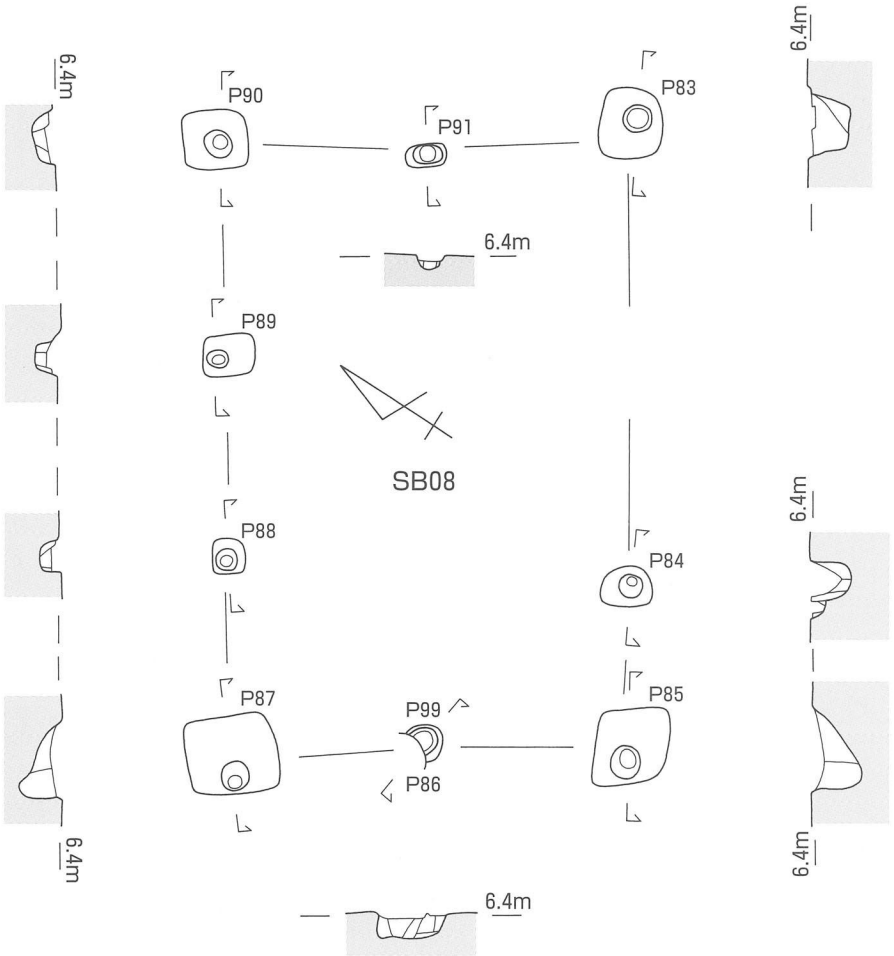
図版8

掘立柱建物 SB03 ～ 06



掘立柱建物 SB07 ～ 08

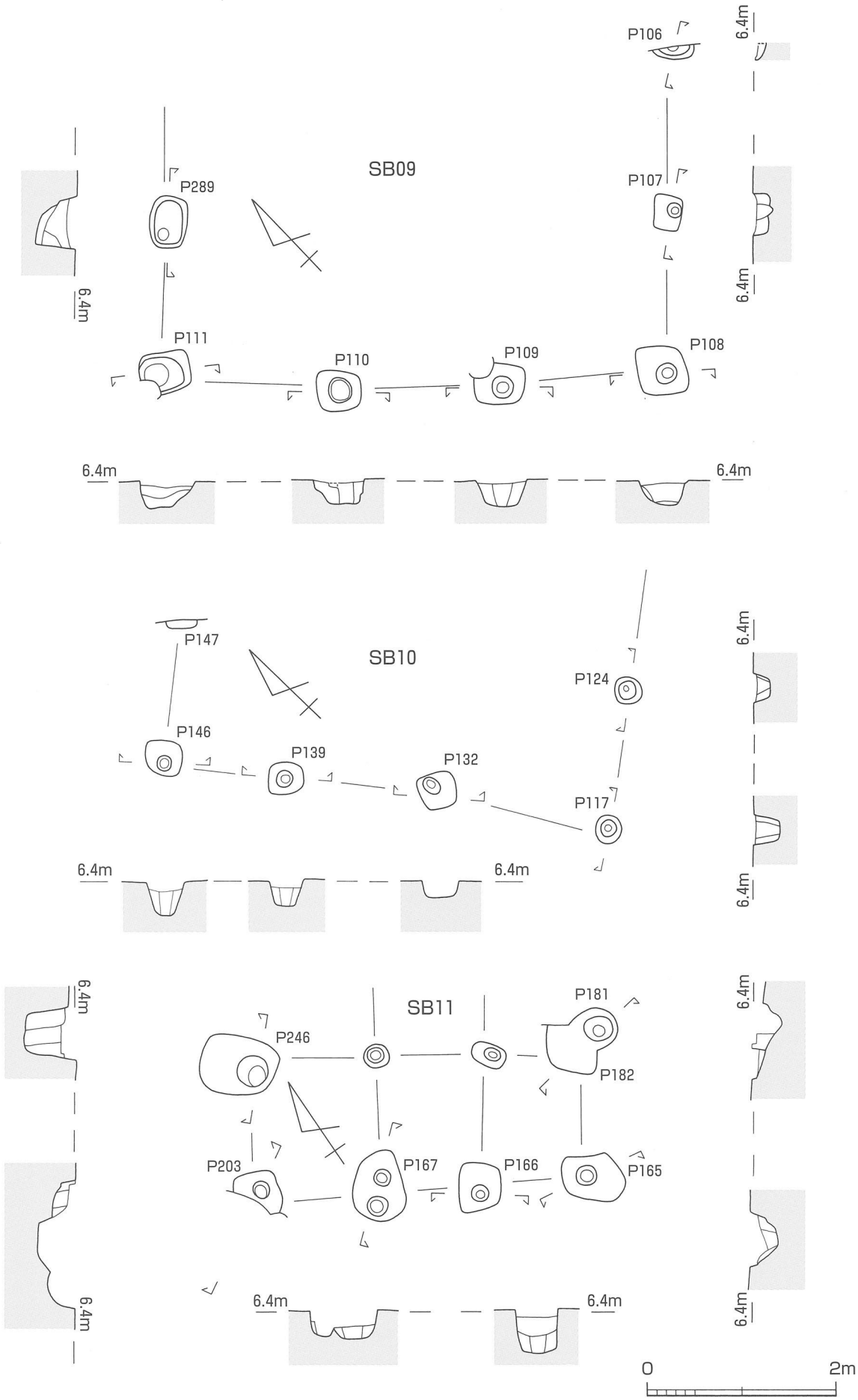




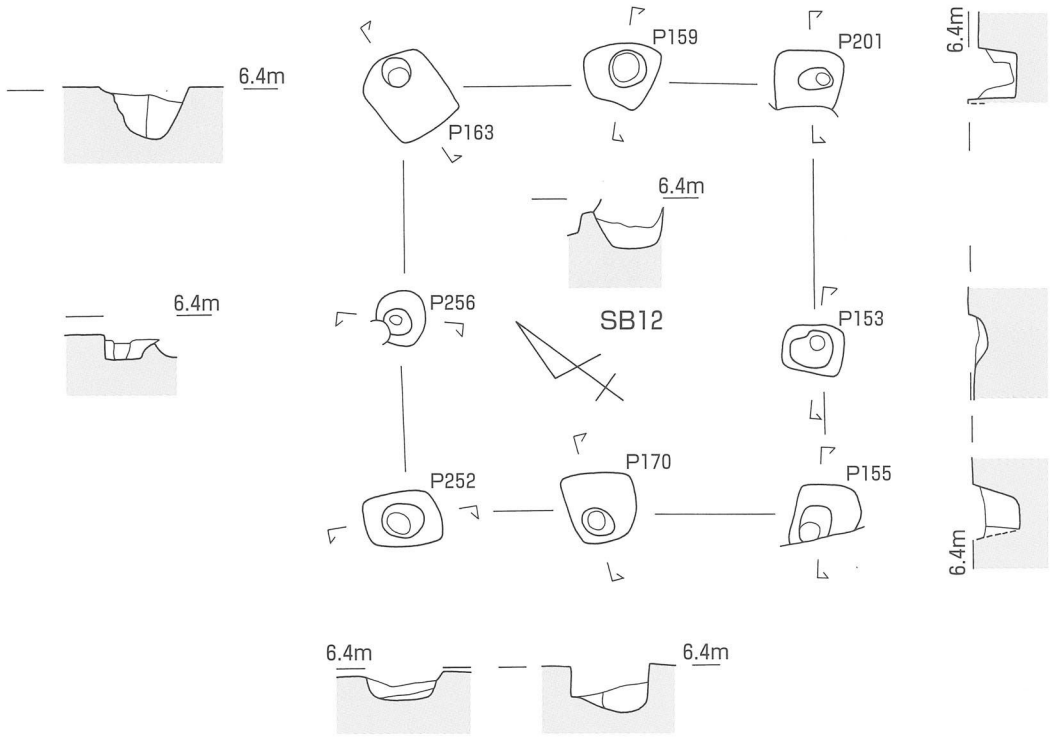
0 2m

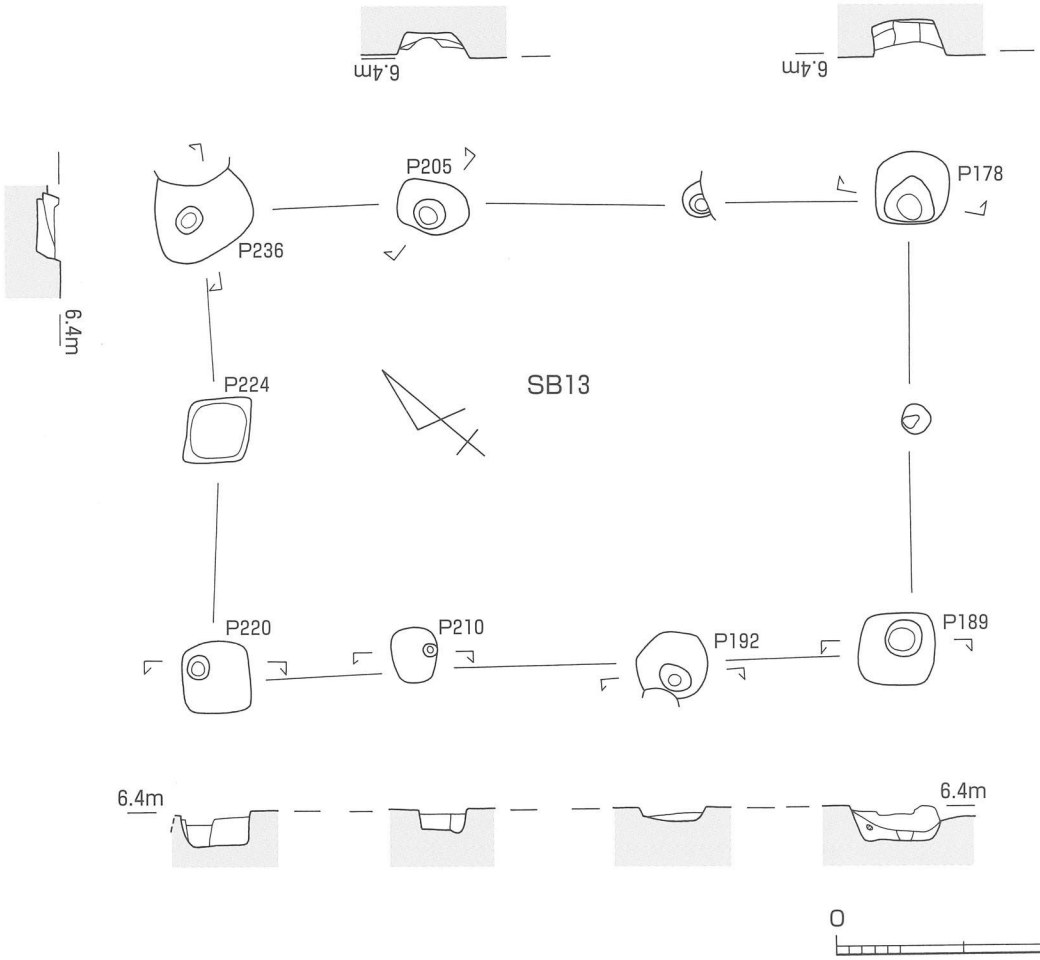
図版10

掘立柱建物 SB09 ～ 11

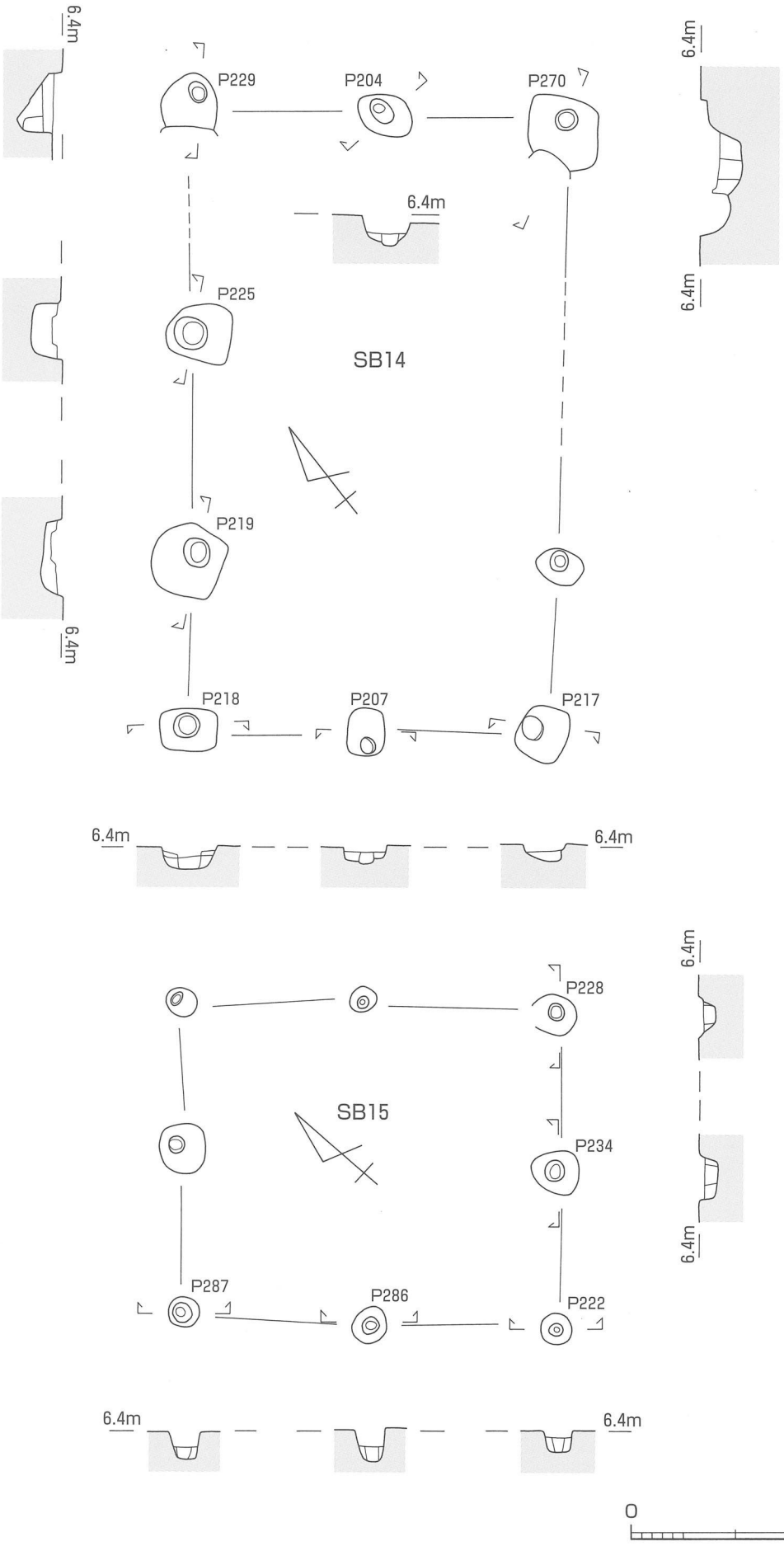


掘立柱建物 SB12 ～ 13

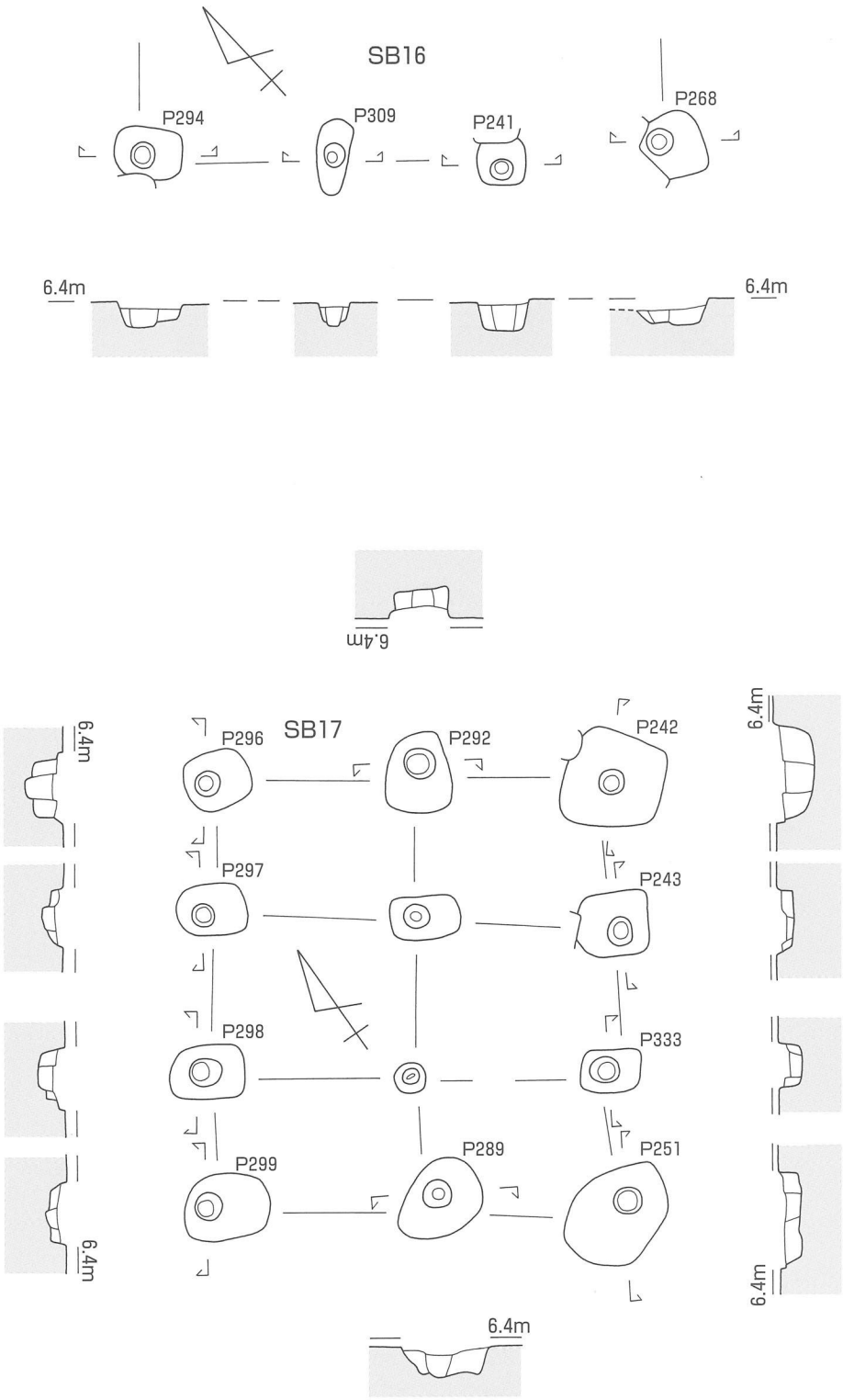




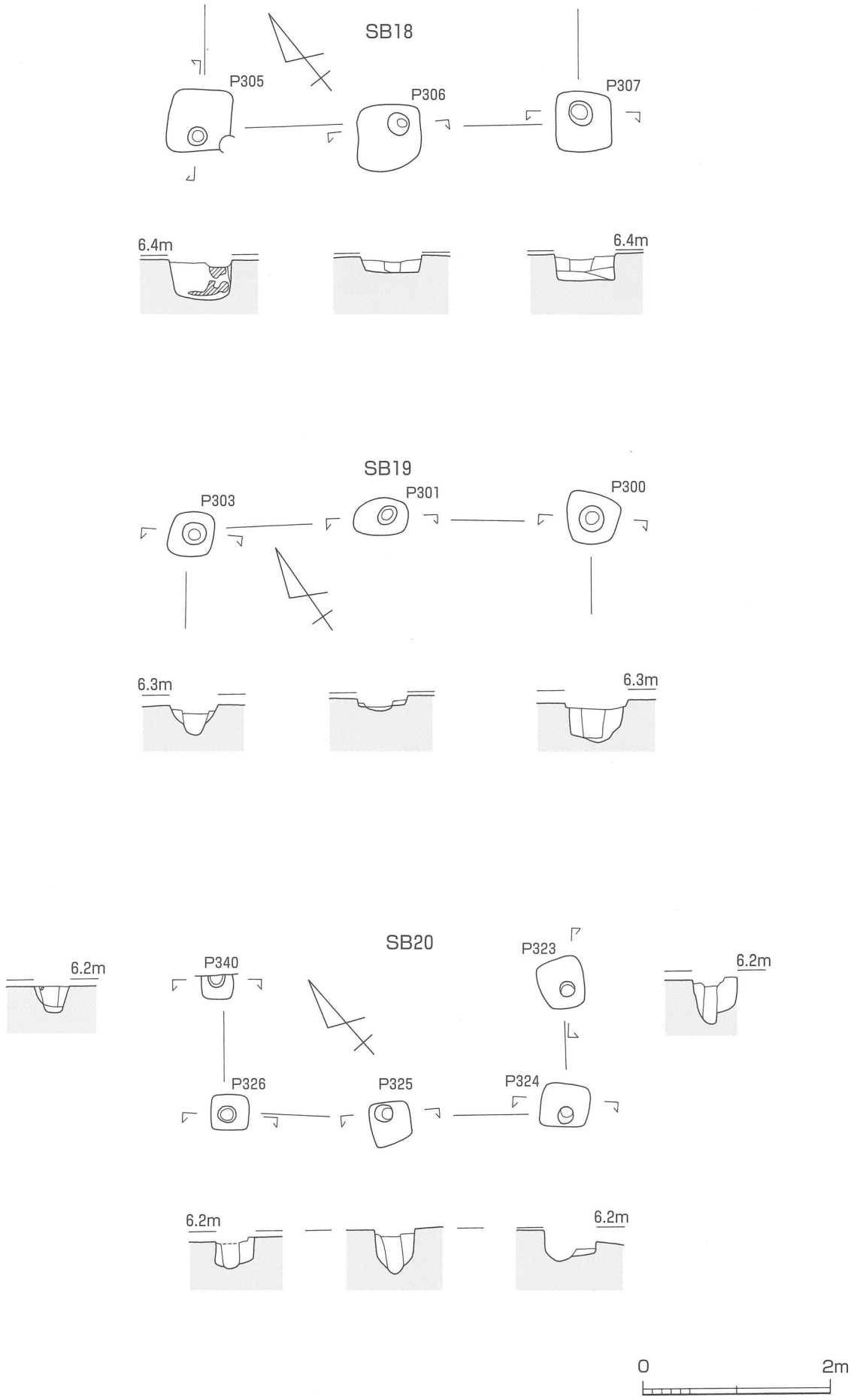
掘立柱建物 SB14 ～ 15



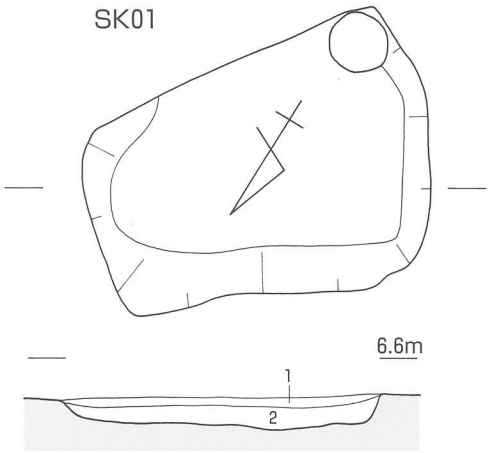
掘立柱建物 SB16 ～ 17



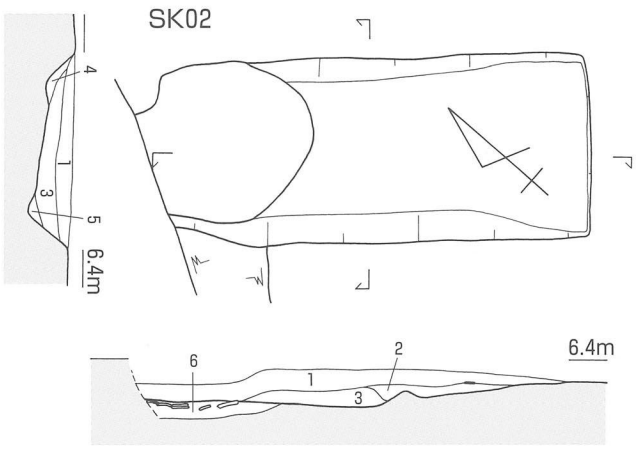
掘立柱建物 SB18 ～ 20



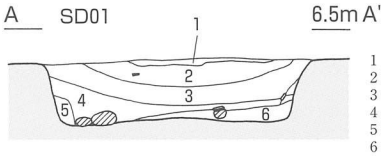
古代の土坑・溝・落ち込み



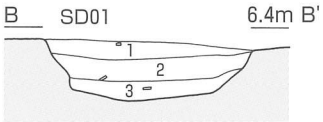
1 2.5Y5/1黄灰　極細砂～細砂、細礫・土器片含む Mn
2 10YR5/1褐灰　極細砂～細砂、細礫・土器片含む Mn



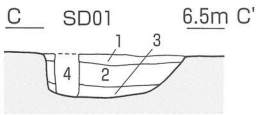
1 2.5Y4/1黄灰　極細砂～細砂、極粗砂・土器片含む Mn
2 2.5Y6/2灰黄　極細砂～細砂
3 10YR4/1褐灰　極細砂～細砂、極粗砂・中礫・土器片・炭含む
4 10YR6/3にぶい黄橙　細砂
5 2.5Y5/1黄灰　細砂
6 2.5Y3/1黒褐　極細砂～細砂、弥生土器・炭含む(SK02下層土坑)



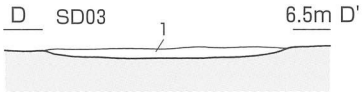
1 2.5Y5/2暗灰黄　極細砂～細砂、中礫・土器片含む
2 7.5Y3/1黒褐　シルト質極細砂～細砂(灰色砂質土ブロック状に混じる)土器含む Mn
3 7.5Y4/1褐灰　シルト質極細砂～細砂(灰色砂質土ブロック状に混じる)土器含む Mn
4 10Y5/2灰黄褐　極細砂～細砂、円礫・土器片・炭含む
5 10Y5/2灰黄褐　極細砂～細砂、円礫・土器片・炭含む(地山ブロック含む)
6 2.5Y3/1黒褐　シルト質極細砂～細砂(炭層)礫・土器片含む



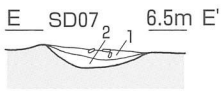
1 10YR2/2黒褐　細砂(黒褐色土が筋状に混じる)土器片含む
2 10YR3/3暗褐　細砂、土器片含む
3 10YR2/3黒褐　シルト質極細砂、土器片含む



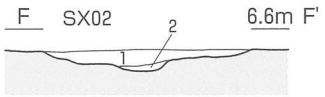
1 2.5Y5/1黄灰　極細砂～細砂(地山ブロック混じる)土器片含む Mn
2 10YR4/2灰黄褐　シルト質極細砂～細砂(地山ブロック混じる)細礫・土器・炭含む
3 2.5Y5/1黒褐　シルト質極細砂～細砂(粗砂混じる)
4 10YR4/2灰黄褐　極細砂～細砂、土器片含む(Pit) Mn



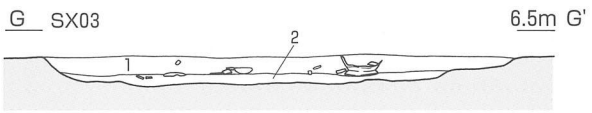
1 2.5Y6/2灰黄 極細砂～細砂、土器片含む Mn



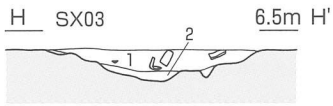
1 2.5Y6/2灰黄　極細砂～細砂、細礫・土器片・炭含む
2 2.5Y5/2暗灰黄　シルト質極細砂～細砂 Mn



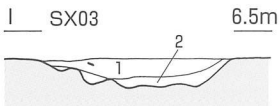
1 10YR3/1黒褐　細砂、土器片含む Fe_2O_3
2 10YR4/1褐灰　極細砂 Fe_2O_3



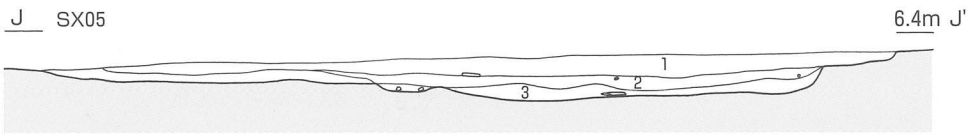
1 10YR2/1黒　極細砂(黒褐色砂質土混じる)土器片・炭含む
2 10YR2/1黒　極細砂(黒褐色砂質土少量混じる)土器片・炭含む



1 10YR2/3黒褐　細砂(黒褐色砂質土混じる)土器片含む
2 10YR3/1黒褐　極細砂



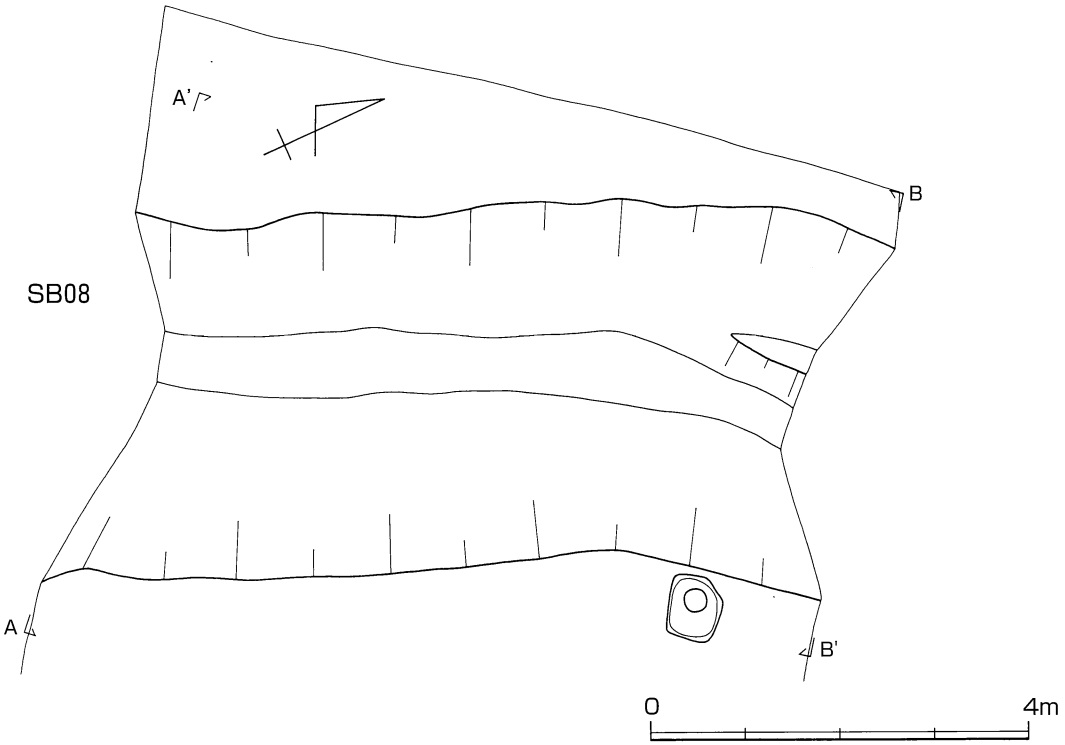
1 10YR2/3黒褐　極細砂(黒褐色砂質土筋状に混じる)土器片・炭含む
2 10YR3/1黒褐　極細砂、炭含む



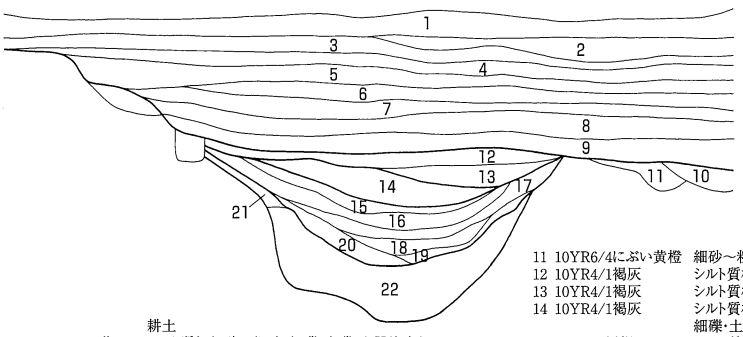
1 7.5YR4/2灰褐　極細砂、細礫・土器含む
2 7.5YR3/1黒褐　極細砂、土器含む
3 7.5YR4/2灰褐　極細砂(灰白色シルトブロック含む)

図版16

溝 SD08

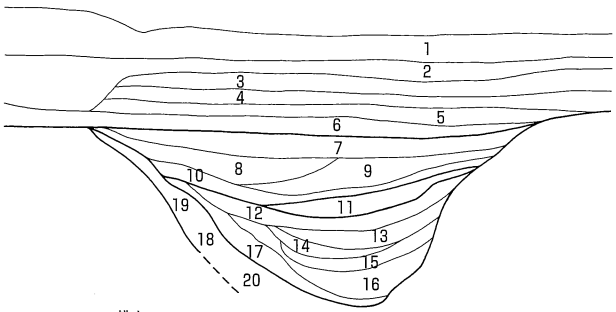


A　　5.0m A'



1		耕土
2	2.5Y6/3にぶい黄	シルト質極細砂～細砂、細礫・中礫・土器片含む
3	2.5Y5/2暗灰黄	シルト質極細砂～細砂、粗砂含む
4	10Y5/4にぶい黄褐	シルト質極細砂～細砂、細礫・土器片含む Mn
5	10YR5/2灰黄褐	シルト質極細砂～細砂、粗砂・細礫・土器片・炭含む
6	10YR6/2灰黄褐	シルト質極細砂～細砂、細礫・土器片含む
7	10YR6/2灰黄褐	シルト質極細砂～細砂、細礫・土器片含む
8	10YR5/2灰黄褐	シルト質極細砂～細砂、細礫・土器片含む Mn
9	10YR5/1褐灰	シルト質極細砂～細砂（灰色シルトブロック含む）細礫・土器片・炭含む
10	10YR5/4にぶい黄褐	シルト質極細砂～細砂、粗砂多く含む
11	10YR6/4にぶい黄橙	細砂～粗砂（灰色シルト層含む）
12	10YR4/1褐灰	シルト質極細砂、細礫～中礫・土器片・炭多く含む
13	10YR4/1褐灰	シルト質極細砂～細砂、細礫～中礫・土器片・炭多く含む
14	10YR4/1褐灰	シルト質極細砂（黄白色シルトブロックパッチ状）細礫・土器片含む
15	2.5Y3/1黒褐	シルト質極細砂、中砂・細礫・土器片・炭・有機物含む
16	10YR1.7/1黒	シルト質極細砂、細礫・土器片・炭・有機物含む
17	10YR2/1黒	極細砂質シルト、中砂含む、下面に細礫・中礫多い有機物含む
18	10YR1.7/1黒	シルト質極細砂～シルト、中砂含む、下面に細礫多い有機物含む
19	10YR1.7/1黒	シルト質極細砂～細砂、中砂～細礫・有機物含む
20	2.5Y3/1黒褐	シルト質極細砂～細砂、中砂～中礫・有機物含む
21	10YR6/2灰黄褐	シルト質極細砂～細砂、粗砂～細礫含む
22	5Y6/1灰	シルト質極細砂～細砂、粗砂～中礫含む、しまり良い

B　　5.0m B'

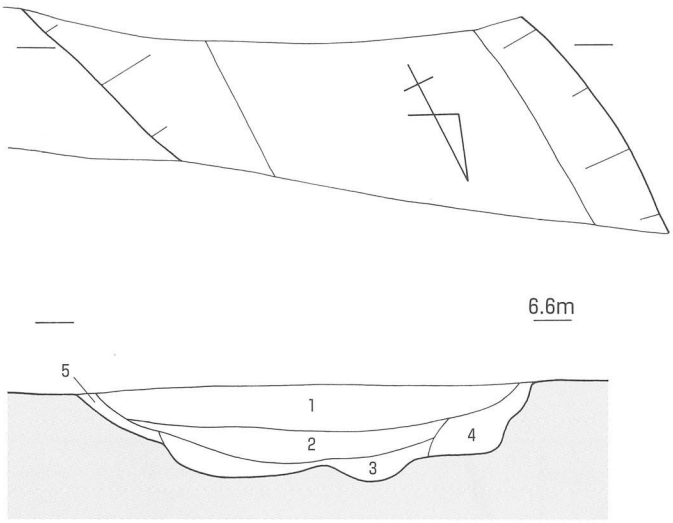


1		耕土
2	2.5Y7/2灰黄	シルト質極細砂～細砂、細礫～中礫含む Fe_2O_3（床土）
3	10YR6/2灰黄褐	シルト質極細砂～細砂、細礫・土器片含む Soil
4	10YR6/2灰黄褐	極細砂～細砂、細礫・土器片含む Mn
5	10YR5/2灰黄褐	シルト質極細砂～細砂、細礫～中礫・土器片含む Mn Soil
6	10YR5/2灰黄褐	シルト質極細砂～細砂、細礫～中礫・土器片含む Soil
7	10YR5/1褐灰	シルト質極細砂、極粗砂～大礫・土器片含む Soil（シルト分多い）
8	10YR4/2灰黄褐	シルト質極細砂、細礫～中礫・土器片含む Soil（シルト分多い）
9	10YR4/2灰黄褐	シルト質極細砂（黄白色シルトブロック含む）細礫～中礫・土器片・炭含む
10	10YR3/1黒褐	極細砂質シルト中礫・土器片・炭多く含む
11	10YR4/1褐灰	極細砂（黄白色シルトブロックパッチ状）土器片含む
12	10YR1.7/1黒	コースシルト、細礫～中礫・有機物含む
13	10YR3/1黒褐	シルト質極細砂、細礫～中礫・土器片・有機物含む
14	2.5Y2/1黒	極細砂質シルト、細礫・土器片含む
15	5Y2/1黒	極細砂質シルト、細礫・土器片多く含む
16	2.5Y3/1黒褐	極細砂質シルト、極粗砂～細礫・土器片多く含む
17	10YR3/1黒褐	シルト質極細砂、細礫含む
18	10YR3/1黒褐	シルト質極細砂、炭含む(木根?)
19	10YR7/2にぶい黄橙	シルト
20	7.5Y6/1灰	極細砂、細礫～中礫含む、しまり良い

弥生時代の土坑・溝・落ち込み

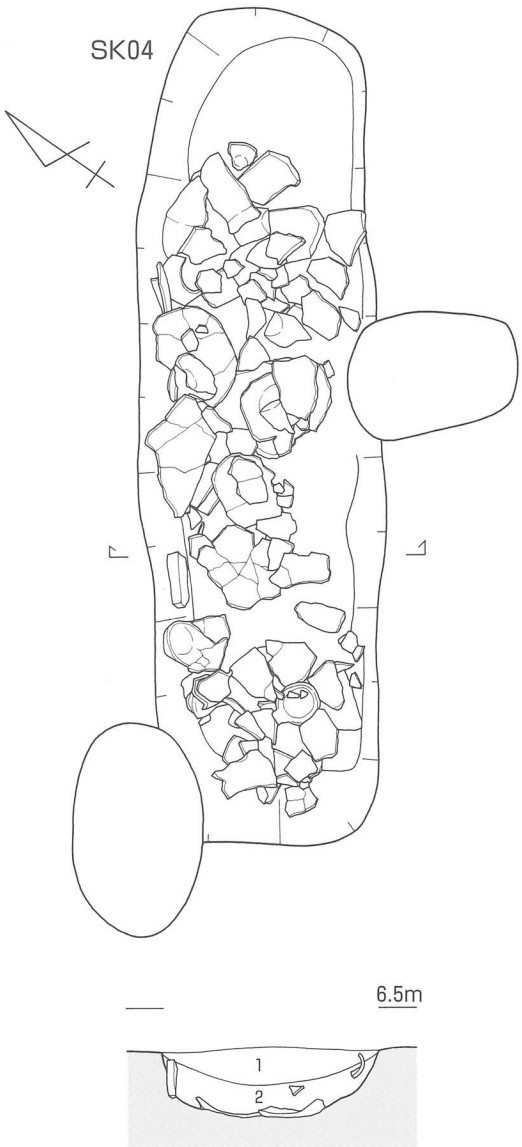
SK02下層

SK03



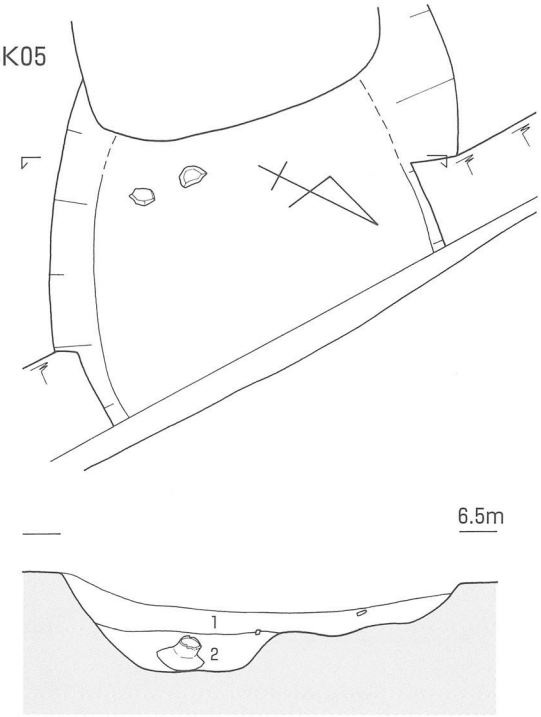
1 10YR4/1褐灰 細砂(灰白色粘質土ブロック状に混じる)
2 10YR4/1褐灰 極細砂(黒褐色粘質土混じる)炭含む
3 10YR4/1褐灰 極細砂(黒褐色砂質土混じる)
4 10YR4/1褐灰 極細砂
5 10YR3/1黒褐 細砂

SK04



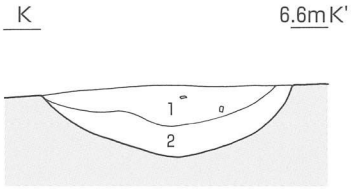
1 10YR4/1褐灰 極細砂、土器片含む(黒灰色砂質土混じる)
2 10YR4/1褐灰 極細砂、土器片含む

SK05



1 7.5YR4/1褐灰 極細砂～細砂、土器片含む
2 10YR4/1褐灰 極細砂～細砂、土器片含む

SD09

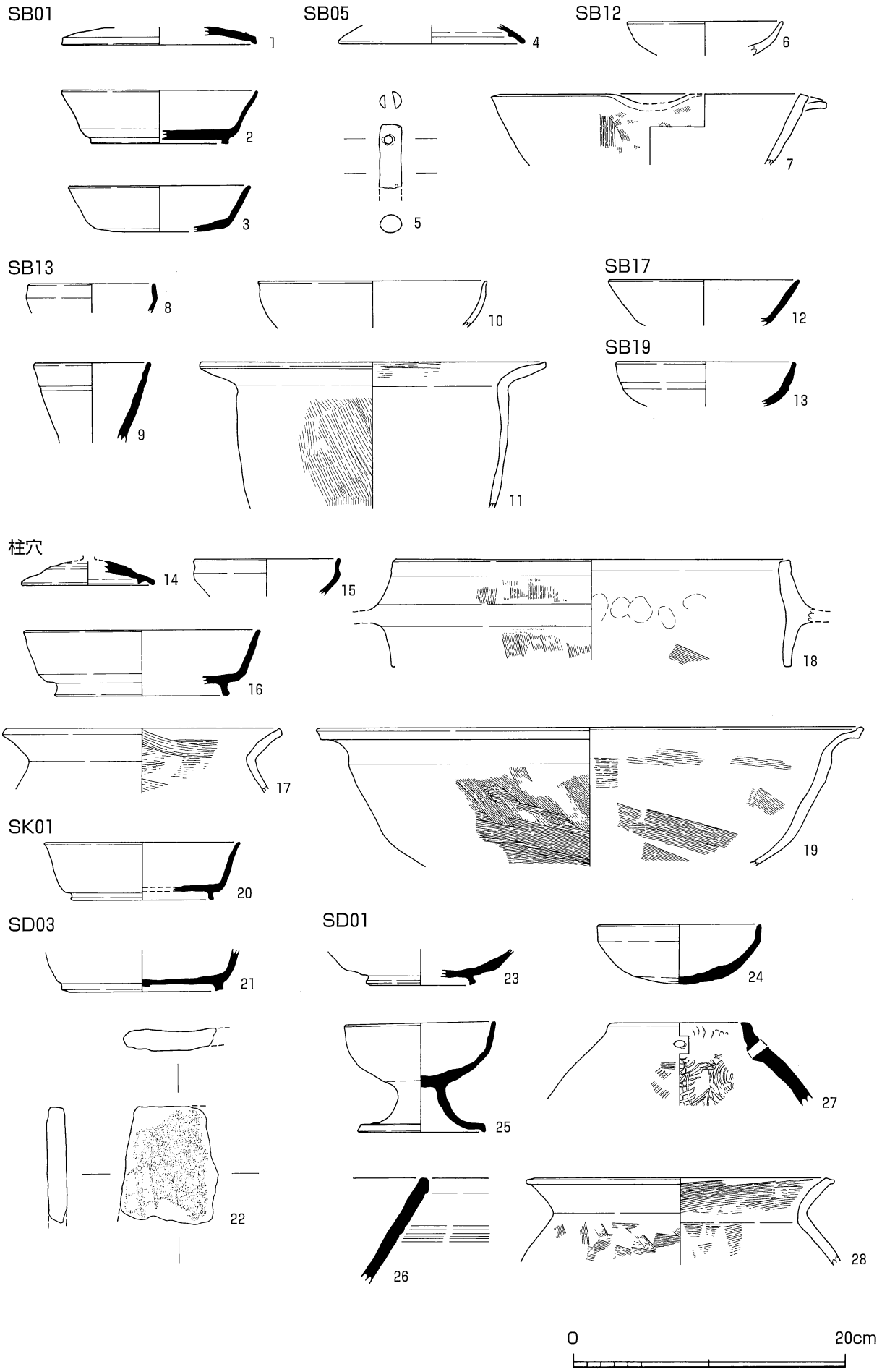


1 10YR3/2黒褐 細砂、土器片含む Fe_2O_3
2 10YR3/2黒褐 極細砂、土器片含む Fe_2O_3

図版18

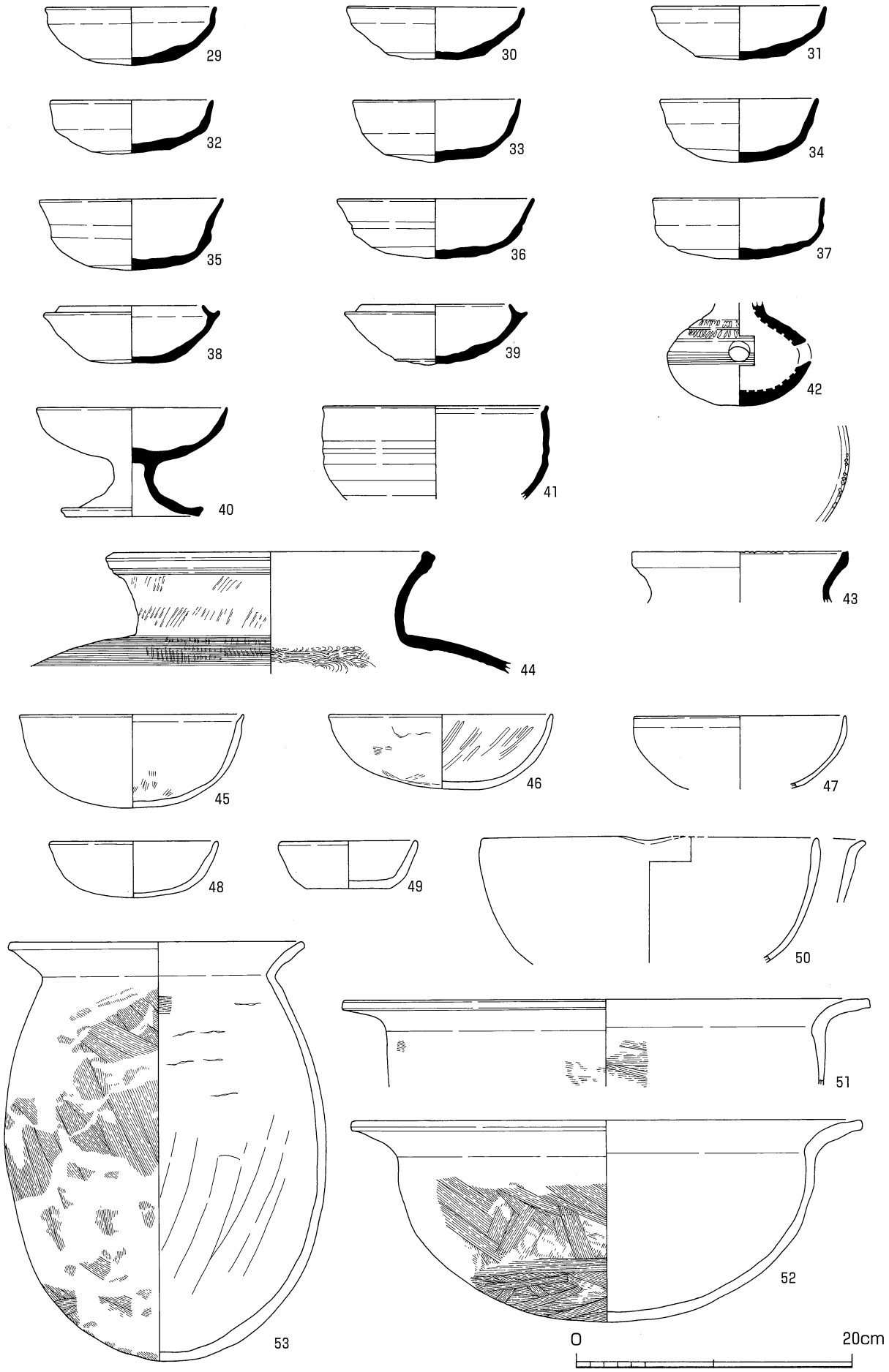
1-28

土器(1)


SB01
SB05
SB12
SB13
SB17
SB19
柱穴
SK01
SD03
SD01
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
20cm

土器(2)

SK03


29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
42
40
41
44
43
45
46
47
48
49
50
51
52
53
0
20cm

図版20

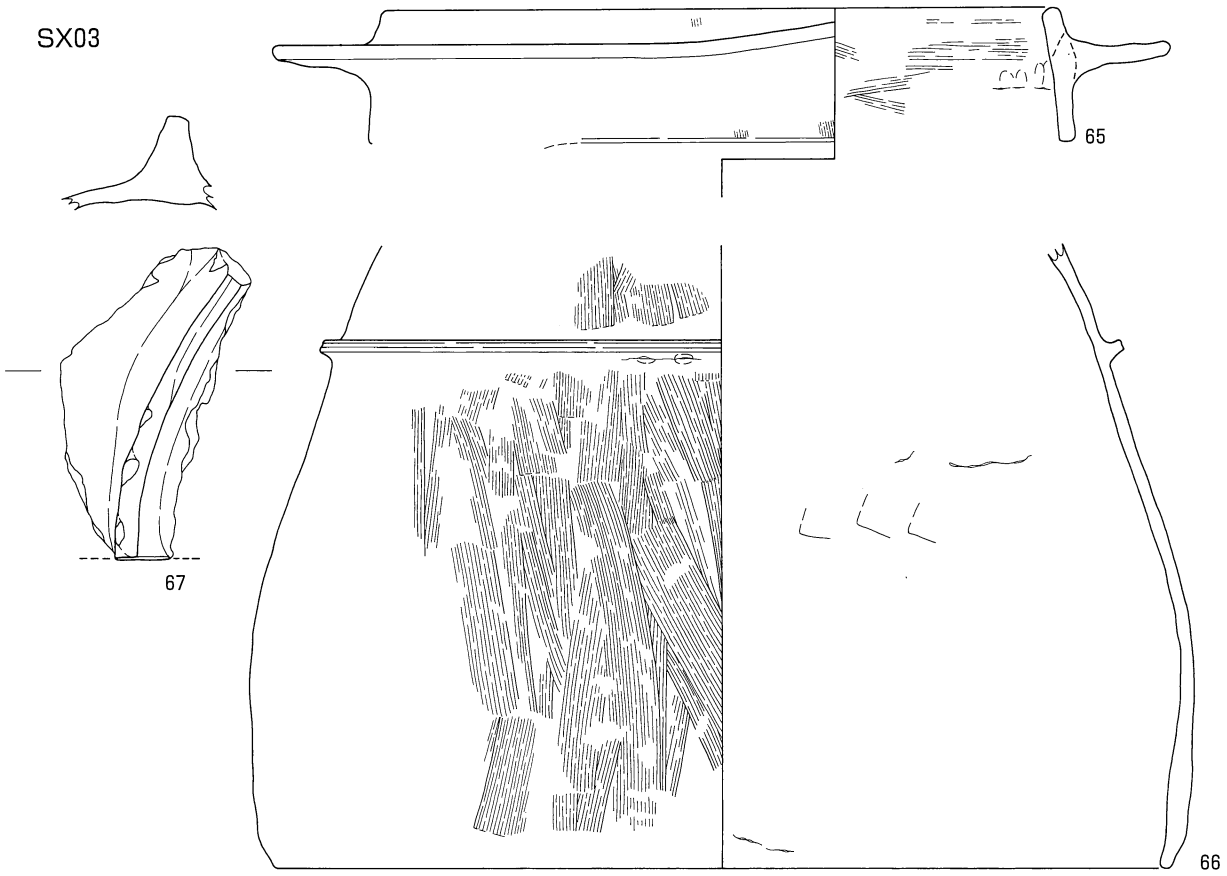
54-64

土器(3)

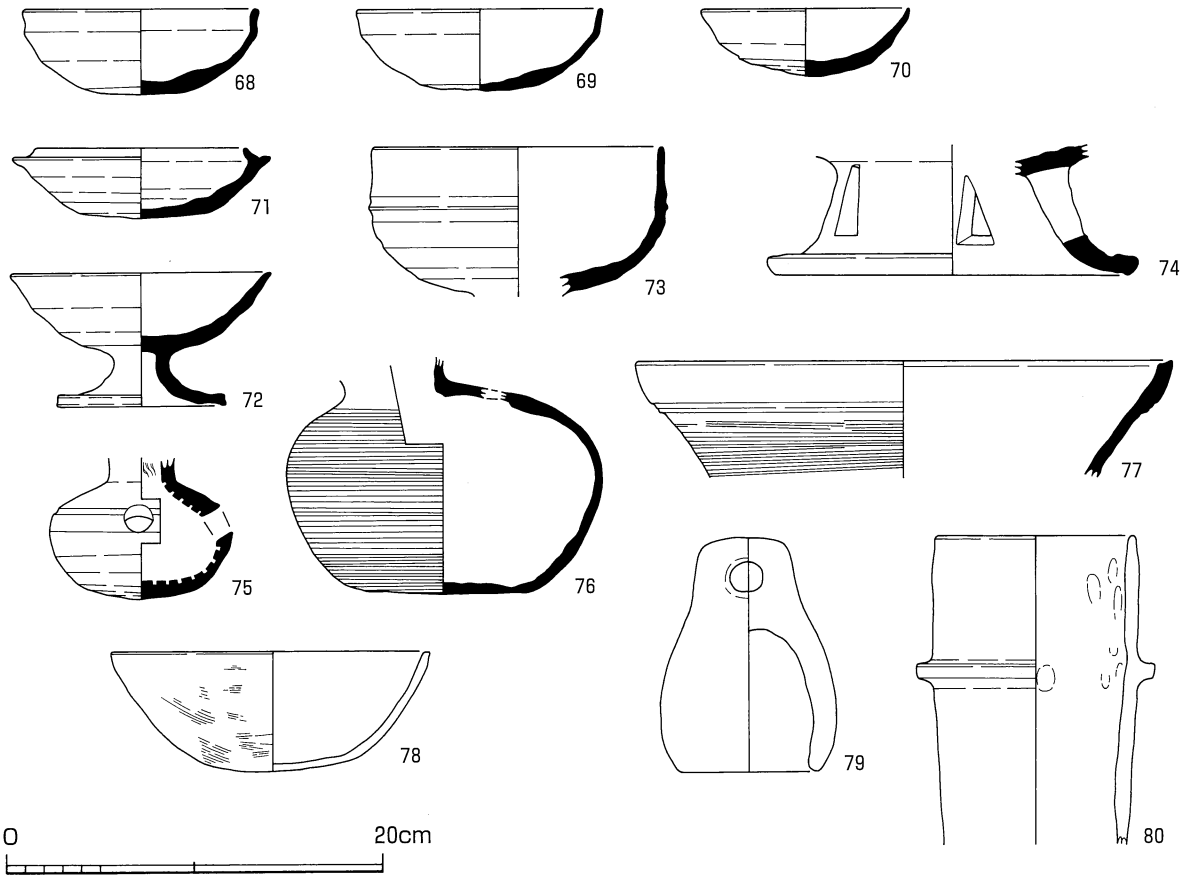
SX03

土器(4)

SX03



SX05

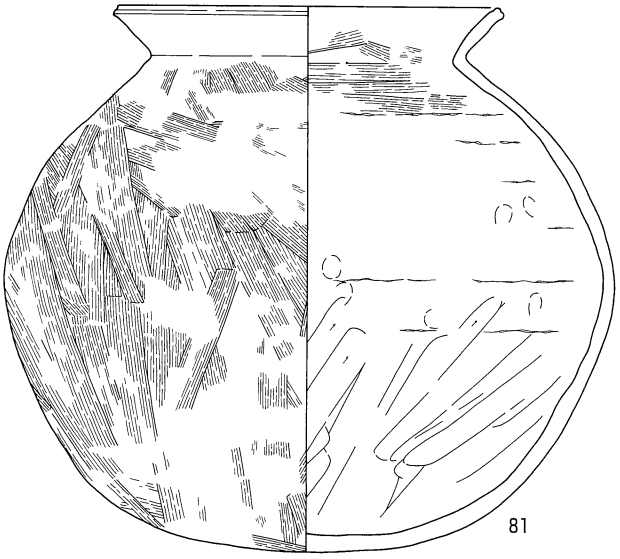


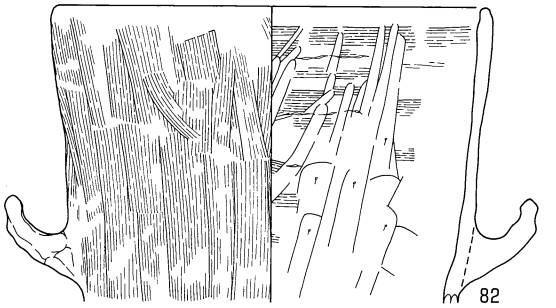
図版22

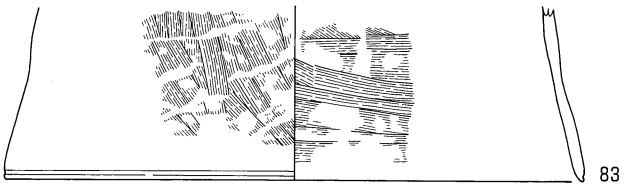
81-89

土器(5)

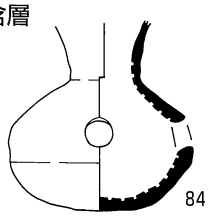
SX05

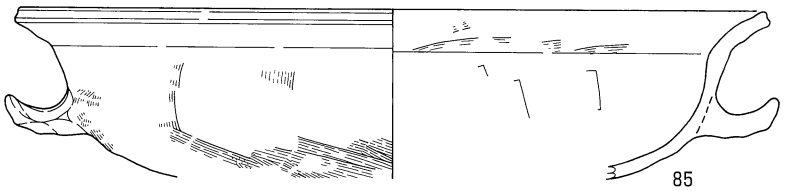


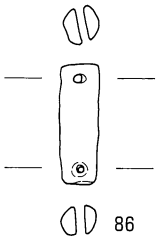


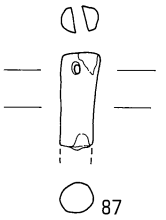


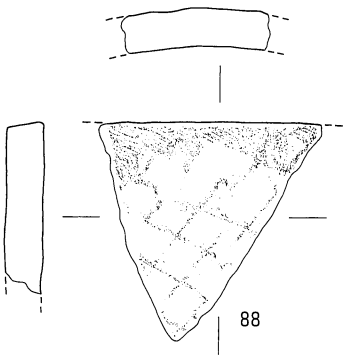
包含層

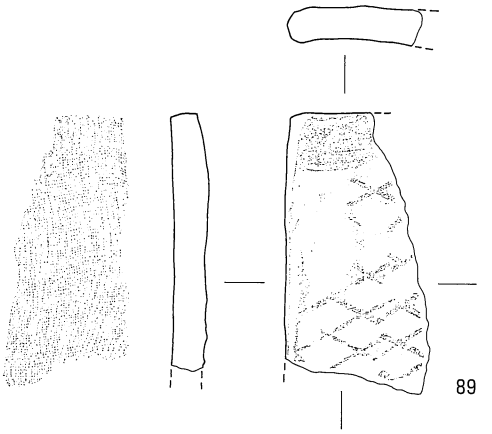










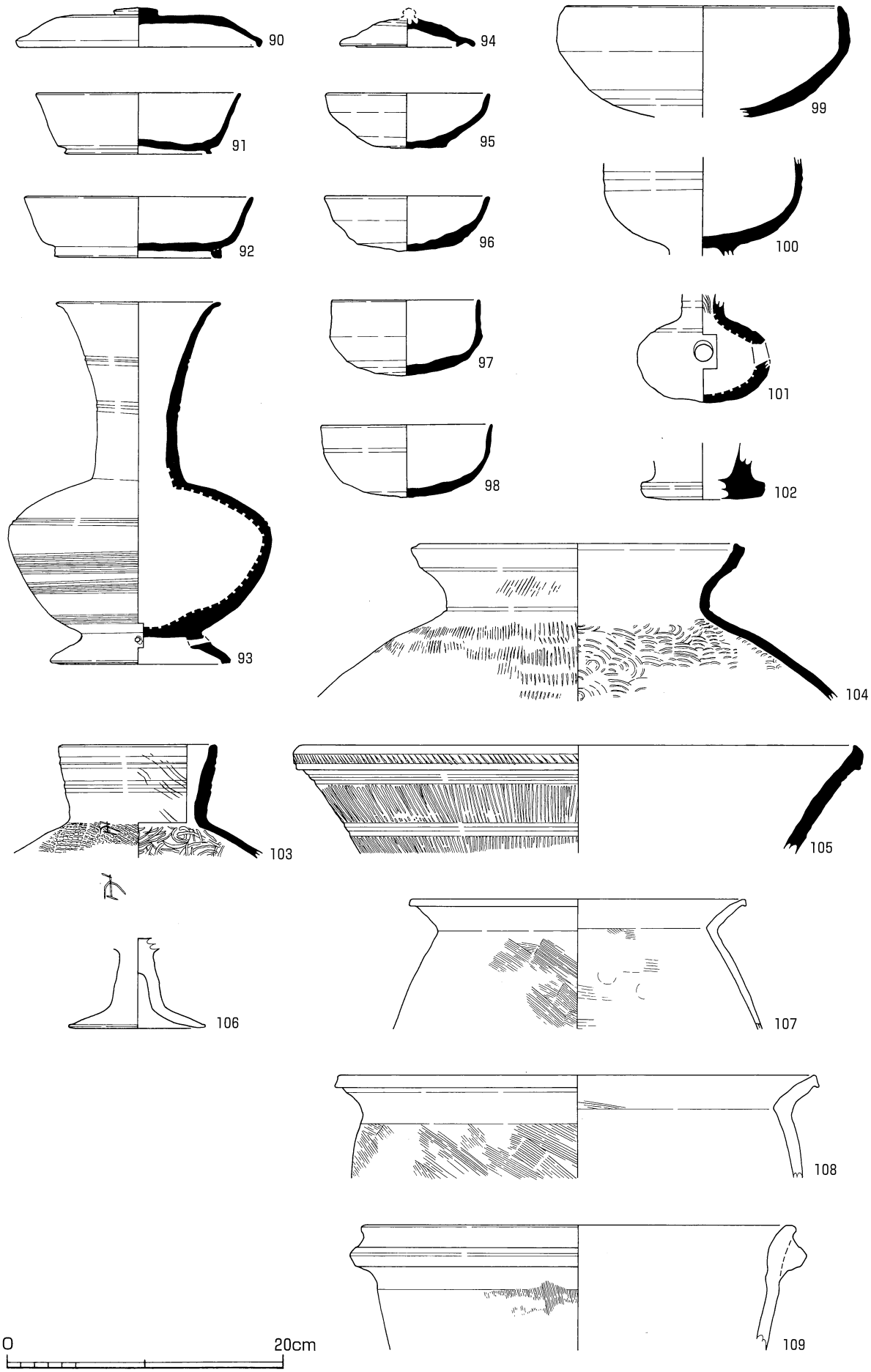


0 20cm

土器(6)

SD08上層

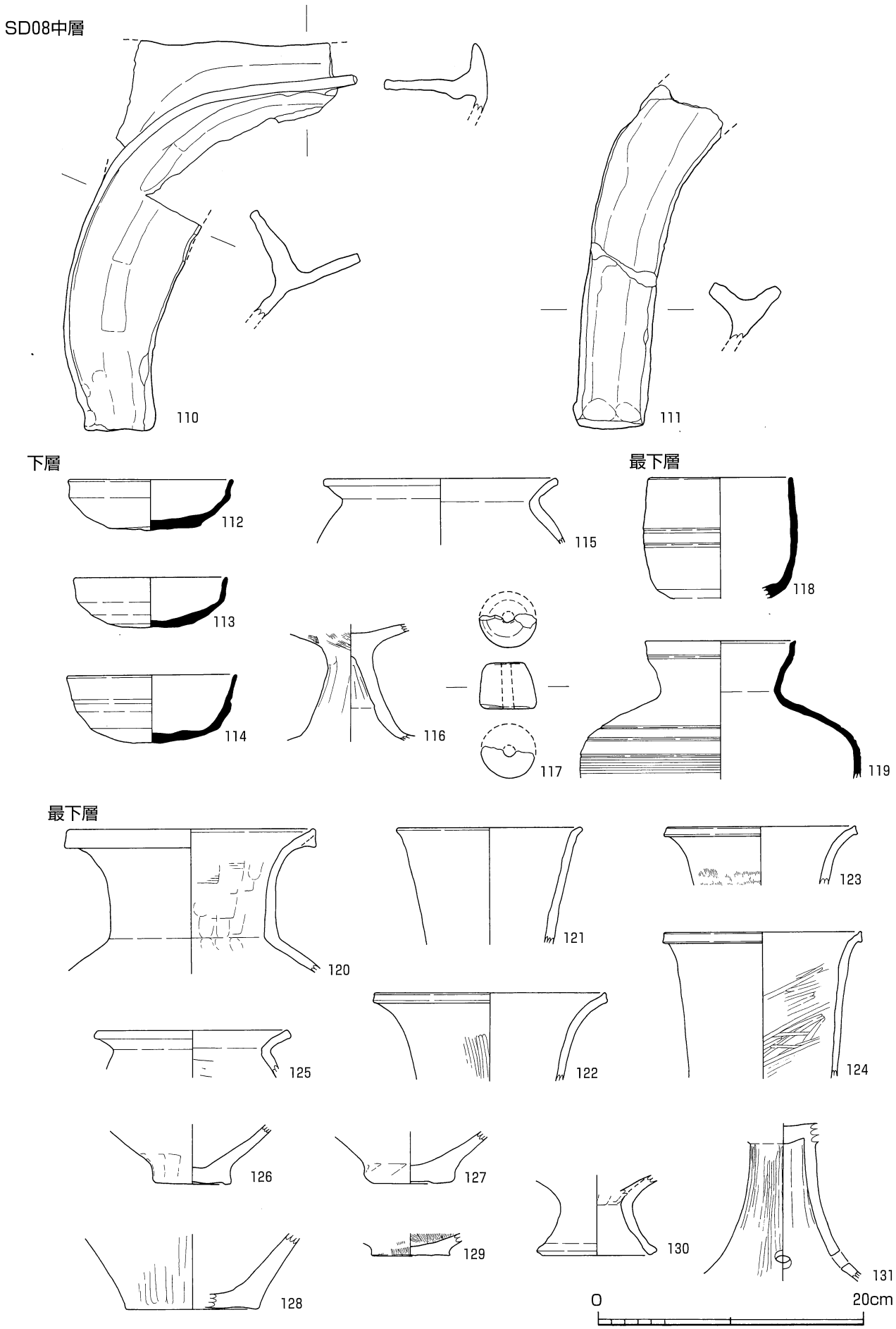
中層



図版24

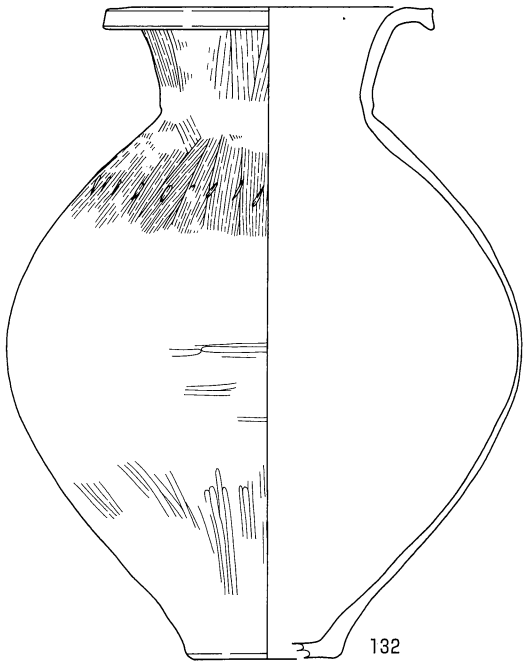
110-131

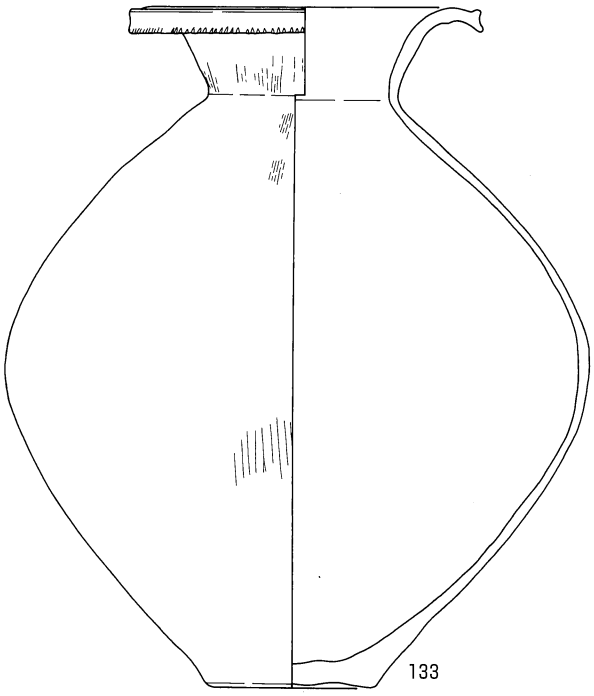
土器(7)

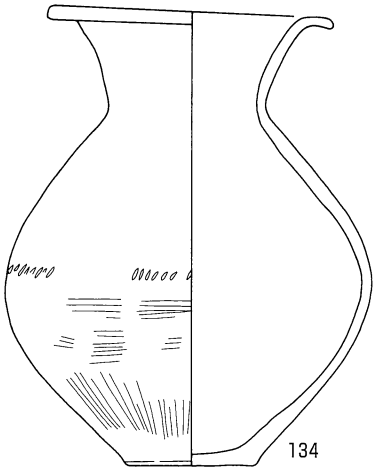


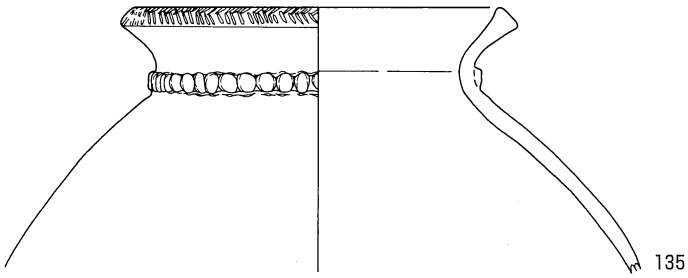
土器(8)

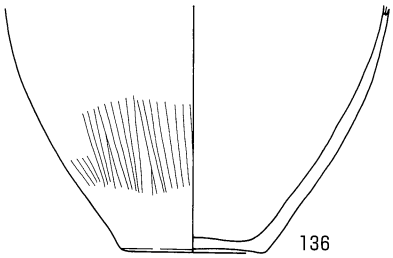
SK04

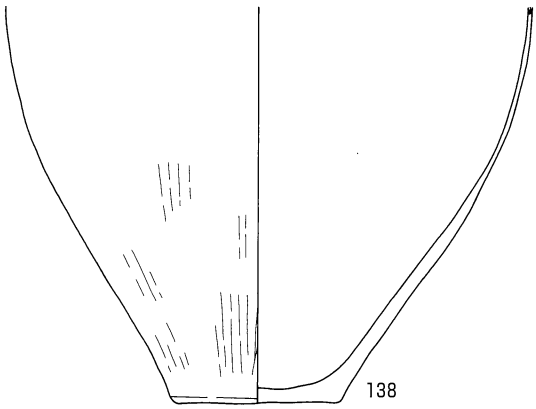


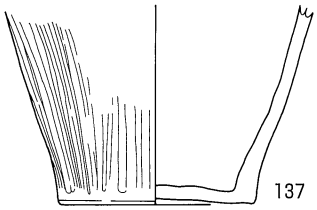


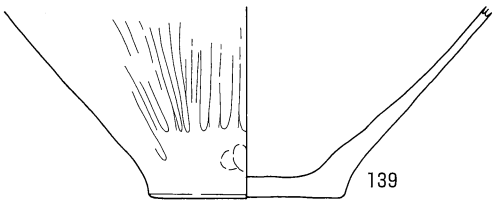












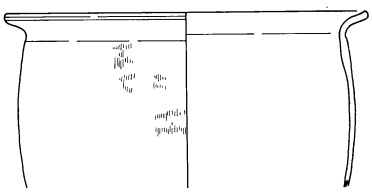
0 20cm

図版26

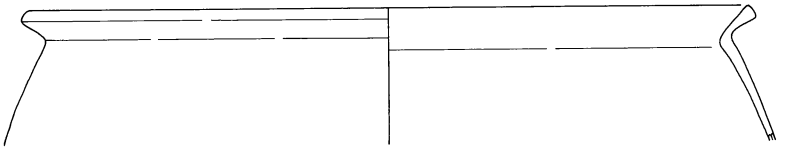
140-150

土器(9)

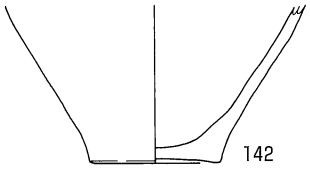
SK04



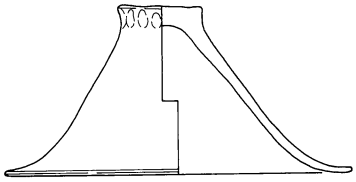
140



141

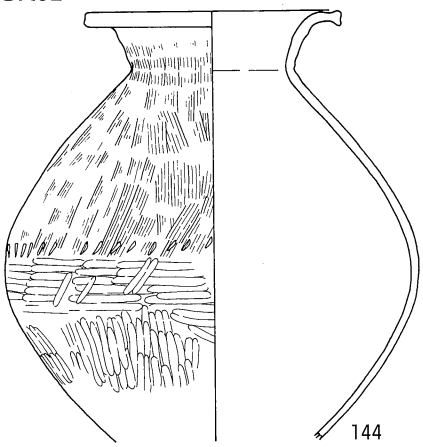


142

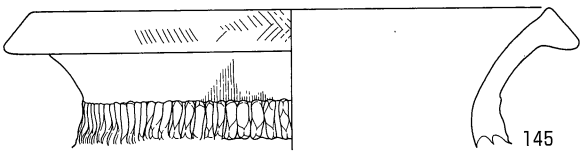


143

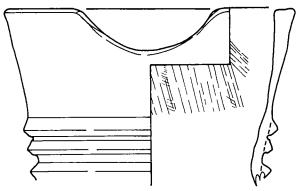
SK02



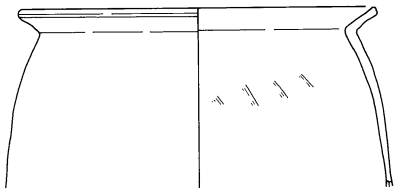
144



145

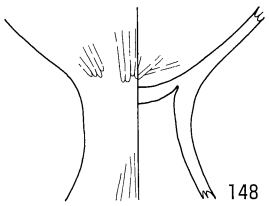


146



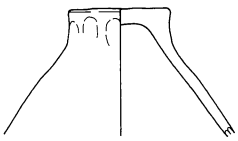
147

SK05

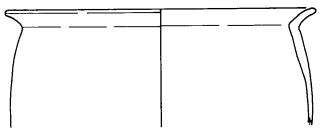


148

SD09



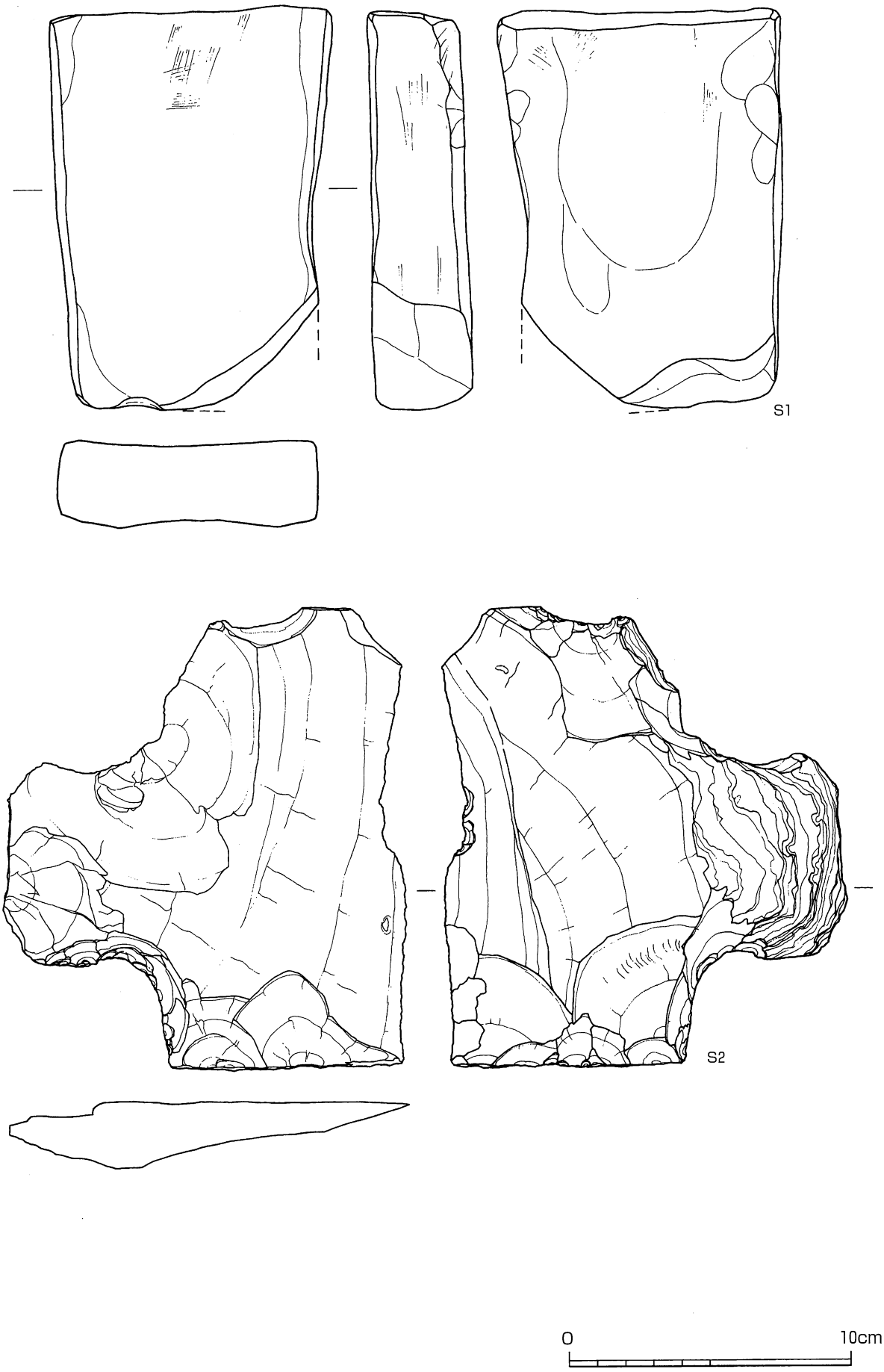
149



150

0 20cm

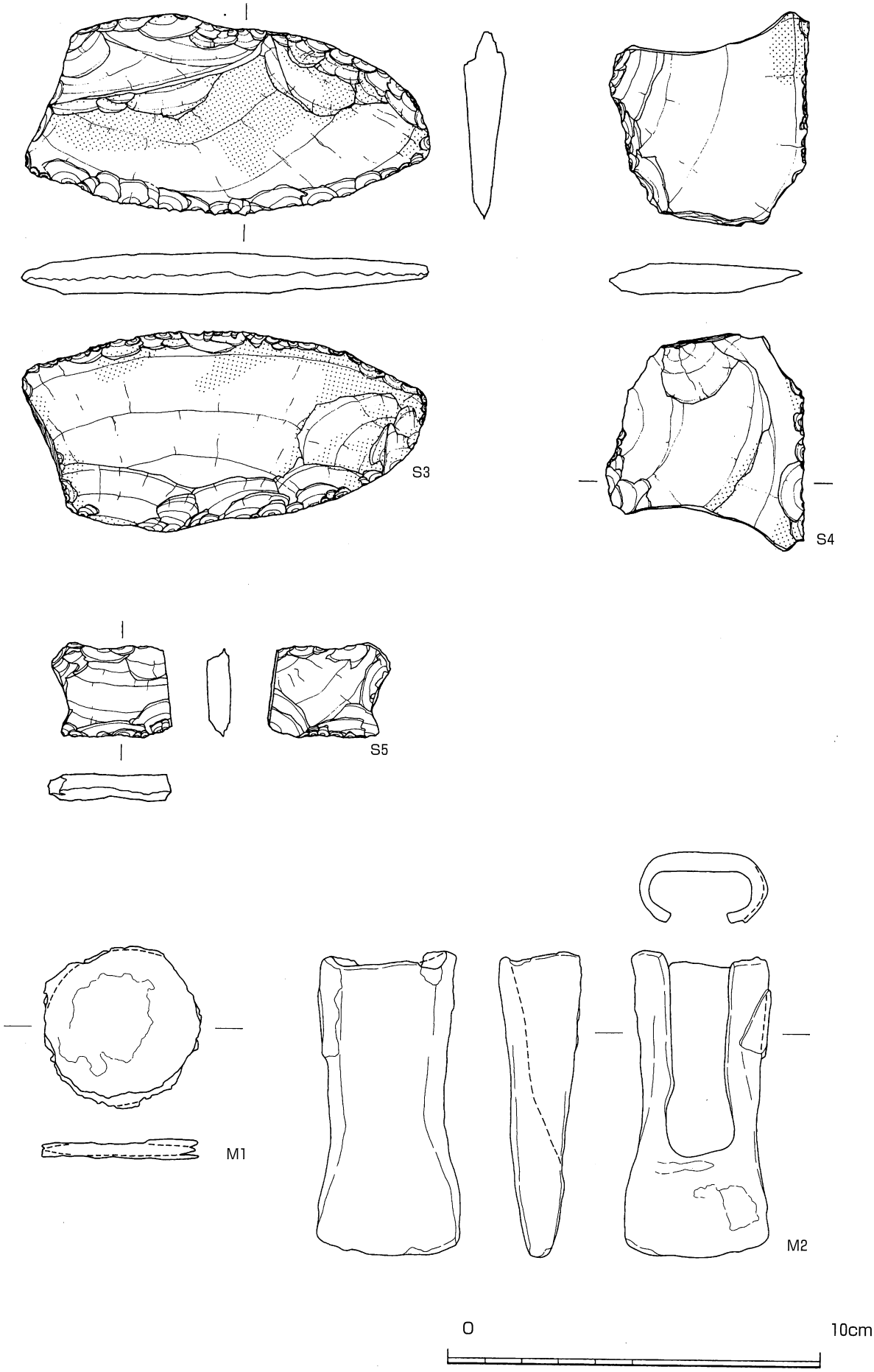
石器(1)



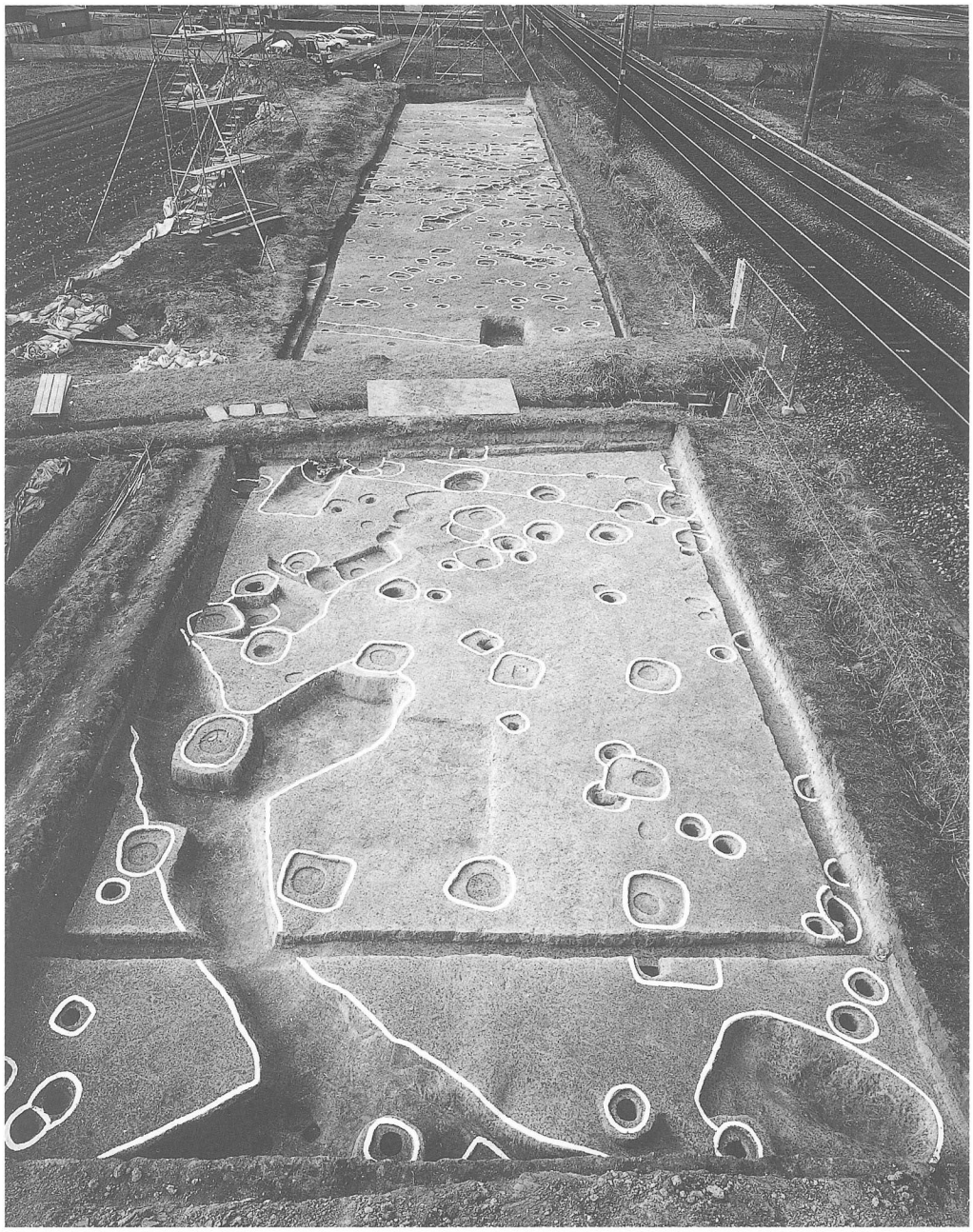
図版28

S3-S5、M1-M2

石器(2)・金属器



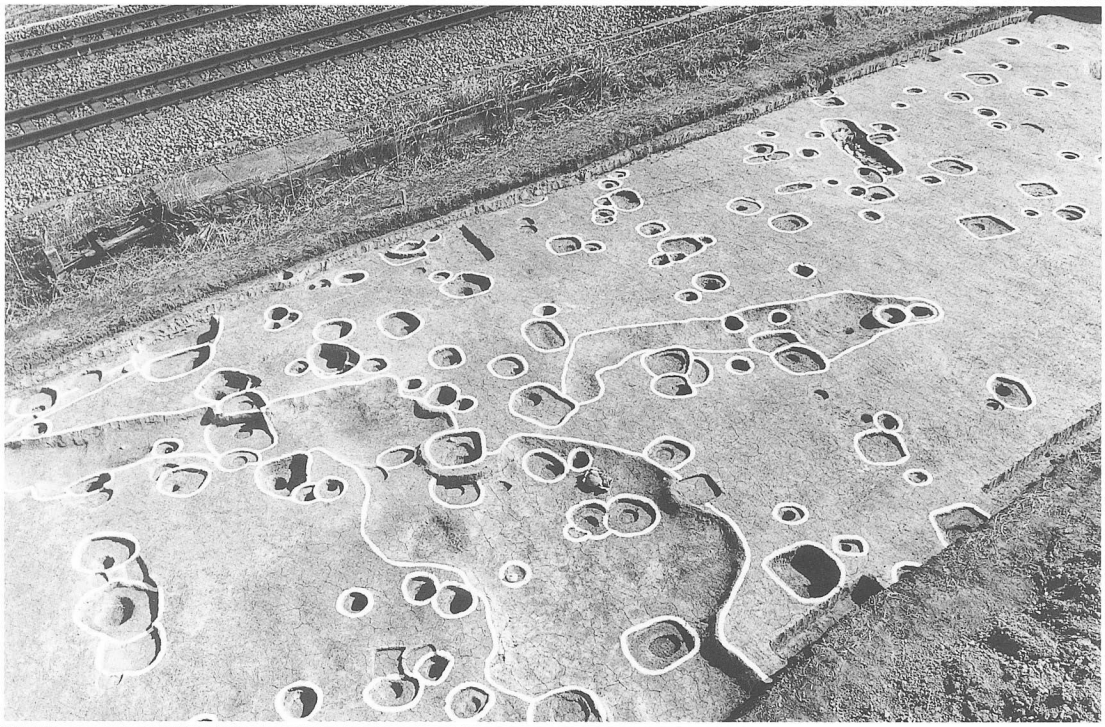
写真図版



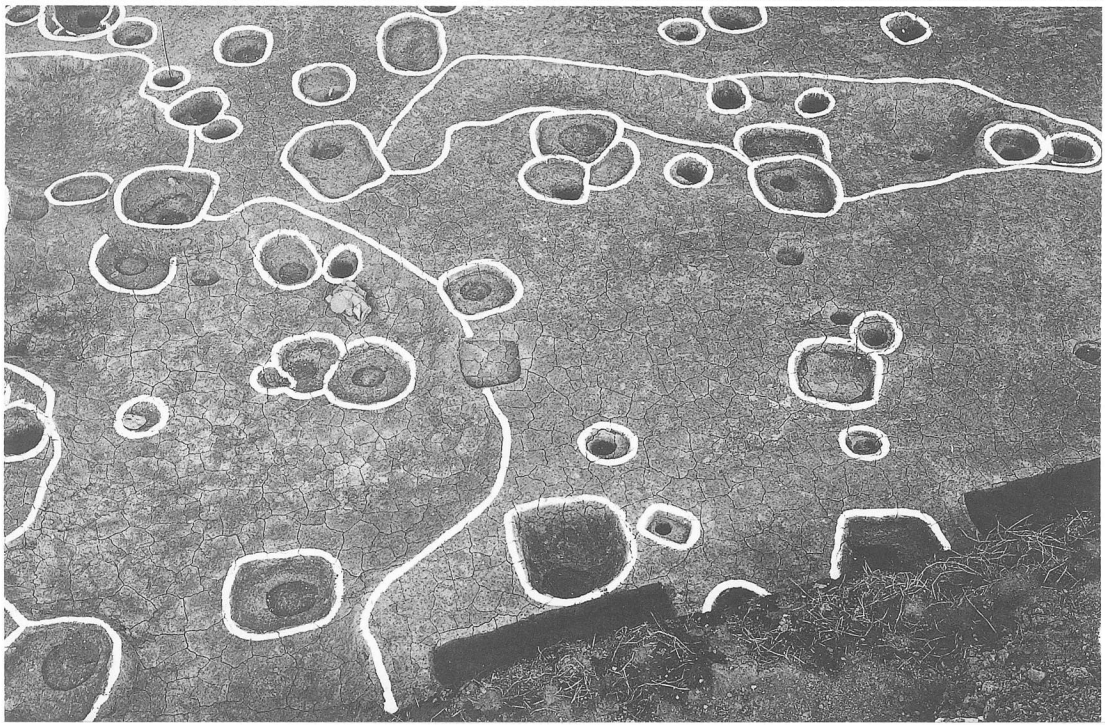
1　遺跡全景（南東から）

2　掘立柱建物
SB01 ～ 06（南東から）

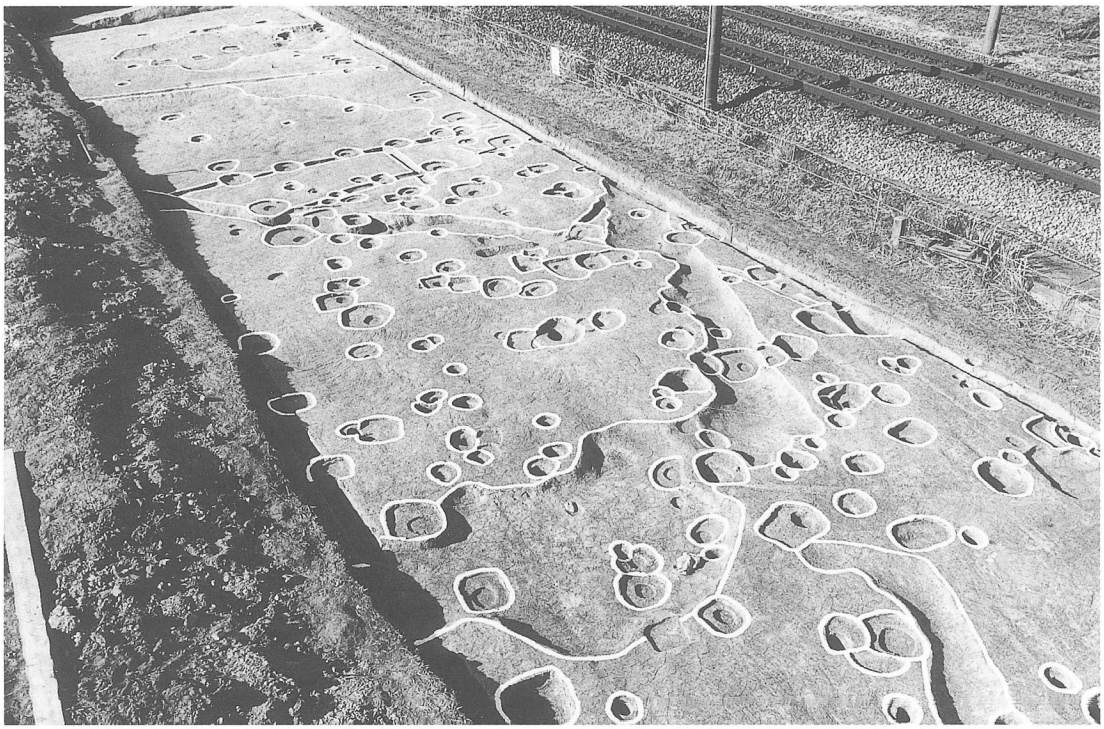
1　掘立柱建物
SB07・08（西から）



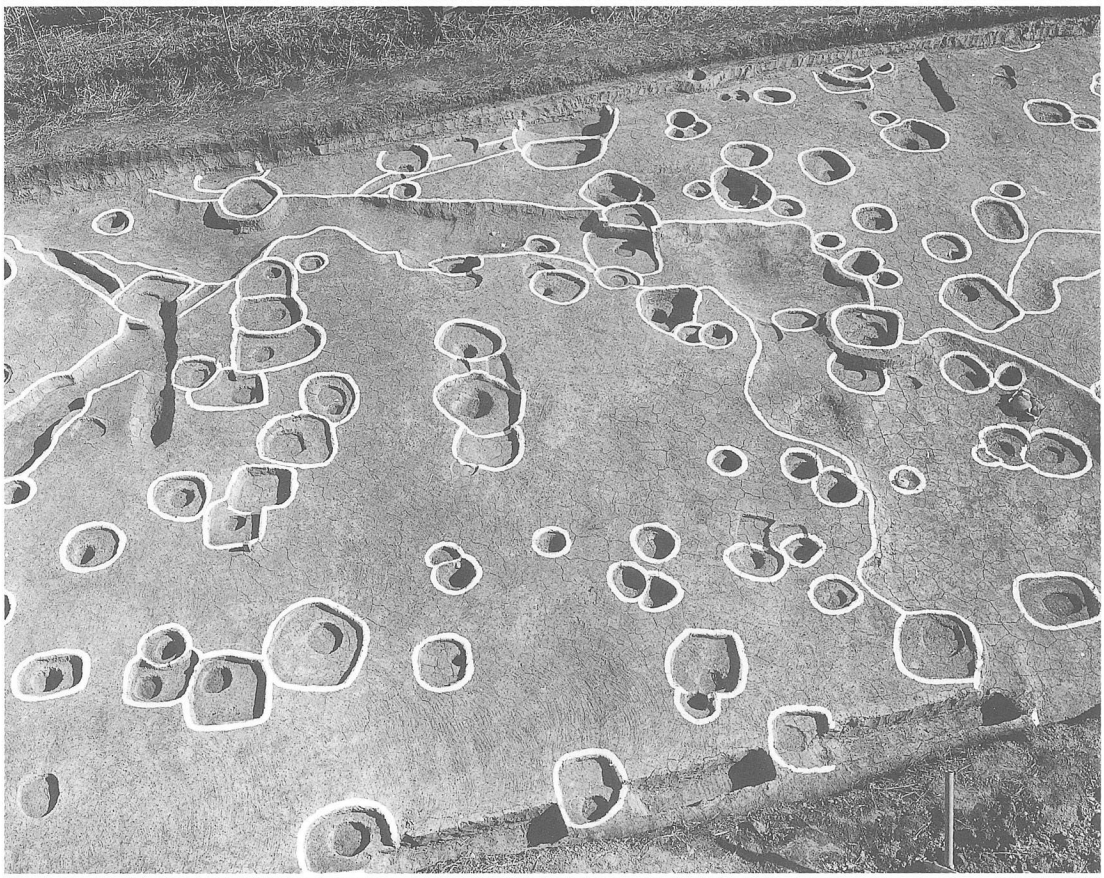
2　掘立柱建物
SB09～12、
落ち込み SX02・03（西から）



3　掘立柱建物
SB12（南西から）

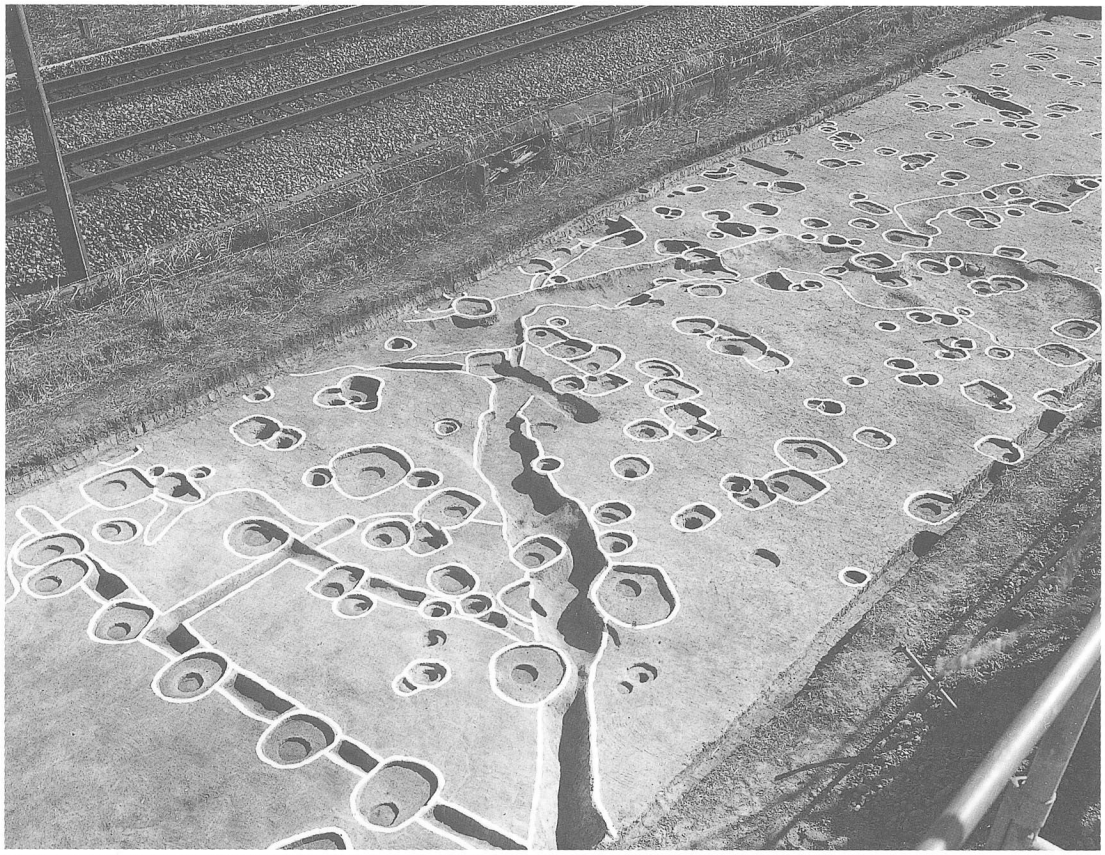


1　３・４区掘立柱建物群
（南東から）

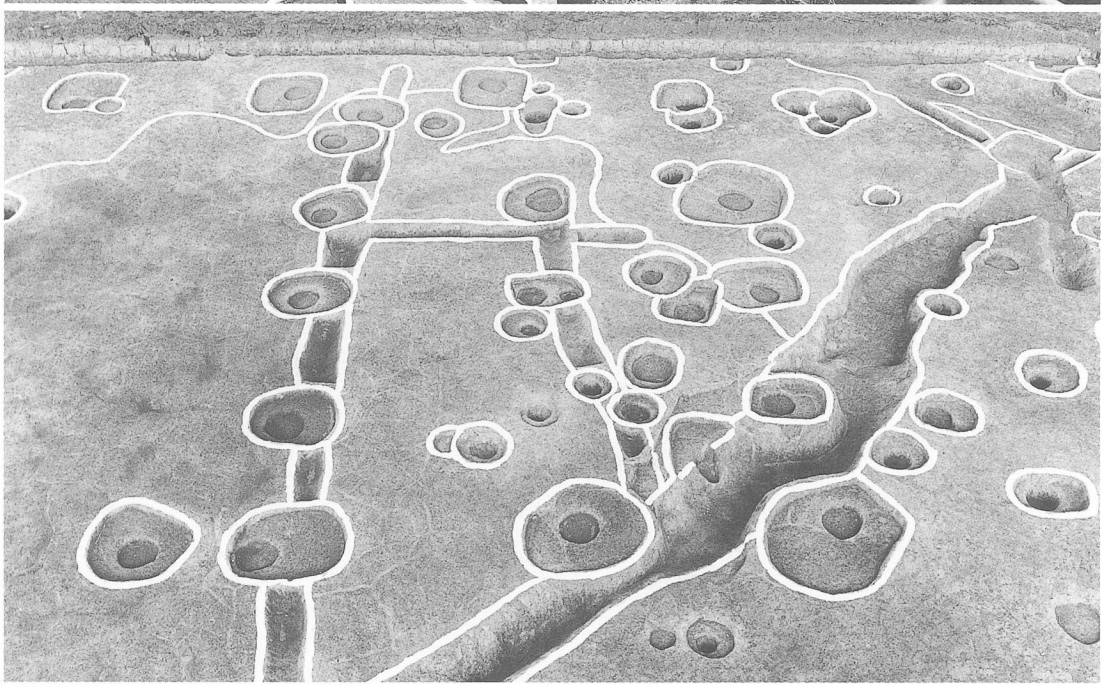


2　掘立柱建物
SB13・14（南西から）

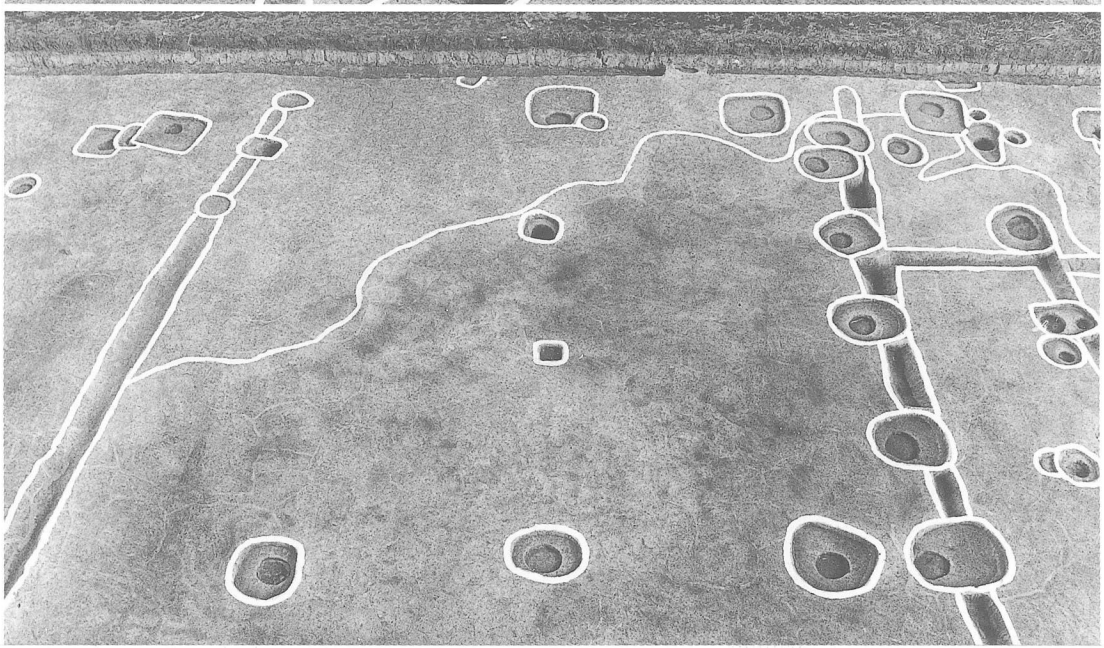
3　掘立柱建物
SB13～17（南西から）



1　３・４区掘立柱建物群
（西から）



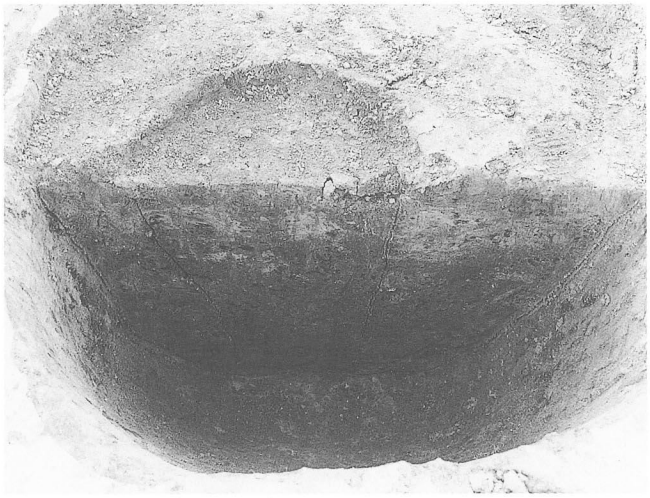
2　掘立柱建物
SB16 ～ 18（南西から）



3　掘立柱建物
SB18・19、
落ち込み SX04
（南西から）

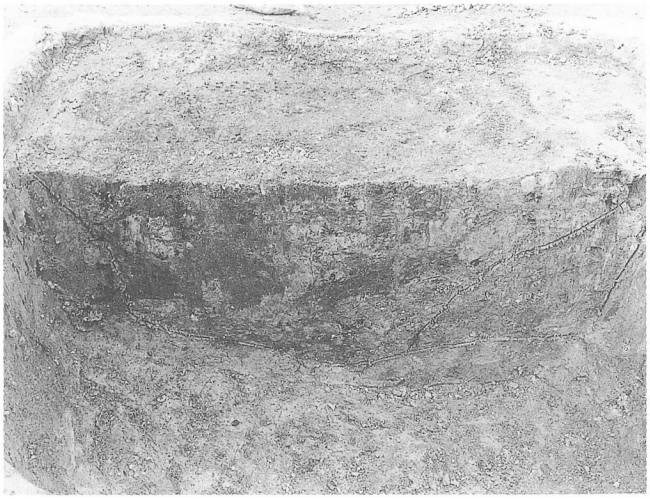
1　落ち込み
SX04（南から）

2　遺跡全景（北西から）



1　SB01　P1（南東から）

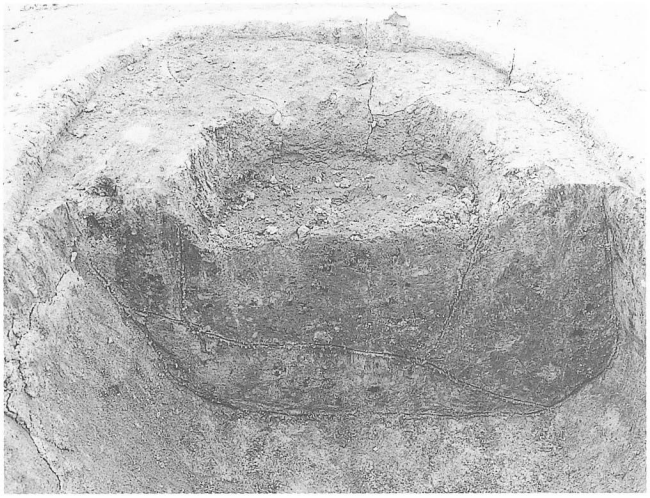
2　SB01　P2（南東から）



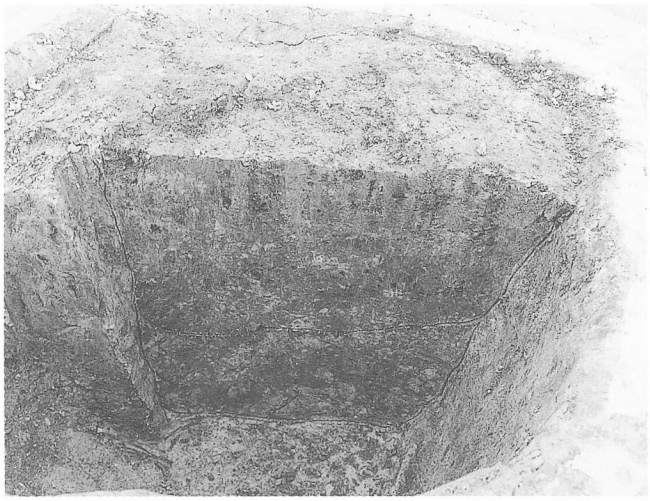
3　SB01　P3（南東から）

4　SB01　P4（南東から）

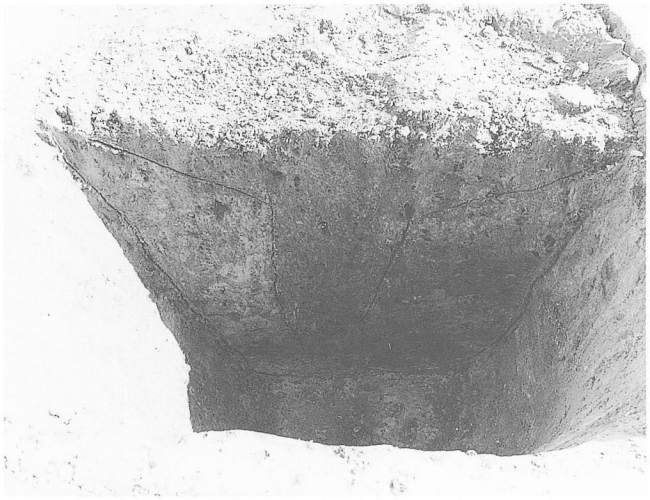
5　SB01　P5（南西から）



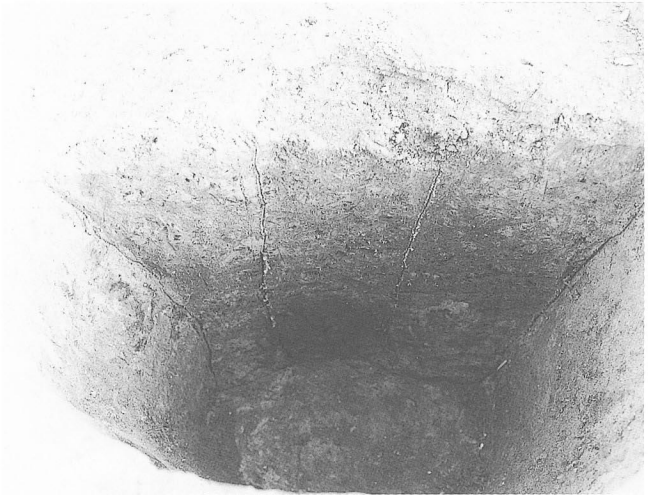
6　SB01　P6（北西から）



7　SB01　P7（北西から）

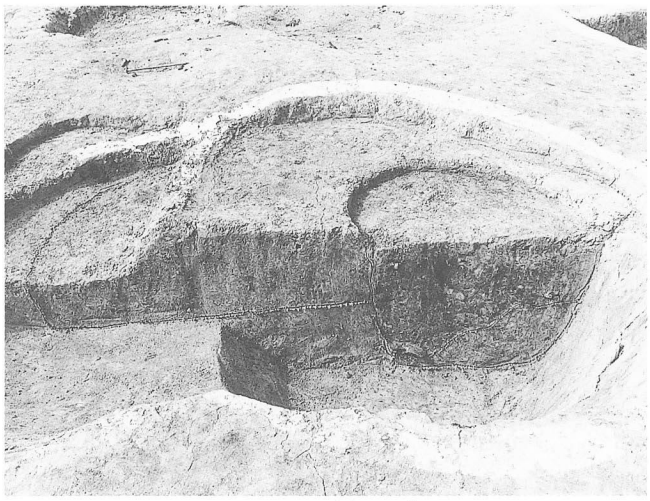


8　SB01　P8（北西から）

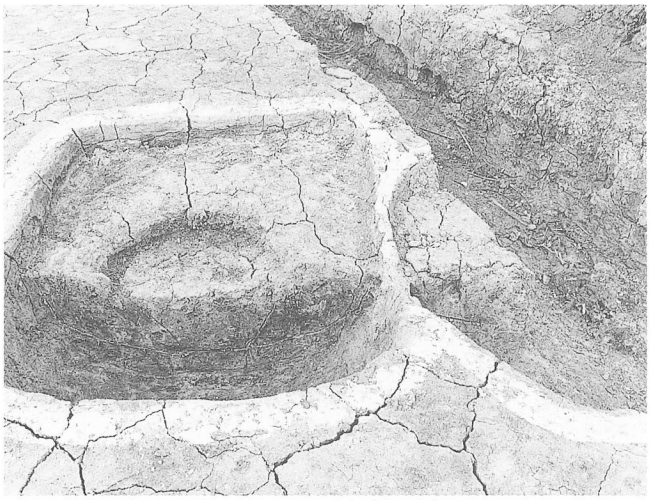


1　SB01　P9（北西から）

2　SB01　P10（南西から）

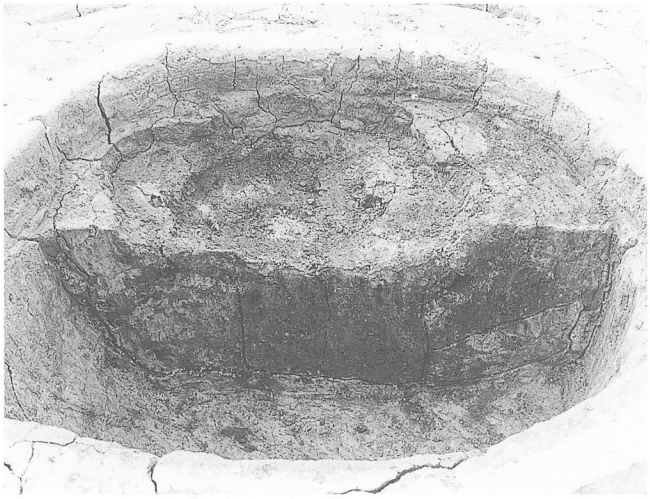


3　SB05　P120、SB06　P42（東から）

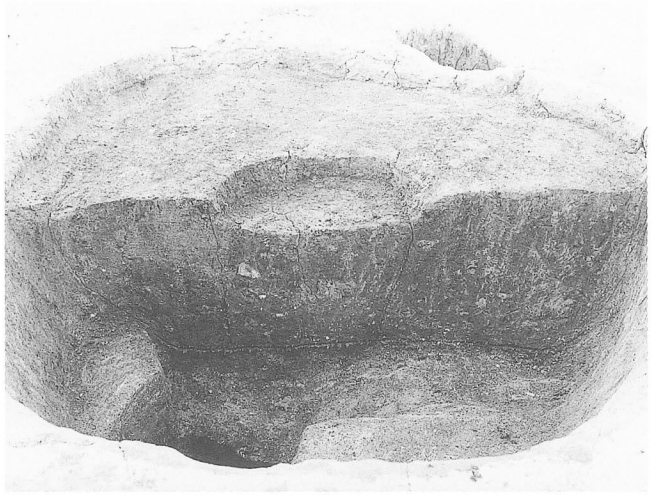


4　SB08　P90、SB09　P106（南東から）

5　SB11　P203、SB14　P270（北西から）



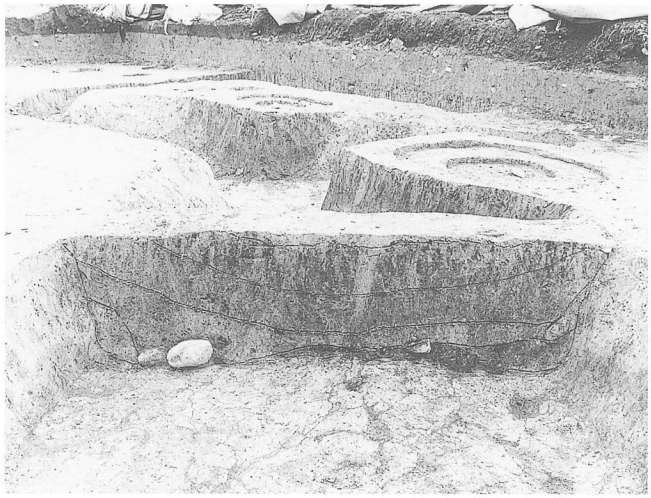
6　SB13　P178（北東から）



7　SB17　P242（南東から）

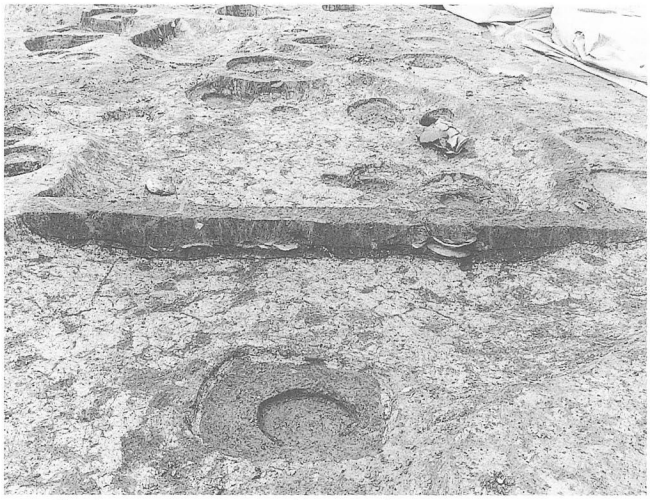
8　SB18　P304（北西から）

1　土坑 SK01 断面（北から）

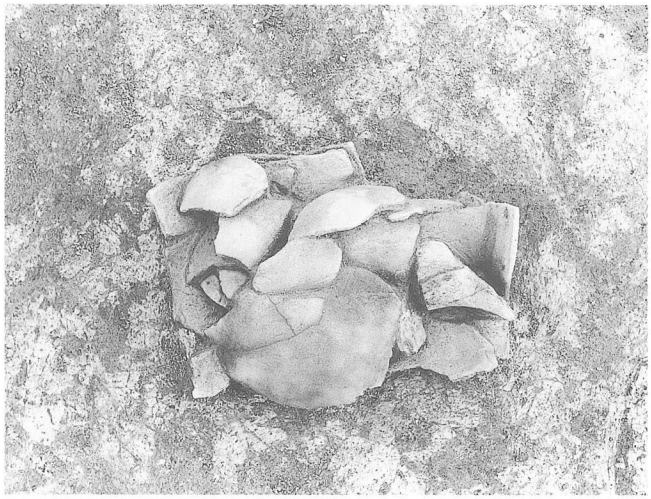


2　溝 SD01 断面Ａ（北から）

3　落ち込み SX03 断面Ｈ（南東から）



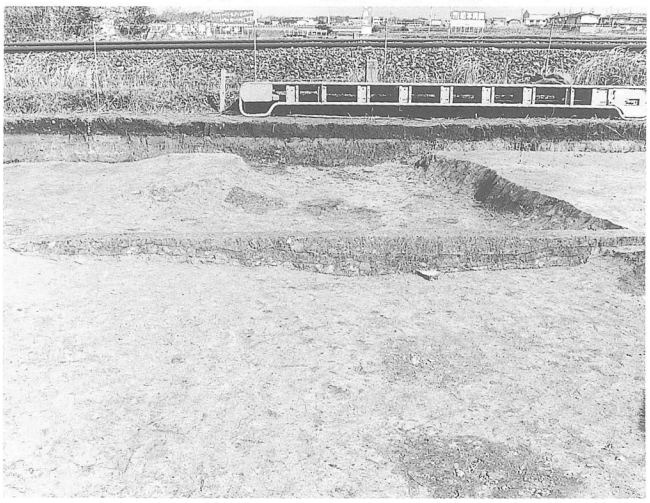
4　落ち込み SX03 断面Ｇ（南西から）



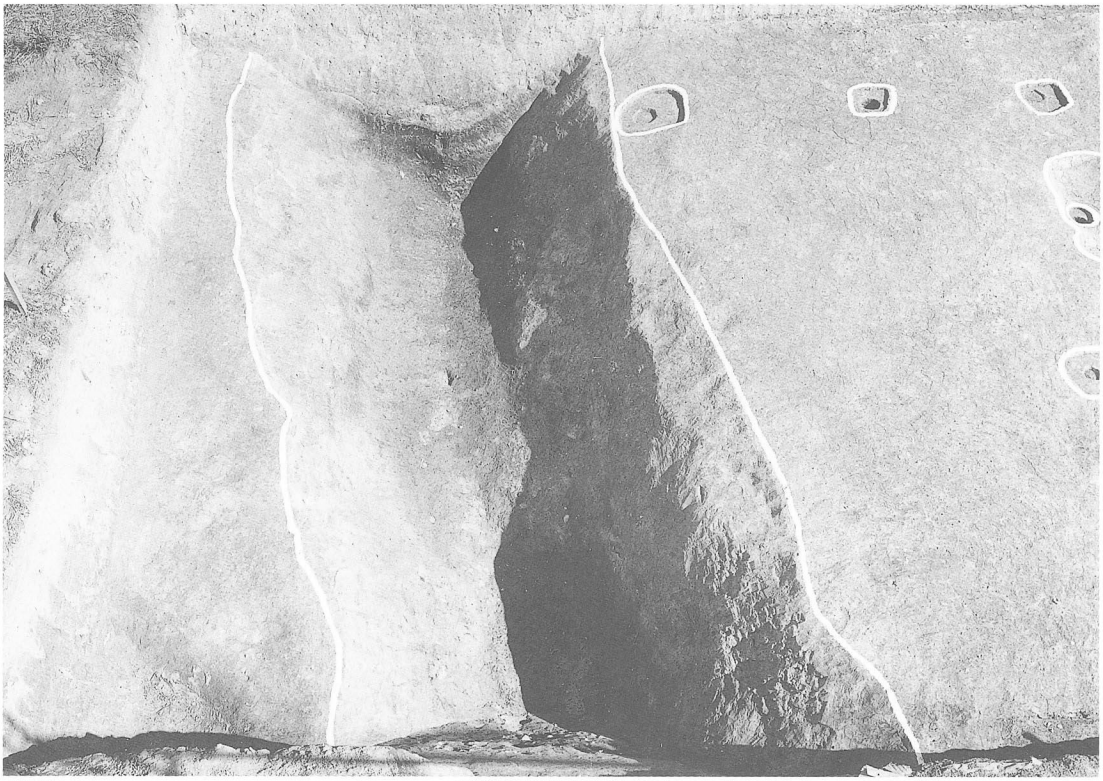
5　落ち込み SX03　土器出土状況

6　落ち込み SX03 断面Ｇ　土器出土状況（南西から）

7　落ち込み SX05（北西から）



8　落ち込み SX05 断面Ｊ（南西から）



1　溝 SD08（南西から）

2　溝 SD08 北壁断面（南西から）

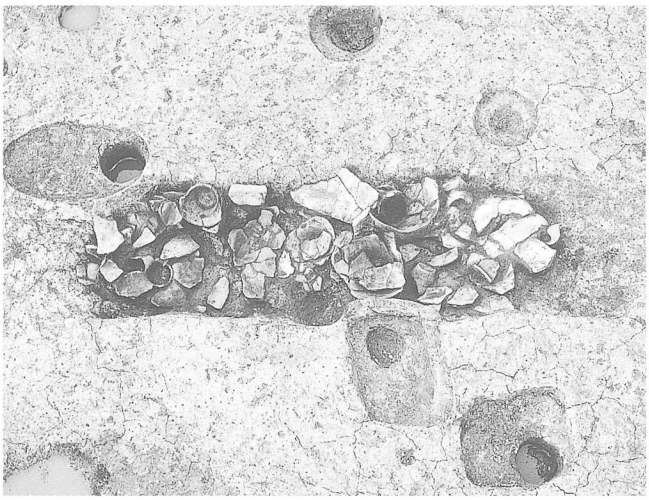
3　溝 SD08 南壁断面（北東から）

4　溝 SD08 北壁断面アップ（南西から）

5　調査区西端の段丘崖（南西から）

1　土坑 SK02 上層（南西から）

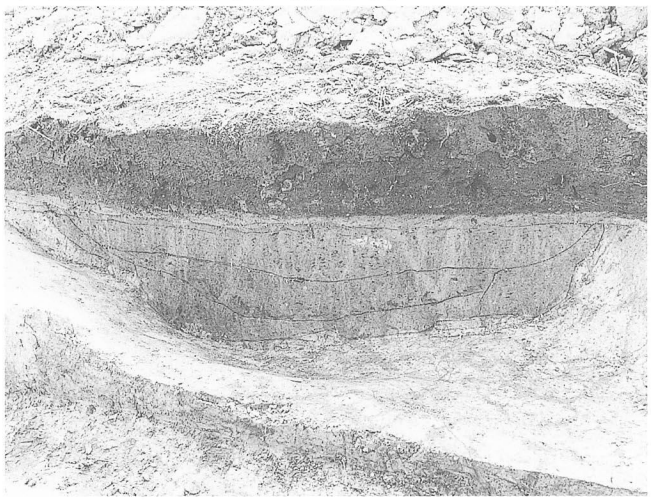
2　土坑 SK02 下層（南東から）



3　土坑 SK04（南東から）

4　土坑 SK04 土器アップ（北東から）

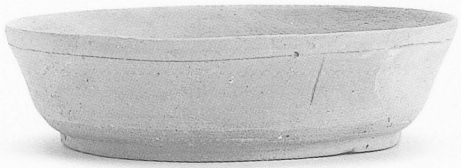
5　土坑 SK04（南西から）



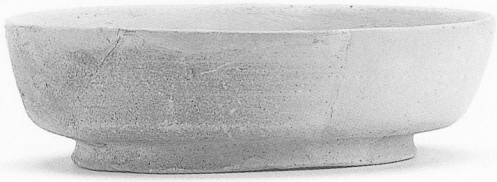
6　土坑 SK03 断面（北東から）

7　土坑 SK05 断面（北東から）

8　溝 SD09K（東から）



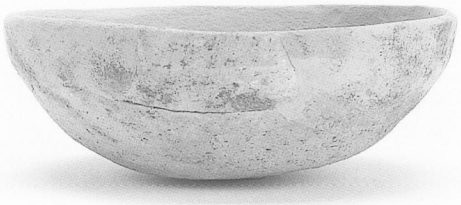
2



16

19

25



24

22

27

26

64

87

88

5

29

31

32

36

34

35

37

40

38

42

39

41

45

46

50

48

49

52

53

54

55

56

58

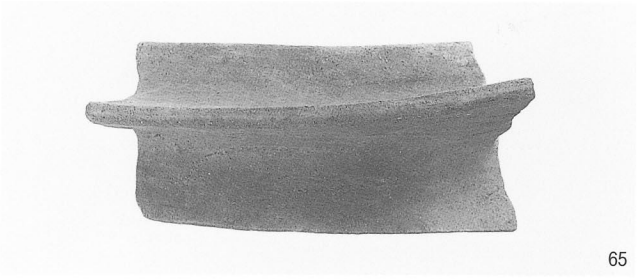
57

59

61

62

63



65

67

66

68

72

70

73

71

75

76

81

78

82

80

79

84

88

89

90

91

92

93

95

96

97

98

99

100

103

105

110

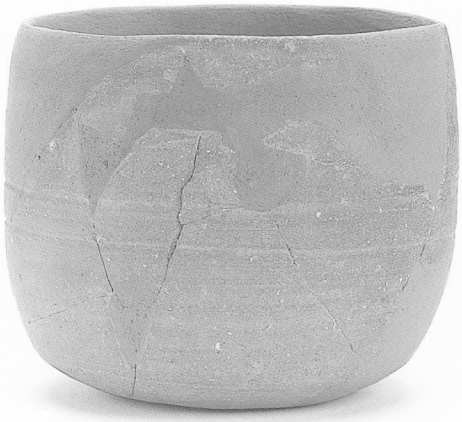
111

112

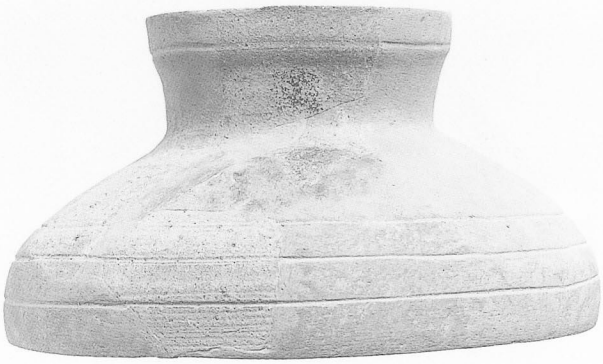
109

114

151



118



119

120

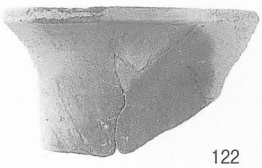
130

121

123

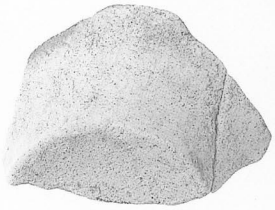
126

127



122

124



128

129

132

133

134

135

143

144

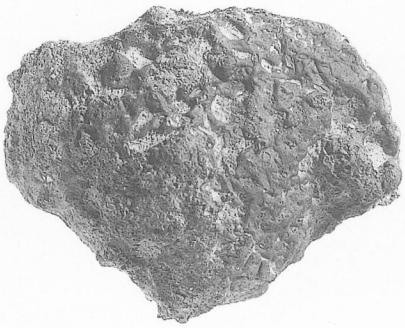
145

146

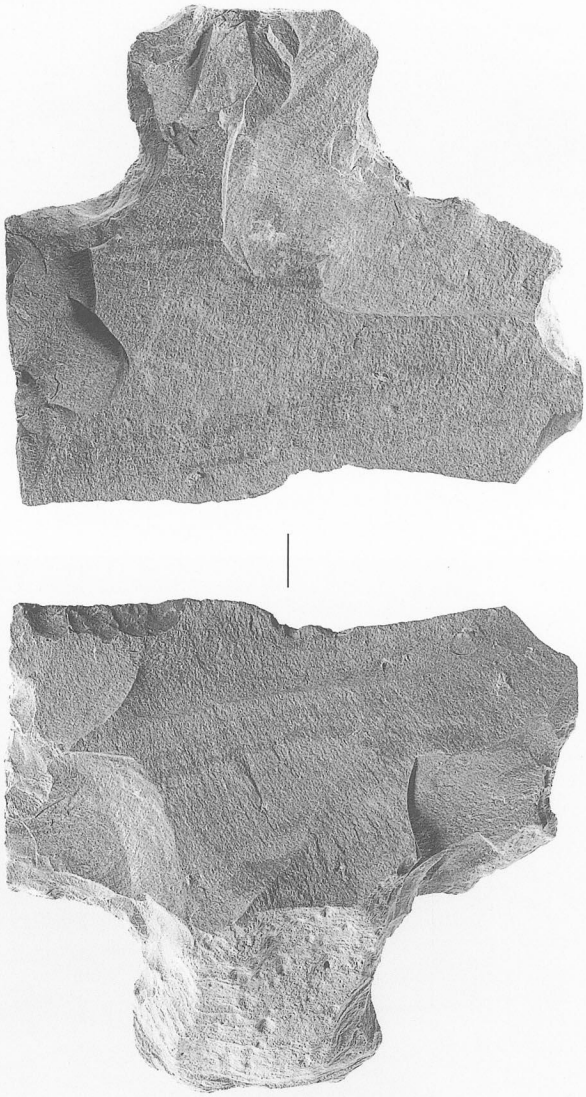
147

M1

M2


M3

S1



S2

S3

S4

S5

報　告　書　抄　録

ふりがな	さかもといせきⅠ
書　　名	坂元遺跡Ⅰ
副　書　名	ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	兵庫県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第308冊
編著者名	中川　渉・上田健太郎
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所　在　地	〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１番５号　TEL　078-531-7011
発行機関	兵庫県教育委員会
所　在　地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　TEL　078-341-7711
発行年月日	西暦2006（平成18）年12月20日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡調査番号					
坂元遺跡（さかもといせき）	兵庫県（ひょうごけん）加古川市（かこがわし）野口町坂元（のぐちちょうさかもと）	28210	990286	34度45分35秒	134度51分01秒	20000117～20000317	575㎡	ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂元遺跡	集落跡	飛鳥時代～奈良時代	掘立柱建物　20棟 柵列　1基 土坑・落ち込み　6基 溝　9基	須恵器・土師器・鉄器	円筒形土器
		弥生時代	土坑　4基 溝　2基	弥生土器・石器	大型打製穂摘具

兵庫県文化財調査報告　第308冊

坂　元　遺　跡　Ⅰ

－ ＪＲ山陽本線等連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 －

平成18年12月20日　発行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032　神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５

発　行　兵庫県教育委員会

〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10－１

印　刷　ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053　兵庫県西脇市和布町39